

常連のやごおーさんが、
大勢の女の子を連れて
きました

マスケーヌ/東風ますけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

常連のやごおーという人が大勢の女の子（V t u b e r）を焼き鳥屋連れてくるお話。しいーおーのえらいひと。それがやごおー。

追記。

タイトル変えました。やごおーの表記をアルファベットからひらがなにしました。

運営さん……許してヒヤシンス。

——追記オブ追記

ホロライブとか色んなツイートをする河童のT w i t t e rアカウントです。小説投稿の度にツイートします所以对戦よろしくお願いします。

h
t
t
p
s
:
/
/
t
w
i
t
t
e
r
.
c
o
m
/
@
S
K
f
P
B
G
o
A
O
M
g
6
O
I
T

目次

常連のやごおーさんが、大勢の女の子を

連れてきました | 1

ネギ……変えた？（イキリ） | 6

ドラゴンヤクザ | 11

圧倒的知名度 | 15

あじまるッ！あじまるッ！ | 20

ケモ耳四銃士を連れて来たよ | 24

新生代初頭 | 28

人を笑顔にする仕事 | 32

期待の超大型新人達 | 36

ロリライブ補完計画 | 40

ホロライブ！ | 43

ゲーマー | 49

恐竜の巣に裸で縛ってぶち込むぞ

53

いい加減にしてください！ | 57

シフト表（ホロメンの） | 61

夏といえば？ | 65

だからココ居酒屋やで……？ | 70

店長鳥居の愉快な一日（午前）【前編】

74

店長鳥居の愉快な一日（午後）【後編】

80

とりあえず生で！ | 84

じ……事件なんだワ……！ | 87

お腹空いてきた！	91		
あの日、我等が出会ったあの場所を、吾輩は、忘れる事はない。	95		
焼き鳥屋がつったかたーやるつていうのはそれもうつたかたーを焼き鳥にしたいつていうことですよね？	109		
どらごんのちからつてすげー！まほうのちからもすげー！	114		
弟子の為に	118		
マイ・エンジェル	122		
NEGiとネギは惹かれ合う	127		
ドドンガドンドンドン！	132		
【塩派 v s タレ派】『開戦』ツ！！			
不死鳥がネギ背負つてやつてきた…！	137		
黒企業	141		
妖怪皿洗い w w w			
((カレーライス 23℃))	154		
元気に無理なく程々に	161		
大人なお姉さん	165		
外装改築は我々が引き受けたツ！	169		
姫プ	174		
マチン船長と七味	181		

やはりbelly danceをしよう。そうしよう 190
実は、…最近 195
「はい、勝ちまん——」 200
みこちであそばう！ 209
めちやくちや最高♪わため！ 215
ハッピーバースデーハッハー 219
関係リセットボタンぽちーw 223
外国製のまな板（タコ） 230
じゃあ日本製のまな板は？ 236
うーん………無罪！ 240
おハーフ 247
実家帰るぞ 251

『あの場所』へ行こう！ 257
おいしい 261
ただいま秘密基地 273
茶と山と血 285
嗚呼、最愛の人よ。 291
娘（息子）さんを僕（私）に下さい！ 300

常連のやごおーさんが、大勢の女の子を連れてきました

「ごちそうさまでした。また来ますね」

そう言うのはワイの店の常連のやごおーさん。ワイは焼き鳥屋の鳥居っていうモンや。そしてやごおーさんはウチのお得意様だ。

帰ろうとしていたやごおーさんがこちらに向き直った。

「そうだ。鳥居さん。相談なんですけど」

「あつハイ！　なんででしょうか！」

「今度、一日この店を貸切に出来ますか？　会社の人たちを呼んであげたいんですよ。私の会社の人たちはその、タレントさんとかなので……」

「あつなるほど！　わかりました。何人くらいをご予定ですか？」

「そうですね……今回は日本勢全員なので、五十人前後ですかね。スタッフも数名くる予定なので」

「わかりました！　席は足りませんね。沢山食べる人とかいますか？」

「ええ。まあ、『ドラゴン』とかもいるので」

『ドラゴン』!?　凄いですね！　いやあワイもいつかドラゴンに焼き鳥を食べさせてあ

げたいなあつて思つてたんですよ！」

「ハハハ。それは丁度良いですね。では百人前でお願いします」

「はい！ では日程は？」

「そうですね。三日後の水曜日をお願いします」

その後も色々やごおーさんと予定を立てていった。

「ではまた三日後に」

「はい！ お待ちしております！」



ふう。こりやあ忙しくなるぞー！

先ずは鶏肉を仕入れる。ワイはいつも九州から仕入れている。今回はいつもの二倍以上だ。

そしてネギ。ネギは関東から。甘い奴と辛い奴を両方だ！

もちろん酒は忘れない。ワイも酒は好きだからな。

今回は色んな人が来るだろうから日本酒、ビール、ワイン……………色々な酒を日本各地。果ては世界からも酒を集める。バーが開そうな位の品揃えを目指す。

きつと屈強な大男もいるだろうから樽の酒も買つといた。

ふう。こんなもんかな。

……男女比聞いておけばよかったな。樽余りそう（買すぎ）。



く水曜曰く

ガラガラガラガラ。

「かっしやいー！」

!?ロゾロゾロゾロ。

!?切!?!?!の店に沢山の美少女達が入ってきた!?

髪色がメツチャカラフルや!

フア? どゆこと? 男がやごおーさん一人だけ。

「こんばんわ。鳥居さん」

「えっ。あつ。これはこれは、どうもどうも。やごおーさん。……あの! つかぬことをお聞きますが! やごおーさん!?! ……アナタ一体何者ですか!?!」

「あれ!?! 鳥居さんは知らなかつたんですか!?! あんだけ通つて会話してたの? 私
はホロライブのCEOですよ」

「し、しいーおー? (震え声)。しかもホロライブって言いました!?! ホロライブつてあの!?! バーチャルユーチューバーの!?!」

「はい。そのホロライブで間違いありません」

す、すげえ。ホロライブはワイでも知っている。前にアキバに行った時によく耳にした。思えばやごおーという呼び名も何処かで聞いたことがあるような気がする。

V t u b e rの人たちもどこかで見たような気がする。

スウー（深呼吸）。

ワイ、もしかして、超有名人達を今から一人でもてなすの!?

頑張るか！（血反吐を吐きながら）。

「えー？　ここならみんなで騒げそうだね」

「珍しいね。そらがいきなりそんなこと言うなんて」

「高性能ろぼは好き嫌いしないのだ！」

「ヴァンパイアだって好き嫌いしないよ！」

「ハーモニカ……：人生はんみようむ」

「ちやまはちやまらしく焼き鳥をちやまる！」

「今日は古のヲタ知識をいつも以上に披露してやる」

「まつり的には酔った女の子はアリ！　ムフフに持っていれば優勝！」

……：キリがないな。だって数十人いるもんな。

○期生という風の一つの塊がある程度あるらしい。

それに従って案内する。

さて！

可愛いV tuber達の疲れを癒す為に一肌脱ぎますか！

鳥居。三十二歳。超有名人数十名を全力でもてなします！

ネギ……………変えた？（イキリ）

「ネギ……………変えた？」

こう言つて来るのはカウンターに座る青髪の少女。すいせいさんだ。ん？ 名前はいつ覚えたのかつて？ ワイは焼き鳥屋だから人の名前を覚えるコツを知ってるんだよ。まあすいせいさんは美人さんだから意識しなくても覚えるけど。というかやごおーさんが呼んだ娘たちはどの娘も美人さんだ。恐るべしやごおー。

「いえ、変えてません。ワイはいつも関東から仕入れてます」

「……………そうかい。それで相談つてなんだい？」

「急に!? ねね、すいちゃんに相談するような悩みはないよ」

急に話題を振られた娘はねねさん。すいせいさんには無いものが付いてる金髪天然少女だ。

「……………（庄）」

顔怖っ！（PON並感）ナチュラルサイコパス味がある。ねねさんがビビつてしまった。ごめんな……………ワイのせいで。

「え、えつとおく（震え声）。あつ！ ねねはね！ はあちゃまと一緒によく鍋を食べに

行くんだけど、はあちやまがねねが野菜きらいだつて知ってるのに野菜を鍋に入れて来るんだよ!」

「ワイは野菜も食べた方がいいと思いますよ?」

「ふむふむ。野菜を除く時、野菜もまたこちらを除いているのだ(ドヤ顔)」

「何言うとんねん」

ツツコミを入れたのはラミイさん。水色の髪をしている大人のお姉さんだ。あまりお酒を呑まなそうな……いや、この人はワイと同じ酒を愛する匂いがする。それもかなりの。

「あつ、日本酒下さい。つまみに串なし焼き鳥とねぎだくトマトください」

やつぱり。伊達にワイも10年以上焼き鳥屋をやつてないぜ!

「ぼぼぼぼぼぼぼ」

「八尺様ですか? ワイ軽くトラウマなんですけど」

「いいえ。座長です。座長のポルカです」

ポルカさんはやけに絶対領域を見せつけて来るタイプ of 座長だ。

「いや絶対領域を見せて来るタイプの座長つてなんやねん」

ラミイさんにツツコまれた。何故心の声の内容を知っているんだ!? ちなみにラ

ミイさんは大空警察さん曰く、牛に先輩の名前を付けて乳搾りするタイプの令嬢らし

い。……………令嬢？

オマケにワミイの二つ名も持っているらしい（ねねち情報）。

「よし。ヘツシヨだ」

「凄腕スナイパーですか？」

「いいえ。ライオンです。ライオンのぼたんです」

ぼたんさんはどう見たってヒットマンかゾルディックです。対戦ありがとうございますごさいました。

「もうええわ」

「ていうか店主さん。無理すぎですよ」

すいせいさんに注意された。

「え？」

腕時計を見る。

……………確かにもう二時間もぶっ続けて激しく動き続けている。

「すいちゃんは昔居酒屋でアルバイトしてました。よければお手伝いしましょうか？」

ただし日雇いで」

「助かります！ お給料はメツチャ弾ませますね。といつてもすいせいさんみたいな方にはワシの所で働くよりもアイドル活動したほうが割りがいいとは思いますがね。

でも正直、メツチャ助かります！ 調理は間に合うんですけど運ぶのが間に合わないんですよ。マジ助かります!!」

「お給料は姉へのプレゼント代として使うので、すいちゃん的にはwin-winですよ」

すいちゃんがなかまになった！

「私も羊なら調理できるんで任してください！」

「ありがとうございます！ ぼたんさん！」

ヘッドショット姉貴がなかまになった！

「ねねもー！」

「私も大福と手伝います。ね？ 大福」

「ガオー（熊さん形態）」

「ポルカもやるかな！（ボツチになるし）」

「皆さん………ありがとうございます！」

ねぼらば+機嫌上々すいせい列車がなかまになった！

………そのときやごおーはカウンターの端でこちらを笑顔で見つめていた。

その表情からはとても愛を感じた。これがやごおーさんの社長の顔かあ。

………カツケエ！ ワイもいつか！ やごおーさんみたいなアイドルになりたい！

いや、アイドルはいいわ。焼き鳥屋だし。

ドラゴンヤクザ

ねぼらぼとすいちちゃんのおかげで余裕ができた。ワイも少しゆっくり出来そうだな。ワイはふと騒がしい集団を見つめる。やごおーさんも見つめている。

「いやーお前らと久しぶりに会えて私は嬉しいッ！ もうどんくらい嬉しいかっていったら桐生○馬が敵をぶん殴つてるときくらい嬉しいッ!!」

「ボクは別に寂しくなかったよ。だって同居してるし」

「かなた。いいから少し黙れ」

「上等だ。表出ろTEN○Aドラゴン」

「あ？ パジャマのゴリラには日本語が通じないのかア？」

「やめるのら。店主さんの迷惑になるのら」

「そうだよ。せつかくの機会なんだから」

「わためえは別にじゃれあっていいと思うよお」

このわちやわちやした集団は4期生というらしい。他のホロメンと比較してもカオスな人たちらしい（主に会長）。

他のホロメンと比較するとどうも悪友感があるというかなんというか。とにかく可

愛いというよりは面白い、癒されるという方が先に来るイメージだ。

「私が卒業した後もしつかりとアイドルしてて安心したぜ」

「どうやら会長は卒業してて、今日は招待されたらしい。」

「というわけでAOKやります」

「そうココさんが言った瞬間に店内にPCが現れる!？」

「どうゆうこつちや? 一体、何が起こったんだ!？」

「近くで一緒に見ていたやごおーさんに聞く。」

「あの、やごおーさん。どこからPCが出てきたんですか?」

「アレはシオンさんの魔法ですね」

「一斉にこれだけのPCを転送する……………。どんな人なんだろうか?」

「シオンさんはどんな方なんですか?」

「そうですねえ。私が知っている限りだと…………。「ナゲツトのソースはバーベキュー」

「扱!」と言った数週間後に「バーベキューよりマスタードの方が美味しい。マスタードし

「か勝たん」って言う人ですよ」

「だいぶクソガキですね」

「ハハハ。とても面白い娘ですよ。私の大切な社員です」

「さすがやごおーさん。社員愛が強い。アイドルの鏡だ(?)」

ココ会長が空を見上げて（天井だけど）言う。

「シオンよ……ありがとよ」

ラッパかな？ メッチャヨヨヨ言ってる。わためさんもノリノリだ。

そして4期生はAR○を起動する。

○RKは恐竜をタイム（仲間にする）をしていくゲーム。会長から広まっていったらしい（PON情報）。あのエロゲー巫女が一時的にエロゲーよりもやっていたらしい。そんな中毒性のあるゲームがARKだ（隠すのを諦めた）。

「トワ！ ボクのプテラ捕まえて！」

「無理に決まってるだろ！ ワタシかなたのプテラに掴まれてるんだぞっ！」

「わためえ！ 壁にハマったのら。助けてほちいのら。早く助けないとジャツチメントですわをするのら」

「やってみるよおらあ。やるのかおらあ！ ……やっぱりわためえには強い言葉は向かないねえ。でもわためえは悪くないよねえ？」

「まずわためえはクソザコ回線を直すのが仕事だ口オ！」

「ふえーん。会長は怖いねえ」

……癒される……浄化される……

「やごおーさん。コレがワイに見せたかったものですか？」

「まあコレが全てではないですが、そうなりますね」

「やごおーさん……ありがとうございます。おかげで心が癒されました」

「いえいえ。コレも全てはライバーの皆さんのおかげですよ。私はその活動を支援しているに過ぎないですから」

「やごおーさんっ！」

「鳥居さん。よければ他のライバーさんの様子も見に行ってみてください。もう、注文はほとんど無いみたいです」

「ありがとうございます！」

流石やごおーさんだ。気遣いが出来る。そりやあ当然社長になるよな。

ワイはやごおーさんに言われた通り、他のホロメンさんたちを見学しに行くことにした。

圧倒的知名度

「A h o y !」

「こんぺこ」

「こんマツスル」

「こんぬい」

「何か雑じやないですか?」

「「「気のせい、気のせい」」」

「ホントお?」

彼女らはホロライブ3期生。イカれた奴らだ。まあはホロメンはみんなイカれてるけどね(いい意味で) ってやごー君が言っていました(責任転嫁)。

「店主さん。ノエルは俺の女なんです、そこんとこよろしく!」

「ヤバイ! フーちゃんがバグった!」

「酔ってんのかア? フレアア。船長はまりやまりやよつてないおお……………」

「マリリンもバグった! ノエル、一緒に止めるぺこ」

「えへへ……………」

「駄目だコイツら（マジトーン）」

「ペこらさん。3期生っていつもこんな感じ何ですか？」

「いやあいつもはもうちよつと……いや、いつもこんな感じペこです」

「ハハハ。面白い人達ですね」

「いやコレでも前よりはマシペこですよ。最初はみんな個性を出すために変なキャラ付けしてたんで」

「どんな風にですか？」

「ペこらは今よりもつとペこペこ言ってたよな」

「マリリンは今もつとコスプレだもんな。ペこwww」

「あゝ？ やんのか？」

「世界樹」

「スウウ（深呼吸）……すみませんでした」

船長はそれはそれは見事なDOG E Z Aをした。その動作は洗礼されていて、どこか慣れている雰囲気だった。

ちなみにフレアさんとノエルさんは肩を組んで酒を飲んでいたり、つまみをあーんさせ合ったりしている。

「フレア。あーん」

「恥ずかしいなあ……………あーん／＼／＼」

「ふふっ。可愛い」

コレがてえてえってやつか？ よくわからないな。コレはイチャイチャと言うよりは……………もつとこう、別の……………夫婦！ そう！ 夫婦感だ！

この二人はカップルより夫婦という表現の方がしっくりくる。

ペコマリも熟年夫婦感がそこはかとなくあるような、ないような。

「ご機嫌上々すいせい列車のお届けです」

「ぼぼぼぼぼぼぼぼ」

すいちゃん（そう呼べと脅された）とポルカさんがやって来た。

両手に牛丼を持ってやって来た。

「ぼぼぼぼぼぼ、ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ（牛丼の、トッピングはココに置いておきます）」

ワイらは牛丼を受け取り、いただきますをした。牛丼のお味はとてもとても美味だった。お味とか美味とか、言い方がお上品ですわね？

「だんちよ、牛丼が好きなんだよねえ」

そう言いながら牛丼を3杯を一瞬の内に食い終わる。

「ノエル、よく噛みなよ」

「ゴリゴリゴリ。ゴクツ！うん、フレアの言う通りにする」

「フツ………おもしろー女」

「やっぱりフリーちゃん酔ってる？」

「大丈夫か？ フレア？」

「いやまず、牛井から出ない音が鳴ってましたよね？」

船長とペこらさんが確認する。酔ったんじゃないか。と。ワイも酔ってると思う。花京院の魂を賭けよう。

「いや、全然酔ってないよ」

「シラフでこれペこか!？」

まさかまさかの酔ってない。素でこれか。中々イカれた奴らだ（再認識）。ってやごおー君が言っていました（責任転嫁祭り）そしてごめんな。花京院……。お前の魂勝手に使って勝手に負けたわ。恨むならD I Oを恨んでくれ（伏せ字の意味）。

「うぎやああアアアアアアアア!!!」

「何だ!?! 何処からか叫び声が」

「あー。アレはスバル先輩の叫び声ですね。船長が保証しますよ」

「大方、シオン先輩とあくあ先輩の戦いの巻き添えを食らったとかその辺ペこですよ」

「一応、店主として確認しに行ってください」

「いってらっしゃい。だんちよは牛丼食べてるから」

「気をつけてね。私はノエルの食べる様子を見ておかないと食べ過ぎるから」

「気をつけます！ では！ 失礼します！」

こうしてワイは2期生の元へと駆けつけるのであった。

ロボ子さんとえーちゃんがモニターに睨めっこしてた。

「その画面巻き戻せるう?」

「ん? あっ! はい」

(シオン! 余の手刀を喰らえ!)

ズバシヤアーン!

「ふっ! 恐ろしく速い手刀……ボクでなきや見逃しちゃうね!」

「いや、人間の私にも見えるんですけど」

その頃別室では2期生の様子を盗撮して見返す二人の姿があつたんだとかなかつたんだとか。まる。



「んで余がちよこ先を治そうとフルパワーで手刀を叩き込んだら間違えてスバルに当たってしまった。……まあ別に棍棒で殴っても大丈夫なタイプのアイドルだから時間経過で勝手に復活する余!」

「成る程。で、何であくあさんとちよこさんが倒れてるんですか」

「スバルの仇」

「ん?」

「スバルの仇」

「え？ ごめんなさい。ちよつとよく聞こえない……………」

「だからスバルのかたき」

「やったのアンタじゃねーか!!!!」

「余は可愛いから何をしたって許されるのだ」

「ひでえ。鬼か？ アンタは？」

「鬼だが？」

「あつ（察し）。そういえば今回来てる人達は人間じゃない人の方が多いくらいだったわ……………」

「あじまるあじまる」

「あていしあていし」

「ガチイ？ ガチイ！」

「ば、バーベキューよりマスタード……………」

みんな壊れたおもちや状態だ。どう收拾つけるんだ？ この状況。

とうるか本当にシオンさんからはクソガキムーブを感じる。寝言だけでクソガキ感があるのはこの人だけじゃないかな？ わからせなきや（使命感）

そして、

何故か、俺の背後にあやめさんが近づいて来た。

「そしてスバルの仇イ！」

「グワァー! ひでぶ」

何故か手刀をぶち込まれた……………い、いしき……………が、と、お、く……………な……………ゆ……………。

こうして俺は気絶した。

この始末??はてさてこの先、どうなりますことやら。

ケモ耳四銃士を連れて来たよ

……知らない天井だ。

……………違う。知ってる天井だった。ワイの店や。

そしてワイの頭には柔らかい感触が伝わっている。

「おはみよくん」

ワイの視界に映ってきたのはワイを膝枕したミオさんだった。

「……………あの。私はどれくらい意識を失っていましたか？」

「うーん。ここに運ばれて大体一時間ってところかなあ」

「……………その間ずっと膝枕を？」

「アハハツ／＼／　まあ、そういうコトになるのかなあ」

「結婚しよ」

「いきなり求婚?!」

「逆に考えてほしいんですが、まだ知り合っただばかりの男を丁寧に関抱してくれる美少女がいたら求婚しますよね？　そういうコトです」

ミオさんとワイがイチチャイチャしている（鳥居目線）

「こんばんきーつねー！」

フブキさんが上から降ってきた。

……………あれ？　うちの店は二階が無かったハズ……………。

……………。

これ以上は深淵を覗くのと同じなのでやめよう。と、ワイは思考を打ち切った。

「店主さくくん？　ウチのミオちゃんに何いつてんですかア？　それも膝枕のままです！」

羨まs……………ゲフンゲフン。はしたないですよ」

「いま羨ましいいつて（言つてないです）。……………まあ確かに膝枕のままでは駄目ですよ。すみません」

「ウチは別に気にしてないよ」

ミオさんは優しいなあ。どこかのねこもどきと違って。

「白上はねこじゃないにやあ」

「ねこやんけ」

ミオさんとハモった。やっぱ結婚する？　相性良いと思うよ。歳離れてるけど。

ふと、辺りを見渡してみた。

するとワイは部屋の端に目が止まった。

「どう？　おがゆ？　こおねの気持ちいい？」

「そこはかとなく気持ちいいよ〜」

そこにあつたのはおかゆさんの頭にかつおぶしをふりかけるころねさんの姿だった。

「こおねもう我慢できない!」

ころねさんはそう言うと、かつおぶしを一気にふりかけた!!

バサア、バサア。とかつおぶしが舞う。

……………片付けるのはワイなんだけどなあ。ま、いつか。

一気にかつおぶしをふりかけられたおかゆさんの表情は満更でもなさそうだ。

「気持ちいい! 最高だよ! ころさん!」

「おがゆが喜んでくれるならこおねいくらでもふりかけるよお」

「ころさん!」

「おがゆ!」

「ころさん!!」

「おがゆ!!」

……………居酒屋の片隅で愛を叫ぶケモ耳達は、それはそれはてえてえだった。

コレがホロライブ……………!

コレが、やごおーさんが見せたかった物の一つ……………!

「フハハ。店主さん! コレが白上たち! 「ゲーマーズ」なのだ!」

「成る程！」

「ウチたち本当にゲーマーズかな？ ケモ耳四銃士とかに改名した方がいい気がする」

「ボクはこんな感じだからこそ『ゲーマーズ』だと思っけどね」

「おがゆと同じでこおねもそう思うよ」

「……………ゲーマーズ……………か……………」

ワイも、もつともつとゲームをやるうかな！

そして店内にゲームコーナーを作ろう！

一週間後のワイは、アイデアをくれたゲーマーズに感謝するのであった。

それはまた、別の話。

新生代初頭

ゲーマーズとの交流を終えたワイは、まだ行つてない一期生の元へと向かった。

やはり一期生ともなるとホロライブを形成した人たちという事になる。さぞ清楚な人たちなんだろうなあ（白目）。

今までのホロメンを見る限り清楚である可能性が限りなく低いと思うが、まあワンチャン清楚かも？

そんな、淡い希望を抱きながら一期生のところへ向かった。

ガチャツ。

「はあちやまつちやまく〜！ はあちやまつちやまく〜！」

「人生はんみようむ！ 人生はんみようむ！」

ドアを開ければそこには恐竜のコスプレをした女の子たちが……！

みんなは見られるとは思つてなかつたらしく、口をあんぐりと開けている。かわいい。い。

はあちやまさんははあちやまの服を着ている。

アキロゼさんはトリケラトプスの服を着ている。

「みなさん何をしてるんですか?」

とワイが質問すると一頭身の白上が………!

ん? 一頭身?! ゆっくりじゃあるまいし。一頭身のフブキさんなんていない、いない。と目の前のぷにぷにとした一頭身ゆっくり白上を見ながら言う。

「ゆっくりしていつてね。白上だよ。ゆっくりしていつてね!」

「ゆっくりやんけ!?! ねこじゃなくてゆっくりやんけ!?!」

「白上がゆっくり説明するよ。一期生は白亜紀に滅んで、そして新生代になったから繁栄したんだよ! ゆっくりわかってね!」

「いやどうゆうことだつてばよ?」

まあとどのつまりゆっくりらしい。

「せいすいッ! せいすいッ!」

「かぶかぶ! 格を上げるぞ〜」

まつりさんはプテラノドンみたいな服を着ている。

メルさんは肌の露出面積が高い、鳥っぽい服を着ている。鳥つてことは調理していいんですかね? コウモリ焼きがあるし、ヴァンパイア焼きがあつてもいいよね?

やらんけど。

「みんなはARKのやり過ぎで恐竜に定期的になっちやうだよ。それで今回は新生代ってワケ。白上も正直よくわからない」

ガチャ!!!

扉が開く。そこから出て来たのはやごーさんだった。

「あつ皆さん。こんなところに居たんですね。せつかく鳥居さんの所に来れたので記念撮影をしたいなと思っただんですよ。さ、一期生のみなさん！ 行きますよ。あつ鳥居さんは是非真ん中へ!!」

「フア!? 記念撮影………ですか?」

「あつ。駄目ですかね?」

「そんなの勿論………」

良いに決まってるじゃないですか！ 早速行きましょう!」

「ちやま?」

「はんみようむ?」

「せいすい?」

「かぶ?」

四人はまだ狂気に満ち溢れている。恐るべしARK…!

「みんなそろそろ戻って〜!」

フブキさんはそう優しい声で言いながら一期生の皆さんをハリセンでしばいている。

「ハッ!」

良かった。正気に戻った様だ。ヨシ! ワイはシャキッと気合を入れてこう高ら

かに叫ぶ!

「創りに行きましょうか!」

ホロライブ in 焼き鳥屋「鳥居」の思い出を!」

ワイ達は写真撮影のためにホールへと戻ることとなったのだった。

人を笑顔にする仕事

ホールに移動したワイラはある事に気がついた。えーちやんさんが声を上げる。

「h o o Xが居ない……?」

「探しに行きましよう!」

えーちやんさんにつづいてそらさんも声を上げた。

「新人の探索は0期生で行うのが筋つてもんだよにえ」

「私の方が新人なんですけど大丈夫かな?」

みこねえさんとA Z k iさんが立ち上がる!

「シュツシュツシュー」

すいちちゃんも行くらしい。

「ロボ子も着いてくよ」

ロボ子さんは腕をパカパカさせている。

「ワイも同行しよう」

「鳥居院!」

「えーちやんさんノリが良いですね」

「ええまあ。私この居酒屋来たことがありますし」

「ん？」

「ん？ 覚えてませんか？ 日曜日によく来てましたよ」

「あつ！ デロンデロンに酔ってやごおーさんに介抱されていた人ですね！」

「……………ふふつ。えー？ いつもやごおーさんに迷惑かけてたの？」

「ち、違うんだよそら!! 私もストレスが溜まるっていうか!! その!! ……………ごめんなさい」

えーちゃんさんはそらさんが剣を取り出したタイミングで謝った。……………日本には銃刀法という決まりがあるんですけど……………なんでもないです。

そらさん怖。逆らわない様にしとこ。とても自分と10歳以上離れているとは思えない凄みがある。まあそらさんは可愛いから武力関係なく、誰だっっていうことを聞いてしまうと思うけどな。

「まあまあ。えーちゃんさんはいつも頑張ってくれていますから。私も介抱のしがいがあつてもんですよ」

「まあ。やごおーさんがそう言うなら……………えー？ 次はないよ？」

「気をつけます」

やごおーさんは優しいなあ。流石！ ホロライブの中では一番清楚なアイドルだ。

さて。

「そろそろワイ達はh o o Xを探しに行きませんか？」

「すいちゃんもそう思っていました」

「ロボ子もそう思っていました」

「コンデンサーマイクもそう思っていました」

「コンデンサーマイクって意思あつたの!?(驚愕の事実)」

「テヘツ?」

あら清楚(オネエ風)。ホロライブ三大清楚はAZKiさんとそらさんとやごおーさんだな(確信)。

「この中で!h o o X見た人いますか?」

すいちゃんがみんなに問いかける。

「ハイ! トワ見ました!」

手が上がったのはトワ様だった。……………あれ? ワイいつから様付けで呼んでたっけ?

トワ様には様つけたくなっちゃうんだよな。

……………今日一日でワイもだいぶホロライブに染まったなあ。

「トワはh o o Xを仮眠室で見ました!」

「ナイス情報！」

ハイテンションすいちちゃん。

「仮眠室へレッツゴー！」

アルティメットロボ子さん。

「手のかかる後輩だにえ」

赤ちゃん。

「コンデンサーマイク」

コンデンサーマイク。

「見つけたらどうしようかな♪」

バーサーカー
狂戦士

んー。やっぱりホロライブはホロライブだな！（称賛）

それじゃh o o X探しの旅を始めましょうか！

期待の超大型新人達

前回のあらすじ??

みんなで集合写真を撮ろうとしたんだけど……アレ? h o l o X が居ない!?
大変だ! 早くh o l o Xを探さなきゃ(使命感)。え? 0期生もついてきてくれるんですか!! うれしい!

っていうのがあらすじだよ。

「鳥居さん? 口に出てるにえ」

「え? 聞こえてました? 心の中で喋ったと思ってたんですけど。ちなみに何処から聞いてました?」

「前回のあらすじ??からだにえ」

「最初つからじやないですかー!」

みこさんと話してるとすいちちゃんが腕をブンブン振り始めた。

「みんなをお酒にして遊びた〜い!!」

すいちちゃんが壊れた。

壊れたすいちちゃんの後ろにロボ子さんが近寄る。

ドスッ!

……………恐ろしく速い手刀。ワイでも見逃しちゃうね。

というか殴って直るのは昭和の家電だけで。

「ふっ! 高性能なボクにかかればこのくらい造作もないのだ!」

「へー。そうなんですか。じゃあ今度の公式番組ではあちやまさんとタイマンしてもらいますね」

えーちゃんさんのあやめ鬼さんのような提案をロボ子さんは首を振って否定する。

「それだけはボクもキツイ(叫び声が耳に残るから)。考えたことあるかい? ずっと『はあちやまっちゃんま』って耳元で言われ続けるの」

それはワイも無理だな。耐えられるのは数名だけだろう。

「私に行けるけどね」

流石AZKiさん。レベルが違いや。

ワイたちが茶番を繰り広げているとそらさんが前の方へ指を差した。

「みんな! たぶんhooXを見つけたよ!」

「ふっ。センパイに手間をかけさせるなんてhooXもまだまだだにえ」

「でもみこちゃんもエリトラ燃やしてるよね?」

「……………そらちゃんは卑怯だにえ」

「マリンさんは世界樹を。みこさんはエリトラを。ホロライブって火炎系能力者でもいるんですか？」

「そらと私の二人の時点では居なかつたんですけどね。一体いつからこうなつてんでしょうか？」

さて、トワ様からタレコミがあつた部屋へとたどり着いた。

扉を開けると中には四人のロリがいた。

ん？ h o l l o X って確か5人だつたよな？

一人足りなくないか？

「吾輩以外の3人は皆、謎の薬をこよりに仕込まれてしまつたんだ」

「「そうす〜い」」

首輪をしたロリが話しかけてきた。どうやらこの娘が総帥らしい。

ワイは屈みながら女の子に聞く。

「おなまえは？」

「吾輩は子供じゃない！ こう見えて酒も飲めるんだ！」

「おなまえは？ ぱぼとままはどこ？」

「フツ。吾輩の名をそんなに知りたいか？ いいだろう！ 教えてやる！ 吾輩のお名

前は『ラプラス・ディア・ハイエスト・デスサーティン・ダイナ・アートオブインパク

ト・サイン・皇（おおとり）・ロード・オブ・The・ダークネス』だ！……あとば
ぽとままは実家に居る」

あらやだ素直。可愛いな。

「ラブどのはねっ！ お母さんのつくったはんばーぐがだいすきなんだよ！」

「コラッ！ いろは！ 勝手に吾輩の好物をバラすな！」

ラブラスさんといろはさん？ が追いかけてこを始めた。

その様子をそらさんとえーちゃんさんは子供を見守るような目で見つめている。

「うんうん。私が始めたホロライブはしっかりと繋がれているね。嬉しいなあ。えーは
どう思う？」

「やっぱり私たちの思いが繋がれているっていうのは嬉しいし、ココまで来れたのは色
んな人たちの協力があつてこそだと思つたね。やごーさんやスタッフ。タレントと
ファン。誰が欠けても今の『ホロライブ』は無かつたんじゃないかなあ」

やっぱりアイドルである以上色々な問題はあるけど、みんなで頑張れば乗り越えられ
る。というえーさんの気持ちをワイは感じた。

さて、犯人のピンクコヨーテを探しますか！（唐突）

ロリライブ補完計画

ロリ化したh o o l o o X の三人は0期生にホールまで送ってもらった。残ったワイと山d……………ラプラスさんは頭ピンクコヨーテの探索へと向かった。ワイ達は仮眠室の更に奥。「金庫室」にこよりさんが居ると推測して金庫室を目指した。

……………ん？何で焼き鳥屋なのに金庫室なんかあるんだって？そりゃあ売上とかを保管する為ですよ。

……………え？預ければ良いじゃないかだって？

……………その発想は無かったワ！

「もしかして店主さんてPONなのか？」

「あれっ？また心の声が漏れてましたか。私はPONじゃありませんよ。山田さん」

「だから !! 吾輩のお名前はラプラス・ダークネスだと何度も言ってるじゃないか
！」

ラプラスさんはダボダボな服の袖をブンブンと振ってこちらを威嚇してきている。
可愛い。

「ハハハ。ヂョーダンですよ。ヂョーダン」

「吾輩。長く生きていたが、初めてだ。ジョーダンをチに変えて言うやつなんて今まで一度も見たことがなかったぞ。店主さんは多分。ホロライブの面接受けたら受かりますよ。ぶっ飛んでるって意味で」

「まあまあラプラスさん。早くこよりさんをとっ捕まえて、みんな写真撮りましょうよ！」

「それもそうです……それもそうだな！よし！わがはいについてこい！」

絶対今、「それもそうですね」って言おうとした。

絶対育ちの良さが出ちゃったよね？

ラプラスさんは宣言通り先頭をちよこちよこ（ガチイ！）と歩き出した。こうして歩いてみると本当にラプラスさんは背が低いなあ。まるで歳の離れた妹ができた様な、そんな気分だ。

さて、こよりさんが多分、居るであろう金庫室の目の前までやって来た。大方、ロリ薬をココに保管して店に来るたびに盛ろうとするつもりなんだろう。とワイが推測を飛び交わせているとラプラスさんが何かに気がついた。

「店主さん。何か人影がヤケに大きくないか？」

「確かに。何かおかしいですね」

ワイ達は扉のスキマから室内を覗く。そこに居たのは！

「ロリロリきーっね！」

……………白上い。

「ゴクリ…コレが…！ロリ薬！ほ、本当にコレを使えばホロメンをロリにできるの？こよりー！」

……………まつり姫え。

「勿論ですまつり先輩！既にh o o X で検証済みです！」

……………そして主犯のピンクココヨーテ。

だめだコイツら……………ロリコンだ！

コイツらだけはロリ薬を手にしちやアカン！

「ラプラスさん！」

「任せろっ！第一位階魔法「ライトニング」！」

ラプラスさんは手から小さな稲妻を出した。その稲妻はロリコン三人衆へと向かっていき、三人を感電させた。

「「あばばばばばば！！！！」」

バタツ。と三人が倒れる。気絶した様だ。さて、やごおーさんに突き出すか…。

ホロライブ！

「お前からホント悲しき獣だな」

スバルさんはロリ薬を使おうとした三人に対して手錠を嵌めながらそう言った。

やごおーさんに突き出そうとしたんだが、どうやらホロライブには大空警察なるものがあるらしいのでそこにこの「悲しき獣たち」博士 まつり姫 白上イを引き渡した。

パン！ と手を叩いたのはえーちゃんさん。

「さ、皆さんで集合写真を撮りましょう！」

えーちゃんさんの一声で皆さんが一瞬で整列する。流石マネージャーの顔だ。皆さんもアイドルなだけあって行動がまとまっている。

ワイは何と真ん中にやごおーさんと一緒に並ばせて貰えた。やごおーさんが話しかけてくれた。

「鳥居さん。本当に今日はありがとうございます！ 今日一日でわかっちゃったと思うんですけど私の所のタレントさんはかなり個性が強いので、中々飲食店とか行けなかったんですよ。そんな中で鳥居さんは『ホロライブ』を受け入れてくれた。その事実

が何よりもありがたかった。鳥居さん。本当にありがとうございました!!」

「こちらこそ! 貴重な体験をありがとうございました! ワイの店で皆さんが楽しんでくれたことだけでワイは幸せです。またライバーさん達が来れる様に店内を魔改造しておきますんで!」

「みんな撮るよ〜!」

ワイ達が思いを伝え合っているとカメラを固定し終えたそらさんが時間差のシャッターを切る。

10!

「そらは楽しめた?」

「勿論!」

9!

「今度プロレス出来る様に店主さんをお願いするにえ」

「テトリスも出来る様にしてもらっちゃお!」

「今度溶岩に沈み大会と手刀大会開ける様にしてもらおう!」

「カラオケ置いてみんなと歌いたいな!」

8!

「えー。この度は私がロリ薬を悪用しようとした件について、えー。説明させて頂きま

す

「しゃつぎいきーつね!」

「かぷかぷかぷ! (私の同期がごめんなさい!)」

「はあちやまつちやまく (はあちやまつちやまく)」

「そんなことより私のプロテイン知らない?」

7!

「次はふりかけをかけてもらおうかな」

「おがゆの為ならこおねふりかけかけれる!」

「にどめのきーつね!」

「いやあくホロライブは今日も平和だなあ」

6!

「マジでこの悲しき獣たちどうしよう…」

「ちよこがおねえさん好きに開発してあげよつか?」

「余は牢屋に入れるのがいいと思う余」

「あていしは動物園に入れるのがいいと思う」

「マスタートドの海に沈める?」

5!

「落ちてたプロテイン飲んだらムキムキになれるかな？」

「ふっ。おもしれー女っ！」

「マリリン」

「ぺこら。わかってるよ。キャラ崩壊って奴だろ？」

4！

「LEGO? LEGOってなんだ？」

「TENNSIよく聞け。LEGOっていうのはハメるタイプのあさココの縦vers
ionだ」

「よしわため！ LEGO買ってくるのら！」

「まずいですよ！ でも買っちゃう！」

「懐かしいなあこの感じ」

3！

「ほほほほほほー！」

「おまるんが壊れた！」

「殴れば直るんじゃない？」

「ワミィ」

2！

「博士にはいろいろの耳しやぶりの犠牲者になってもらうことになったぞ!」

「シャワシャワ………シャワシャワ………」

「いやー! 耳がムズムズする!!」

「いやコレセミだろ」

「いろいろはセミのセミナーになるべきだと思う」

「!」

「鳥居さん。また日曜日に会いましょう!」

「はい! お待ちしてます!」

「みなさーん? セーのっ! はい?」

「!!!チーズ!!!」

0!!!

『カシャ!』

居酒屋『鳥居』はこれからずっと、ホロライブのライブが集まる場所になった。

多くのV t u b e rが焼き鳥屋に入っていく風景を見たところ、サラリーマンは、後に

こう語る。

「エデンここが天国か………」と。

ゲーマー

四日後……………。居酒屋鳥居には四匹の獣が訪れた。ちなみにそのうちの二匹は仮釈放中のネコ……。

「キツネじゃい！」

キツネだったわ。

「ご注文は？」

「パンで」

「ボクはおにぎりです」

「ウチはなんかみんなでつまめそうなモノで」

「ロリ薬で」

「ロリ薬以外はメモしてつと……。はい！少々お待ちください！」

ワイは注文の品を作る為に厨房に向かった。

パンはこの前、知り合いから仕入れたフランスパンにガーリックを贅沢に使って作る。おにぎりは東北で取れた食べ応えのある米を使って作る。具は昆布やおかかとか梅

干しとかにしよう。

みんなでつまめそうなモノといえは枝豆と焼き鳥だ。コレは例の如く九州の鶏肉を使う。枝豆は故郷の農家さんからもらったとれたてを使う。

ん？ おにぎりはともかくパンは何であるんだ？ 居酒屋だろ？ だって？

まあそりやウチは客層が濃いからさ………ね？

まあまだマシさ。どっかのドラゴンだったらこうはいかない。

さおといは。

「店主さん！ ワタシはダイオウイカが食べたい！ 用意したから捌いてくれ！」

とか言つてダイオウイカ持ってきたし。

おといは。

「オイ！ 店主さん！ ドラゴンのシツポつて食べるらしいぜ！ アニメで見たんだ！

コレやるから焼いてくれ！」

とか言つて自分のシツポ持つてくるし。

昨日は。

「オイ！ 店主！ ゴリラつて食えると思うか？」

「ん〃!!! ん〃ん〃ん〃!!!」

とか言つてガムテープを口に付けられたかなたさん持つてくるし。

まあそういうことと比べればパンがあつたりロリ薬があるのはなんらおかしくないのだ。

おかしくないのだ………（震え声）。

おっと。完成だ。

注文の品をゲーマーズの所は持っていく。

「はい！ パンとおにぎりと焼き鳥と枝豆とチュールです！」

「わーい！」

「ねえ？ 何で白上だけチュールなの？」

「じゃ！ ワイはやごおーさんの所に行くからごゆつくり！」

「逃げるな卑怯者！ 逃げるな！ 白上はいつだって。秋葉原の監視カメラから監視しているんだ！ だから逃げるな！！」

「にーげるんだよ！ スモーキー！」

ガシッ！

やごおーさんの方へ亡命しようとしたワイの手を掴む者がいた。

「ミオしや!!」

「逃がさないぞ〜？ 今日ゲームを設置する会議の日だからね」

「そうだよお。こおねも早くゲーム置いてみんなと遊びたい！ 遊びたい！」

「ゲーム置いたらもつと面白くなると思うんだよねえ」

ゲームマーズのみんなに止められちゃ仕方ない。話し合うか。

「で？ なに置きます？」

「白上はあのプロレスのやつがいいな！」

「こおねはマイクラがいい！」

「ウチは無難にマリパかマリカーかな？」

「ボクはなんかアーケードのゲームが一つ欲しいなあ」

「なるほど。なるほど。じゃ！ 置きますか！」

「「「イエーイー！」」」

ということとでゲーム機仕入れます（唐突）。

ま、ドラゴンのシツポ焼くよりは簡単だな（確信）。

恐竜の巣に裸で縛ってぶち込むぞ

「お前マジでARK置かないとかふざけてんの？ 恐竜の巣に裸で縛ってぶち込むぞ？」

「タイトル回収早いですね？ ココ？」

「さんを付けろよ！ デコ助野郎！」

「食えー！ー！！！！」

ワイはそう言いながらココさんの口にバナナをぶち込む。

モグモグ…。

………おかしいな？ 普通はセンチティブになるのにココさんと全く色気を感じない。

あつ（察し）。

「普段からヤベエもんばつか食ってるから色気ゼロなんだ！ ワイはどうやら世紀の大

発見をしてしまった様だ…」

「恐竜の巣に裸で縛ってぶち込むぞ？」

「今日それ好きですね」

「まあな。にしてもARK置かないのか？」

「いやだつて取り合いになるでしょう？　というかこの前みたいにシオンさんの魔法とかでワープして貰えばいいじゃないですか」

「……………確かに」

ガラガラガラ！

あつ。お客さんだ。

「こんばんわー！」

「こんばんきーつねー！」

来たのは白上イ。とフレアさんだった。

どうやら白上イ！　が焼き鳥を食べたくなつたらしくその時にフレアさんをさそつて今に至るそう。

「いやあーここの焼き鳥は美味いから食べに来ちゃうよ〜」

「ココの焼き鳥…？　フブキ先輩…私は鳥じゃなくてドラゴンです。鳥は不死鳥がいるんでそつちを焼いてください」

「ココさんがいるとややこしくなつちゃうから向こうでやごおーさんと飲んで来て下さい」

「ういー」

ワイはそう言いながらココさんにビールのジョッキを手渡す。ココさんは満足そうに去っていった。

「今回はどつちから始まったんですか？」

「ハイ！ 白上です！」

「店主さん。珍しいんですよ？ フブちゃんから誘ってくれるのは」

「へへ。そうなんですわね！ 確かに先日のゲーマーズとの打ち合わせでも誘われてから来たっほいですし」

「えへへ。なんか恥ずかしくつてさ」

フブキさんは頬をかきながら呟く。

「ご注文は？」

「私は牛丼で！」

「白上はねぎまで！」

「わかりました！ すぐにお待ちします！」

ワイは厨房へと向かった。

まずは牛丼からだ。牛丼なのは多分。彼女に影響されたんだと思う。あの脳筋女騎士から……。

飲み物は……まあビールでいつか。肉とか米なら大体美味いやろ。

よし！ 出来上がり！

コレを持つてつて雑談でもしますか。

「牛丼とねぎまね〜」

「ありがとうございます！」

「どうも〜」

「あ、あとサービスでわたためも付けとくね」

「なんでえ！ ……やめてえ！ 二人とも！ ツンツンしないで！」

二人に品を渡したワイはそこら辺の椅子を持つてきて近くに座った。

二人は運ばれてきたわたためをずっと指で突いている。

「で、何でわためがいるの？」

「フレアさん。サービスです」

「答えになつてねえよ」

「どつかのドラゴンとライオンから仕込み頼まれたんですよ」

「あつ（察し）。……………わため。強く生きろよ！」

親指を立ててわためさんを元氣付けるフレアさんは今までで一番テンションが高かった。

コレが期を超えた友情つて奴ですか。沁みるな…こりや。

いい加減にしてください!

「どうも皆さんお久し振りです。鳥居です。さて、いきなりですがクイズを出したいと思います! 『タイトルを言っているのは誰でしょう!』」

- A. Aちゃん(胸)
- B. かなたさん(血液型)
- C. ココさん(シオンよ…)

………このままだと長くなってしまっているので結果発表をさせていただきます。

正解は〜!

「h o o xの女幹部! 鷹嶺ルイでした!」

というわけでワイの店には今、ホロックスのメンバーが来ている。

今日は水曜日。ホロメンさんたちが沢山来る日だ。

「すいちゃん! MP 5返して! すいちゃん! 返事して! あつ、えつ? 生きかえらしてくれた? ……あつ、返してくれるの! ありがとう!」

角の方ではこよりさんがゲームの中ですいちちゃんにボコられている。

『バアン!! (あゝ! ショットガンの音ゝ!)』

「なんでツ!!! なんでツツ!!! なんでだよおおお!!!」

「あゝ””!!! 気持ちいいイイツ!!!」

うーむ。なんて平和なんだ。

「いやどう見ても平和じゃないだろ。明らかにサイコパスだったし」

「ははは。ホロライブでは当たり前ですよ」

「アナタは最近ホロライブを知り始めましたよね? なのになんでそんな歴戦の猛者

………例えるならそらさんの初配信をみていた14人卓の騎士のようなその雰囲気はどこからでてるんですか」

「出番が少なかったからって怒ってます?」

「いい加減にして下さい! ワタシはそんなことで怒ってるんじゃないんです!」

「……………? じゃあなんで怒ってるんですか?」

ルイさんはこよりさんたちと反対側の角に指を刺す。そこには角を持った三人組が居た。

……………ウチの居酒屋に普段から入り浸っているいわゆるお得意様つて奴だ。

ワイはそちらの三人組を観察する。やがて一人が見られているのに気づいた。

「なに見てんねんワレエ!」

「わため、お前みたいなクソ雑魚羊じゃ脅しにもならんぞ」

「そおつすよ。わため先輩じゃむしろ襲って下さいってアピールしてるようなもんですよ」

そう、お得意様とは何を隠そう会長とわためさんとクソガキ・ダースネスだ。

「おい店主さん。吾輩のこと舐めてるんですか?」

「なあ会長、そのチェリー一つくれないか? ワイの好物なんだ」

「ああ。いいぜ」

会長から受け取ったチェリーをワイは舐め回す。わためさんも舐め回す。

「レロレロレロレロレロレロレ。レロレロレロレロレロレロレロレロレロレロレ」

「やっぱ舐めてるじゃないっすか!」

「じゃ、ごゆっくり」

「あ! 逃げた!」

角三人組のもとから離れ、ルイさんの所へ戻っていった。

「で? なんで怒ってるんですか?」

「アナタとホロメンの相性が良すぎてホロメンが配信の頻度を落としてここに来るようになっちゃってるんですよ!」

次回！ 鳥居死す！
ライブスタンバイ！

シフト表（ホロメンの）

「前回のホロライブ！ いつも通り居酒屋やつてただけなのになんと鳥居さんは怒られてしまう！ その原因はホロメンが配信頻度を落としてまでここに來てしまうからだっただけ！ ……アレ？ これってもしかして鳥居さん悪くない？ ……と、いうわけでホロメンが入店する日のシフトを組みましょう！」

ワイはこの滑らかなナレーションに拍手を送った。ナレーターはメルさんだ。非常に抑揚が上手い。

「いやあ上手ですね。あつこチラがお礼の焼き鳥です」

「わーい！」

メルさんは焼き鳥を受け取って店のテーブル席に座ってムキロゼさんと食べ始めた。

「高品質なタンパク質だな。頂こう」

なんであんなにムキムキになったんだろう？

「それはだんちよが大胸筋体操を教えたあげたからだよ」

「あつ、おさんぽ」

「そんな／＼／ センシティブですよ……おさんぽ……ああ、おさんぽかあ（遠い

目」

ノエルさんは疲れているらしい。こんなときにはちよこさんからもらった『喋る！大空スバルのしゅばしゅばしゅば光線ビーム（アルティメット）』を撃つてあげると元気になると思う。そいつ！

『しゅーばしゅばしゅば！』

「だんちよ………。元気出てきた！ 牛丼三杯下さい！」

「あいよー！」

姫が絶賛するのもわかる。すごい効き目だ。

ワイはノエルさんに牛丼を渡してからやごおーさんとルイさんのいる所へと向かった。

「待つてましたよ鳥居さん」

「お久しぶりですよやごおーさん。一週間ぶりくらいじゃないですか？ ま、元々はそのくらいの頻度でしたけど、ここ最近はかなり高頻度で来店してもらってたんでありがたかったです」

「早速ですがやごおーさん。鳥居さん。ホロメンの来店頻度を考えてシフト表を組みましよう」



「えー、話し合いの結果。まずルールとして決まったのは連日来店をなるべくしないこと。表の方は出来るだけ本人達の要望に沿う形で組むことが出来ました！ はい！拍手！」

ワイとやごおーさんは言われた通り拍手を送る。ルイさんは拍手を受けてドヤ顔をしている。

「ホント、最近はラプラスがあまりにもここに通うので制限したかったんですよ」

「まあ結局、ほぼ今までと変わらない気がするんですけど」

「たしかにそうですね」

「ギクツ！」

「本当はルイさんが出番欲しくてこんな風に設定したんじゃないですか？」

「ギクツギクツ!!」

「まあまあ鳥居さん。ルイさんはきつとみんなで仲良く使うために決めようとしたんですよー！」

「ギクツギクツギクツ!!」

「……………」

やごおーさんとワイは無言でルイさんを見つめる。やがてルイさんは席を勢いよく立ち上がり。

「そうだよ!!! 出番が欲しいんだよ!!!」
「ラプラスばっかずるい!」
開き直った。

「ルイさん」

やごおーさんが優しい声でそつと語りかける。

「沙花叉クロエさんはみんなできるときしか喋ってないですよ」

「それもそうですね。私が間違っていました」

うん。一件落着?

——一方その頃。

「へぶしっ!? ……うーん? だれか沙花叉のこと噂してんのかな?」

沙花叉クロエは風呂にも入らず部屋に籠っていたのだった。

夏といえは？

「な←つ→といえは？」

うむ。いつ聞いてもクセになるな。ころねさんの訛りは。

ワイは今、自分の店でクイズに答えようとしている。

……………何を言っているのかわからねえと思うがワイもわからねえ。

一つだけはつきりとしている事實は、この問題で勝たなければいけないこと。

……………なぜなら。

「あつちゅ!!! あつちゅ!!!」

——不正解者は火炙りだ。

おそろしあやで……………。

ま、正確に言うならばコレは某四角いクラフトの中での話である。

なーんだ。と思った諸君。最古参の新兵の諸君。地獄を作る前に見てほしいのだ。

みこさんのアイテム欄を……………。

・トータム

・トータム

・トータム

・トータム

・トータム

((((エリトラ))))

そう。エリトラである。

みこさんは今、自分の集めたレアアイテムがじっくり焼けていく様を見て涙を流し続けています。あまりにも酷い拷問、もとい生き地獄だ。

「あっちゅ……………あっちゅ……………あ」

遂にトータムを使い切り、みこさんは全口スした。

?チーン／

かくなしくしくみくの。

「真っ白に……………燃え尽きた……………ぜ」

ガクツ。

「みこち……………!!!」

いつもあんだけみ!みこさんをポッコポコのフルポッコにしてきたすいせいさんですら泣いている。

それほど重いのだ。

『夏』は！

「さ←て→第二モンツ！ 『夏』といえは？」

「さつきと変わってないじゃん！ あていしこんなゲーム知らないツ！」

「出題者に楯突いたので物理的にお仕置きです」

ころねさんがそう言うとは何処からともなくホスト姿のおかゆさんが出てくる。あくあさんはそれを見た瞬間、目がハートになっていた。

「はっ！ おか斗ツ！ おか斗ツ！」

「あくあちゃん、オレ、クイズちゃんと答えない娘、好きじゃないんだよね」

あくあさんの目から光が消えた。

「…………シテ…………コロ…………シテ…………」

「やばいあくあが悲しき獣みたいになってる。え？ コレ、スバルどうすればいいん？」

「スバル！ やめるのら！ そいつらに近づくと危ないのら！ マジでやばいぞ」

「姫森さんが出てくるってことは相当だな。スバルしーらね」

あくあさんは同期にも見放され、ボッチで…………ああやばい！ 目から暗黒が漏れ出している！

「でも…」

おか斗さんは続けて。

「オレ、クイズに正解する女の子。めっちゃタイプなんだよね！」

「おが斗!!! あでいじ! がんばる!」

「さ←て!→改めまして第二モンツ! 『夏』といえぼ? ヒントはみんなが求めてるものだよ」

「はい!」

おか斗バフのかかったあくあさんは破竹の勢いで回答者ボタンを押す。

「夏といえぼおPばいでしょ!」

「不正解」

「おか斗おおお」

あくあさんはシオンさんのワープでどこかに飛ばされて行った(現実世界で)。きつと船長の胎内でも元気にやってるさ。

「第三モオン! 『夏』といえぼ?」

もう回答者はワイイだけだ。夏……………初恋のあの子との思い出が蘇る。

みこさんは水着。あくあさんはまあ、うん。

水着でも煩惱でもないなら……………!

「答えは『恋』だ!」

「ぴぼーぴーんぼーんぼーん」

「やったぜ!」

ワイは何とかこの地獄のクイズ大会を生還することができたのだった。

「とみせかけて?」

「ん?」

「不正解! 正解はパンでした。お仕置きとして鳥居さんには……!」

「ご、ごくり!」

「つつたかたーの公式アカウントを作つて貰います!」

「お仕置きのレベル明らかに違うくない?」

「まあいずれわかあるよ。正解したら何でも言うこと聞くつて奴だったしね。当然、失

敗の代償は大きいよお」

何はともあれ、ワイは無事に生還できたのだった(犠牲者二名)。

だからココ居酒屋やで…？

「はあちやまつちやまく！ 鍋食べに来たよー！」

「ねねも〜！」

「ココ居酒屋ですけど」

「さんをつけるよデコ助野郎！」

「ココさんじゃないです」

「あつそうなの？ んじゃ戻るわ」

今日はあちやまさんとねねちさんがセットで来た。どうやら二人はココを鍋屋だと思ってるらしい。そしてココさんは此処を「ココ」と呼ばれたんだと思っただけらしい。ココさんはお昼休みのやごーさんへ絡みに行ってしまった。休ませてやれ昼くらい。

「作れないならはあちやま別のお店行くわ」

「いや作れますけど………味は保証できませんよ？」

「全然いいよね！ ね？ ねねち！」

「うん！」

「まあそう言うなら作ってみますよ。ウチ、焼き鳥がメインなんだけどなあ……」

……改めて言うが二人はココを鍋屋だと思っている。

つまり、どう言うことかと言うと？

「闇鍋だー!」

「イエーイ!」

こ う い う こ と で す 。

……どうせカブトムシとかカタツムリとかサソリとかタランチュラだろ？

ねえよ!!! ここは某どうぶつじやねえんだよ!

ふう（賢者）。作るか。

ワイは厨房の更に奥深くの冷凍庫の前に立つ。白く輝きながら聳え立つその中にはゲテモノが詰まっている。ワイも男や。やってやるぜこの野郎!

今の俺はダイオウイカとドラゴンのシツポを調理したことがあるんだ!

そんじよそこの店主よりもゲテモノには慣れているはず。慣れていてくれ（懇願）。

……こんなことならゴリラも調理しとけば良かった…。

「今、ゴリラ調理したいって言った?」

「んゝんんゝゝ!!!」

当然のようにココさんがかなたさんを抱き抱えて連れてきた。

今回は前回同様口にガムテープを付けているのに加えて、目隠しと手錠が付けられている。

「犯罪臭凄いですよ」

「いくらで売れると思う?」

「一人当たり十万円出してみんなで分け合えばいいと思いますよ」

「ん〃ん〃ん〃ん〃ん〃ん〃!!!」

「んじやまつり先輩とわためも付いてくる! っていう売り文句で売ってくるわ! よかつたな、かなた」

「ん〃ん〃ん〃ん〃ん〃! (よくねえよ!)」

ココさんは屋根を突き破って出て行った。うーん。直すのワイなんだよな。

さて、色々詰めて: : つと。

うん! 闇鍋の完成つと!

「お待たせしました〜! 鳥居スペシャル闇鍋、ロボ子さんを添えて」

「はろーぼー」

「ロボ子先輩! どうして?!」

「ねねち、気にしたら負けよ」

「そう言うモノなの!? 今度はねぼらぼのみんなで食べたいな（遠い目）」

ねねさんはどうやら悟りを開き始めたようだ。無理もない。ホロライブ一の狂人とサシでやれる人なんて団長（某ハンターの方）の手刀を見逃さなかった人とロボ子さんだけだろう。

「んじや最後の仕上げしますね〜」

「ん？ 仕上げ？ 何のこと？」

「はい、仕上げにロボ子さんを入れます」

「あいるびーばあ〜く〜（デデンデンデデン）」

「うわあ！ ロボ子先輩が！ どうしようはあちやま！」

「落ち着くのよ！ 落ち着くのよ！ お茶着くのよ！」

ロボ子さんは鍋の中へ親指を立てて沈んでいった。まあワイの世界は次回にはピンピンしてるギャグ漫画システムだし、別に悲しむことはない。

「こんなのはあちやまの知ってる鍋じゃないわ！ 見損なつたわ鳥居さん！ 貴方は鍋

屋失格よ！」

「そうだー！ そうだー！」

「だからココ居酒屋で…？」

店長鳥居の愉快な一日（午前）【前編】

ワイの名は鳥居。居酒屋をやっているモンだ。突然だが思い出話をしよう。

ワイは二十歳で上京してきた。ピチピチやな。

上京したばかりの時は本当に右も左も分からなかったなあ。師匠の居酒屋で修行させてもらって二十五くらいのとくにやつと一人前になったつげ。

何とか資金を集めて店を持ってみたけど最初の頃は全然お客さんが来なかったなあ。閑古鳥がしゅばしゅば言ってたつげ（感染済み）。

そんなワイの店に初めて常連さんができた時はもう内心大はしやぎだったで。

——そう、やごおーさんだ。

やごおーさんが初めてきたのはホロライブが本格化する前、まあ大体5、6年前くらいかな？ その辺りから通い始めてくれた。最初は月一位だったのがだんだん週一になつてきたつげ。

ま、兎に角やごおーさんはワイにとつて大切なお客さんなんだ。

やごおーさんが来るのはいつも決まって日曜日。

そんな日曜日をワイはどう過ごしているのか、今日はソレを見てもらいたいのだ。



く6時く

「ん、んくん。よつこらせ！」

朝はベツトから飛び跳ねるに限る。この起き方を白上にこの前伝えたら何故か今朝、釣り竿を持って現れた。

「鳥居さんの色違い厳選しないと！」

「黒さーん！ 黒さーん！」

「んだようるせえな」

白上の半分が黒色に染まる。中に二人いるの面白すぎだろ！ コレもエボンの賜物だな！

「白上イ！ を事務所まで連行してください」

「しよおがねえな」

「え？ やだ！ やだ！ 白上は色違いを！ 飛び跳ねるヤツの色違いが欲しい！ 金ピカがいい！ 黒ちゃん！ 黒ちやあーん！」

白上は黒さんに身体の主導権を握られてホロライブ事務所まで帰って行った。

く7時く

朝食の焼き鳥を食べたワイはジムへと向かう。実はワイは筋トレが好きなのだ。目

指せマツチヨ!

「こんマツスル〜」

「……………フンツッ! ……………フンツッ!」

「おはようございます。お二人とも今日も良い筋肉してますね。特にノエルさんは黄金の様に光り輝いています」

ジムに行くところには当然のようにノエルさんとアキロゼさんがいる。今では立派な筋トレ仲間だ。

「そうなんだよね、バランスを意識してたらいつの間にか光る様になったよ」

「ソレはきつと『黄金筋肉比』でしょうね」

「あの伝説の黄金筋肉比だと? まさかこのホロライブ屈指の筋肉マスターの私が先を越されるとは……………恐るべし白金」

そういうえば昔のアキロゼさんの動画を見てみたのだがどうしてこんなに脳筋になつてしまったのだろう。脳筋はともかく何故喋り方が変わった? 何故……………ハッ!

その瞬間、鳥居の脳内に稲妻が走った。答えが見つかったのだ。

(いいか? 店主、よく聞けよ? 『気にしたら負け』だ。覚えておけ)

前にココさんがこんなことを言っていた気がする。

気にしたら負け! なんて良い言葉なんだ!

……この後滅茶苦茶筋トレした。

（12時）

プロテインを飲み、シャワーを浴びた今のワイは全能感で満たされている。

歌でも一つ歌いたい気分だ。

ということでもカラオケ行きます。

「わため、かなたそ、船長、AZKIち、列車。召喚！」

ということでも歌で盛り上がるホロメンで今暇なヤツをエドテンしました。

「やっぱり鳥居さんはわためえのこと結構好きなんだねえ」

「麺屋ぼたんに連絡させてもらうね」

「やめてえ！ な、何でもするからあ！」

「ん？ 今何でもするって？ んじや、わためさんだけ歌う時踊って下さいね」

わためさんは某あつ森のエモート。「ガン！」見たいな顔している。心配しなくても大丈夫だぞ。みんなガン見してくれるからさ。

「ソレが問題なんじゃないの？」

「ゴリラは黙って下さい」

「んだとゴラア？ マリン、この調子乗ってるやつにギャフンと言ってやれ！」

「船長に任せな！ 鳥居さん、貴方、もう三十二なんです。ハハハハ！」

「ブーメラン刺さってますよ」

「グフウ！（吐血）」

マリンさんが血を吐いて倒れた。止まるんじやねえぞ…。

「マリンがタヒんだ！ この人でなし！ すいちゃん！ アンタだけが頼りだ！ 鳥居さんを泣かせてやってくれ！」

「今テトリスしてるから後でね（圧）」

「あつハイ。……………AZKi先輩！ お問い合わせします！ ボクをゴリラ呼びするこの邪智暴虐な店主をギャフンと言わせてやって下さい！」

「かなたちやつてボキャブラリー豊富だね。ええと、強い言葉かあ……………鳥居さんの

『チクチクボンバー！』

「グフウ！（大吐血）」

「効いた!?! やりましたね！ AZKi先輩！」

「え!?! 鳥居さん大丈夫？」

「大丈夫……………です。あ、あまりに……………」あまりに可愛すぎて”吐血してしまいました”がもう大丈夫です」

流石ホロライブ二大清楚の片方なだけある。破壊力が段違いだ。ぶつちやけ片方が
亜空間から刀を出せることを考えるとAZKiの方が清楚かもしれない。

……この後もおんなじ様にプロレスしながら楽しみましたとき。

店長鳥居の愉快な一日（午後）【後編】

みんなとのカラオケはとても楽しく、宴は三日三晩続き、アブダラ様が降臨した（コロッケ）。

……5時間しかやってないけどな。

く17時く

この時間になるとワイは店に戻る。開店は1時間後の18時だ。仕込みはしてあるので別に18時ギリギリでも案外間に合ったりするんやで。

「……暇だしこの前ゲーマーズと買ったゲームでも遊ぶかな」

く18時く

「……フブキング！お誕生日おめでとう!!!」

みんなが一齐にクラッカーを弾く。

「いやはあ〜！愛されてますなあ！白上はあ〜！」

今日は白上イー！の誕生日だ。

白上イー！はネコでありキツネであるよくわからない生き物である。

とりあえずワイはお祝いに手作りのショートケーキをみんなに振る舞った。

「好きなだけ食べていいですよ」

「え……………！食べ放題……………ってコト!？」

ミオさんがケーキを見て涎を垂らしている。

「ミオしゃ!?せめてフブキに食べさせてからにしようよ!鳥居さんもなんか言つて!」

「すばるおねえーちやく!がんばえー!」

「え、キツツ。え、ラプラスに誘われてきたのになんでトワ拷問されてんの?」

「まあまあトワ様、こんくらい普通ですよ」

「そうだぞトワ!なんだ?アタシがないから耐性無くなつちまったのかあ?」

「イキリドラゴンは黙つてろ」

「あゝあゝ?やんのかゴラア!」

「ころさん、あーん」

「あーん。おがゆのたべさせてくれるケーキは美味しいねえ。……………カロリーどうしよ」

うーん。今日もウチはカオスだやあ。ゲームマーズも元気そうだ。

「メルちゃん!パンツ何色!」

「うふふ。何色だと思ふ?」

「ぶはあー!たまらん!」

あーあ。まつり嬢が鼻血出して倒れちゃった。

「はあちやまつちやまく！一期生の清楚梓を返せフブキング！」

「へぶう」

あーあ。白上イ！もはあちやまにやられて倒れちゃった。

「白上イイ！生き返れ！ホラ、ホラっ！」

「う……………うう。…だ、……………誰？」

「船長、船長ですよ！ほら、酢昆布（酸っぱくてうまい奴）の絆を見せましょうや！」

「白上……………もう、眠いよ」

ランランランランランランランシングルなんちゃらランランラン。

……………白上はかなたそにつれられて天へと登っていった。

「アレじゃネコじゃなくてイヌですね」

「確かに！鳥居さんの言う通りだ！」

「えっ？」

何故か俺の言葉に反応してしまったかなたさんは白上イ！を掴んでいた手を離して
いた。

「落ちる……………!!!」

ボサッ。

「フブキ、大丈夫？」

「ミオちや〜〜ん」

うーむ。今日も居酒屋「鳥居」は平和だな！（確信）

ちなみにやごおーはそれを見ながらショートケーキを食べていた。

ちゃんちゃん！

とりあえず生で！

「とりあえず生で！」

「ココさんがビール片手に叫ぶ。ちなみにこの注文はワイに向けての注文では無い。やごおーさんへの注文だ。」

「はい、わかりました……………ふう……………」

「コサクダンスするおじさん」

「はい、わかりました……………ふう……………」

「コサクダンスするおじさん」

「はい、わかりました……………ふう……………」

「コサクダンスするおじさん」

「はい、わかりました……………ふう……………」

「コサクダンスするおじさん」

「コサクダンスするおじさん」

「コサクダンスするおじさん」

ますよと言ったらすぐやつてくれた。やはりやごおーさんはバライティをよくわかってる。さすやご。

「ハイ!アンコール!アンコール!」

「もういつかい!もういつかいみたいぺこ!」

ココさんとぺこらさんが熱烈なアンコールを繰り出す。それを見たやごおーさんは微笑みながら………衝撃の一言を放った。

「わかりました………ふう。【メスガキの真似をするおじさん】」

「ゲボっ!ゲボオモロい!(ゲラゲラゲラゲラ)」

「ファッ?ファッ?ファッ!ファッ?ファッ?………ファ? (絶命)」

「予想の斜め上のやつが来ましたね」

あまりのパワーワードに一同大爆笑である。ココさんは台をバンバン叩いて笑っている。ぺこらさんは………白目剥いてる。ご臨終やな。かくゆうワイも面白すぎてコサックダンスを踊り始めている。

「ざあこ??ざあこ??ざあこ(はーちやまっちやま〜!)」

「ゲラゲラゲラゲラ………ゲ (絶命)」

「………」

「………キルレート高いですね、やごおーさん」

「あくあさんとぼたんさんに教えてもらいました。特にメスガキパートを考案したぼたんさんなんて思い付いてから3分間笑い続けてましたよ」

「やっぱり麵屋は強いですな」

「ですな」

最強ドラゴンと最強うさぎをダブルキルしたやごおーさんは、さながら凄腕のスナイパーだ。

「あ、そういえばやごおーさん。最近、あくあさんに勧められてエペ入れたんですけど一緒にやります?」

「いいですね、やりましょうか!」

「ゲーム室へ行きましょうか!……………今日はホロライブさんで貸切にしてもらってるんで遊んでてもいいですよね?」

「ふふふ……………貴方の隣にいるのは誰ですか?鳥居さん……………」

「……………CEO……………ですな」

「遊びましょう!」

「おー!」

——この後、まさかあんな事が起きるだなんて、ワイとやごおーさんは知るよしもなかった……………。

じ……………事件なんだワ……………!

あーあ。収録が長引いちやってもう遅刻だなあ。せつかく「例の店」で食べようってペこらが誘ってくれたのに……………。

ま、あんまりしんみりしててもいい事なんてないんだワ!

船長は前だけ見て行くよ! 目指せエルドラド!

さて、やつとついたワ。いきますよ〜?

「A h o y・ペっこら〜! お待……………た……………ペこら!?! ねえ! しつかりしてペこら!」

「……………」

店に入るとそこに居るはずである鳥居さんの姿も見えず、あつたのは無惨に床に転がっているペこらの姿だけだった。

「ペ……………ペこらが何者かに襲われてたんだワ!……………ツツツ!! ココ! おい! しつかりしろココ!」

会長までもが何者かに襲われ、口から泡を吹いている。マズイな。ホロライブ屈指の戦闘力を誇るココまでも……………。一味やドクロ君の居ない時の船長なんてタダのコス

プレ女だし…………正直、犯人と遭遇したら勝てないんだワ…………。

「…………コ…………ロ…………ス…………」

「…………ヤツ…………タ」

…………奥からメツチャヤバそんなオーラを感じるんだワ！

そうだ！助けを求めよう！（名案）

強い人かあ。…………それら先輩はちよつと…………犯人をタヒなせちやいそうだなあ

…………。…………あやめ先輩とかいいかも！

『余はコレから2期生でご飯に行くんだ余！空いてない余！』

…………ダメだったワ…………フレアとノエルは丁度コラボ中だしなあ…………今日

フリーで強い人…………ハツ！

『え？船長？どうしたん？』

「ラミイ！急いでいつもの居酒屋来てくれえ！緊急だ！」

『え？ちよ？何があつ…………た…………プツ』

「ん？この店にしては珍しく回線が悪いな。…………ラミイ。早く来てくれ…………」

倒れている二人をすぐそこにある仮眠室へと送った私は一人、作戦を立てることにした。

……………相手は恐らく二人。人数不利はラミイが来るから問題ないワ。問題はその二

人の戦闘力なんだワ……………。

ホロライブ屈指の戦闘力を誇るココ。高い幸運値を誇る上にいざとなったらロケラをぶつ放すぺこら。この二人をノックダウンさせるほどの相手に果たして勝てるのか……………。

いや!勝てる勝てないじゃない!船長がココとぺこらの仇を取るんだ!

「こんらみく。船長、途中で携帯切ったでしょ?(回線が悪かったんだワ)……………なるほど。で、なんでラミイを呼んだの?」

私はラミイを仮眠室へ手招きする。実際に見たほうが早いと思っただからだ。

「え?ココ先輩とぺこら先輩が気絶してる!え?船長がやったの?もしそうなら大空警察行きだよ?」

「うるせえテメエの方が大空警察にお世話になってるだろ。ゲームの牛の名前を『のえる』にしている奴には言われたくないワ!……………って!違う!もう全部違う!この店にココとぺこらを倒した奴がいるんだワ!」

「ええええええ?!?!ココ先輩とぺこら先輩を倒せる人なんてホロライブメンバー以外で居るんですか?」!

「わからん。ただ、船長の知っている中ではホロメン以外には居ないはず……………。ラミイ!私たちで手を組んで二人の仇を取るんだワ!」

「わかりました！ラミイに任せてください！」

私たちは犯人が居るのであろうゲーム室へこっそり向かう。

ドアの前で作戦の最終確認だ。

(……………よしラミイ、1、2、3で突撃。大福がタツクルして犯人が驚く。その間に船長がお色気パワーで犯人をメロメロに。最後にラミイがお酒と入れ替わり、その酒を船長が犯人にお酌して犯人が酔っ払う。OK?)

(なんでやねん)

(完璧だな(確信))

(なんでやねん)

(よし！出航〜！)

(ラミイもお酒と入れ替わる!!! (ヤケクソ))

お腹空いてきた!

——一方その頃、ワイとやごおーさんはゲーム室でエペっていた。

「ええー!それレアドロップつすよー……………たぶん」

やごおーさんが倒した敵がなんか強そうなアイテム持ってたんで取り敢えずレアドロップって褒めといた。

「やったぜー!いやあ人とゲームするの楽しいですね!」

やごおーさんもノリノリだ。

「やごおーさん!後ろから撃たれてます!カバー入ります!」

「お?ついに鳥居さんもウチに入社したくなりましたか?アイドルプロデューサーとして頑張りますよ!コレからよろしくお願いします!」

「ふざけてる場合じゃないっすよやごおーさん!一気に行きましょう!」

「はいっ!」

ワイたち社長ブラザーズは普段あまり自分自身でプレイしないゲームを心ゆくまで楽しんだ。

「ふう……………お疲れ様でした鳥居さん」

「お疲れ様でしたやごおーさん。……………まさか初心者二人で十位以内入れるとは……………
案外才能があつたりして！」

「ふふふ……………あくあさんの配信を見てたお陰ですよ」

流石やごおー!!さん。自分の社員を大切にする良いCEOだ。

ダンツツツ!!!

強烈な音が鼓膜へ響く。

一泊置いてワイとやごおーさんは音の主を探す。扉の方へ目を向けるとそこには大きなクマが……………ん?

「うわああああー!」

ワイとやごおーさんは同時に椅子から転げ落ちる。く、クマや!クマが来た!なんでや!ここは北海道じゃねえよ!北極じゃねえーよ!

「お、落ち着いて下さい鳥居さん」

「あ、心の声漏れてましたね」

「ごつち見て〜〜〜!」

「ん?」

なんか聞き馴染みのある声だな……………?

「A h o y ! 船長だお〜〜〜! 非力でプリチイな船長は野獣と化した犯人に襲われ

マリンさんは床に転がってのたうち回っている。

「がおおー！」

「だいふく？ お腹すいたの？」

「がお！」

「お？ いいなあだいふく！ アタシも沢山笑ったから腹減ったぞ！」

「ペコーらもお腹すいたペコー」

「酒出せ！ 酒！ 黒歴史を！ 今だけでいいから消させてくれ！」

「私はねぎまで！」

「わかりました！ 頑張っちゃいますよー！」

居酒屋『鳥居』は今日も、賑やかに動き出した！

あの日、我等が出会ったあの場所を、吾輩は、忘れる事はない。

一年……………か。長いようで短かったか？いや、長かったかもしれないな。なんせ久々だったんだ。吾輩達が一緒に過ごす事自体が……………。

……………あの日あの時、あの山の奥で出会えた奇跡を、吾輩は密かに、静かに、目をつぶつて、椅子に座りながら、思い返して……………。そつと微笑んだ。



「うーむ。どうすれば世界征服できるんだ？」

吾輩は一人、人里離れた山奥で考えていた。『どうやったら世界征服できるのだろうか』と。

考えても考えても妙案は浮かんでこない。こつも浮かばないと自分の想像力に対して葛藤が湧いてくる。

「……………はあ」

ひとり。ただひとり。たったひとり。孤独を感じながらため息をついた。

「どうしてため息なんか吐いてるの？」

「ん？」

声が出た方を向くと、そこには、例えるならば『鷹』のようにワイルドで、気品漂う中学生くらいの少女が立っていた。

「なんで中学生？がこんな人気のない山奥なんかに来てるんだ。危ないから日が暮れる前に帰れよ」

「家出して来たの」

「……………え？」

これが、『高嶺ルイ』との馴れ初めだった――。



「オイルイ！お前はまだ中学生！酒はダメだ！」

シャワシャワシャワシャワ

「ラプラスばつかずるい！見た目は小学生なのに！」

シャワシャワシャワシャワ！

「吾輩はおとなだからいいんだ！」

シャワシャワシャワシャワ！！

「ずるい……！」

シャワシャワシャワシャワ!!!

「……………うるせえ!!!」

吾輩の叫び声に驚いたのかルイはビククリしている。……………ごめんな。お前にむけてじゃねえんだ。

シャワツツツツ?!

そう、お前だ!?!?!?

「オイ吾輩はわかつてたんだよ! わかつてて見逃してたんだよ! なあでてこいそのヤツ!」

吾輩が木を指差すと、その木の表面が大きく剥がれ落ちる。アレは木の表面を模した布。『隠れ装術』だ。そんなことできるやつは『アレ』にきまつてる。

「オイニンジャ! 名乗れ!」

「かざまです! ……じゃなかった。……………かざまでござる! あとかざまは『サムライでござる!』」

「紛らしいことするんじゃねえ!!!」

「よく気づいたね…ラプラス」

「あ? あんだけシャワシャワシャワシャワ言ったら気づくだる普通」

「ラプどの!! すごいでござる!」

これが、『風真いろは』との馴れ初めだった――。



「秘密結社を作ろう」

「あ?」

いつもの秘密基地で集まった途端、ルイが突然秘密結社を作ろうと言い出した。

「具体的にどのようにするでござるか?」

「ラプラスが総帥。私が幹部、いろはは用心棒。……あとは博士とか掃除屋とか?」

「どうやって探すんだ?」

「そうでござる。拙者のように山を駆け回る博士や掃除屋は滅多に居ないと思うでござる」

「

確かに。……あーあ。しばらく見つからそうだなあ」

ルイは気だるそうに呟いた。

「……ケテ」

「ん？ルイ、なんか言ったか？」

「ううん？何にも？」

「そうか、吾輩の聞き間違いだ」

「…スケテ」

「ん？いろは、なんか言ったか？」

「え？かざまはなにも言っていないでござる」

「ん？でもなあ………なんか聞こえるんだよなあ」

「助けて!!!」

「うおっ！」

急に頭ピンク色の獣人？が突っ込んできた。

「借金取りに追われてるの！」

「お？」

「こよがマシン開発に使ったお金返せって言ってくるの！」

「おおう」

「助けて！ツノの生えた小学生！」

「大人だ馬鹿野郎」

ピンクコヨーテの頭をピシッと叩く。

「アイタツ！」

「これが、『博衣こより』との馴れ初めだった——。



「あとは掃除屋だけだね」

「だな。案外、集まるもんだな」

「ラブ殿がカリスマなんでござるよ」

「お？いろは、お前幹部にしてやろうか？」

「あ！そういうのいけないだー！ラブちゃんサイテー！」

秘密基地もだいぶ賑やかになってきたな。コレじゃ秘密基地じゃなくなっちゃうか

もな。

「見つけたよ」

「[[「!?」]]」

上空から声が聞こえる……………上だ。

「こつちこつち」

今度は隣から。コイツ、速いぞ！

何処からとも無く現れたそいつはたぶん、暗殺者だ。殺気がヤバい。この星にこのレベルと圧をもつ奴が居るとは……………エデンも広いな。

「ハ、こよを狙いにきたの!?!」

「いかにも」

「何者なんですか!?!」

「フハハ……………暗殺者は名乗らない」

「シャチみたいなマスクしてるでござる」

「……………え?なんで沙花叉がシャチってわかったの?……………まあいいや。借金返してください!お願いします!お腹すいてるんです!」

暗殺者はペコペコお辞儀しました。

「なんだコイツ」

これが、『沙花叉クロエ』との馴れ初めだった――。



「そうすくい！ご飯奢って！」

「こより、お前の借金何億か言ってみろ」

「1129億円！【いい肉】億円です！」

「その全額返したのは誰だ？」

「偉大なる我等の総帥、ラプラス・ダークネス様です！」

「馬鹿野郎！」

脳みそピンクココヨーテの頭をピシッと叩く。

「アイタツ！」

「こんなので博士が務まるの？ラプラス？」

「こんな中でも、発明自体は凄い。そこいらの科学者より数段上だ」

「借金も数段上でござるな」

「「……………うん」」

「「「キュルルルル」」」

腹の虫が鳴いている。5匹もな。

吾輩の所持金、『二千元』。……………しゃーない。コイツらに肉食わしてやるか！……………
当分もやしだな。

「お前ら！東京いくぞ！」

「「「おー!!」」」

………歩きでな。

く東京く

「うーん。東京は物価が高いからなあ………二千円で5人が肉を食うとなあ
………」

「ラプラス!アレ!」

「ん?二千円で食べ放題【5人まで!】だと?」

「なかなか胡散臭いでござる」

「こよお腹すいたー!」

「さかまたもく!」

「まあ、行ってみてもいいかな」

古い店構えの焼き鳥屋に入店した我々は、5人で二千円食べ放題プランを頼のむ。

「すみません、確認なんですけど、本当に、5人で二千円食べ放題なんですか?」

「ハイ!今日は店長の誕生日なんですよ!店長は誕生日の日には沢山仕事かしたい!つ
ていう人ですて、お客さんを集める為に一日限定超格安プランを用意するんですよ」

「成る程。じゃあ食べ放題プランで!」

「はい!」

出されてくる焼き鳥は値段以上に良いものばかりだった。
我々はお出される焼き鳥全てを喰らい尽くした。

「「う、うう……………」」

「泣くなルイ！いろは！こより！クロエ！みんな泣くんじやない！いいか、我等はエデンの星を統べる者、それを忘れるな！いいな！」

「「はい！！」」

……………お別れの時が来た。みんなが、家族と一緒に過ごす為には、離れ離れにならなくてはいけなくなってしまった。

始まりがあれば終わりがあつた。単純で、至極真つ当な事なのに、不思議と納得がいかない。だが、総帥である吾輩は泣いてはいけなないんだ。絶対に、泣いてはいけなないんだ。

「また、10年後、この場所で会おうお前ら！」

「「うん！」」

これが、『holox』との、お別れだった――。

■■■■■■■■■■

「吾輩が一番乗り……………か。……………あいつら来るかな？」

10年が経つた。あの日あの時からちょうど10年。アイツらはもう、吾輩のことな

んて憶えていないだろうか……………。

「……………あ。…ブランク……………」

吾輩はひとり。ただひとり。たったひとりでブランクを漕ぐ。漕ぐたびにここでの思い出が湧き出てくる。ルイ。いろは。こより。クロエ。……………みんな、忘れちゃったのかなあ……………。

……………またひとりぼっちかあ。

「……………はあ」

ふと、ため息を吐く。

「どうしてため息なんて吐いてるの？」

「え？」

————この声は。このセリフは……………！

「久しぶりー！ラプラス！」

一目見ただけでわかる。

「大きくなっただなあ……………ルイ！」

「えへへ」

シャワシャワシャワシャワ

「ん？」

音のする方を見ると木の表面が剥がれ落ちた。

「お久しぶりでござる！ラプ殿！」

「いろは！」

タツタツタツタ。足音が近づく。

「久しぶり〜！」

急にハグしてきやがった。

「こより！」

「ラプちゃん、上！」

「ん？」

上を見上げるとそこには…。

「フハハ……………名乗ってやろうじゃないか。沙花又だ！」

「クロエ！」

「みんな……………吾輩のこと、憶えててくれたんだな」

「「あたりまえだよ」」

「……………グスツ」

「ラプちゃん泣いてるの？」

「ラプラスは小学生だな」

「ラブ殿かわいいでござる」

「や〜い！ラブラスの泣き虫〜！」

「ち、違——！……………みんなに言いたいことがあるんだ」

ルイが吾輩の口に人差し指を当ててきた。

「それは私たちから言ったほうがかつこいいね！みんな行くよ！せーのっ！」

『『『ただいま!!!』』』』

『おかえり!!!』』

これが、『h o l o o x』再結成の瞬間だ——！

■■■■■■■■■■

「ということがあつて我等はエデンの星を統べる者になった訳ですね。どうでしたか？」

「メツチャ感動しました！……………あの、話に出てきた焼き鳥屋の店員ってまさか……………

！」

「ああ、鳥居さんですね」

「おおおおお!!!なんか全てが繋がりました！h o l o o xの皆さんに見覚えがあつたのはそのおかげですね！」

居酒屋『鳥居』に今日はみんな来ていた。鳥居さんにこの話をしようとは前から

思っていたのだが、流石に写真撮影の時に言うのはちよつと尺が足りなかったので後回しにしていた。いざ話してみると結構感動的だな吾輩達。

ま、今が楽しいから昔のことはそんな気になしていないけどな。

でも、あの思い出は吾輩の宝物だ。この地球エデンとおんなじくらいの宝物だ。

「ラプラス。一緒に乾杯しよ〜！」

「ラプ殿〜来るでござる〜！」

「ラプちゃん早く〜！」

「ラプラスあくしろよ……………アレ？沙花叉みんながいる時しか喋って無くない？個人でのセリフが少ないような……………」

まあこれからも、それなりに頑張つて、世界征服していこうかな。

吾輩は、大胆に、大きく、目を開いて、椅子から立ち上がりながら、思い立って……………にいつとはにかんだ！

焼き鳥屋がつったかたーやるっていうのはそれもうつったかたーを焼き鳥にしたいうことですよ?

「鳥居さん? つったかたーやつちよる?」

「……………シテ……………コロ……………シテ」

「ああ! 鳥居さんが悲しき獣みたいな目になってる! ころね、どうするんだよ!」

「こおねは、悪くないよねえ?」

「後輩のネタでゴリ押そうとすな! とりあえず鳥居さんの意識戻せる?」

「難しいのら」

「後輩の語尾でゴリ押そうとすな! とりあえず鳥居さんの意識を戻してくれ! できるよな? ころね?」

「3を付けろよアヒル野郎!」

「違う……………そうじゃない」

「なるほおど。TNTってやつだね?」

「TMTな!!! (迫真) 一文字違うだけで怖いのら」

「スバルさんも語尾移ってますよ。で、つつたかたーですか。………教えてもらえます？」

「もちろん！こおねが言ったんだからね。教えるよ」



「ここをこうして………！できました！」

「おめおめ〜」

「おめつとさん。で、どんな内容を投稿するんすか？」

「………何がいいですかねえ…」

「「………うむむ」」

おじさんと犬とアヒルが3人集まっても、文殊の知恵は出てこない。

そんなワイたちの所にココさんが現れた！

「お？何やってんだ店主。ん？こりや、つつたかたーか。なんか悩んでる雰囲気だけど………」

「ココさん、今から初ついなんですけど、いいネタが思いつかなくて………」

「それならアタシ、いいネタあるぞ」

「本当ですか！」

「勿論だ。隣座れるぜ………よっこらせ」

椅子に座ろうとしたココさんの方を向くと、ゆらゆら揺れるとても大きな果実が目に入った。ああ（察し）。ホロライブ最強つてそういう……。今日のココさんの服装はタンクトップにツインテール。中々の組み合わせだ……………!

ワイが言えることはただ一つ。かなたそ……………つよく生きてくれ……………。
「でな、そのアイデアっていうのはこうだ!」

ココさんに肩を寄せられて、お互いが支え合う形になった。

「店主、スマホの方を見ろ!」

「えっ!？」

カシャッ!

「……………うん。いい感じだな。ココをこうして……………」

ココさんはノリノリでワイのスマホを弄っている。

「こおねオチが見えたよ」

「スバルも……………」

「……………?? ……どうなるんですか?」

「お楽しみ」

「オイ!店主!終わったぞ……………。よし、ころね先輩とスバル先輩は奥で待機しててください。裏口からなら帰ってもいいですよ」

「あいよく♪」

「了解！あとは任せました！」

「……………どうゆうことですか？」

ダツダツダツダ

ダツダツダツダ

ダツダツダツダ

ダツダツダツダ

外からは激しい足音が聞こえる。一步、二歩とどんどんこちらへ近づいてくる。なにがおきた!?

やがて扉は開かれた。

ガシャン！

老若男女、様々な個体が何十匹も訪れた。見た目は様々だが、みんな同じ顔をしていた。

「「「会長！」「」」」

「ようお前ら、元気してたか？」

「「「会長~~~~!!」「」」」

溢れんばかりの涙と心の底から嬉しそうな笑顔だ。

「ココさん……………もしかしなくともこの方達は……………」

「ああ。『桐生会』のみんなだ」

「まあ見た目タツノオトシゴですしそれはわかってましたけど……。どんな風にいたしましたんですか?」

「ああ。鳥居さんとの写メに【#おひき!】って入れたただけだ」

「それだけ!? まだ30秒くらいしか経ってませんよ!」

「ウチの構成員は150万くらいやぞ? まだ10000分の1しか来てねえよ」

「マジですか……」

「でも店主! コレでわかっただろ? つったかたーの使い方!」

「確かに! ……店、増築しますか」

「……………だな」

どらごんのちからつてすげー！まほうのちからもすげー

！

「増築します」

……………つったかたーを始めたワイは、いや。ワイの居酒屋は大繁盛していた。

このままでは元の隠れ家的な雰囲気が壊れかねないということをやごおーさんに相談した所、支店を作ったほうが良いと背中を押してもらった。

更に費用も何割か負担してくれるらしい。

「……………で？やごおーさん？なんで外にいるんですか？私たち」

ワイは今、居酒屋から1分程度の場所にある空き地に立っている。やごおーさんが来てくれと誘ってくれたので付いて来たんだが……………？

「そりや、増築する為ですよ。……………おっ！来ましたね。」

「……………？」

やごおーさんは空を見上げている。ワイも釣られてそちらを見る。

「……………?!?!?!」

バツバツバツバサツバサツ!!

上空には10メートル近くはあるであろう巨大なドラゴンがいた。手にはビルを持つている。

「……………ん?」

『オイ店主!ビル置くからちよつと離れろ!』

「あつハイ」

言われるがまま距離を取ると、ドラゴンはビルを空き地にピッタリと差し込んだ。ドラゴンは満足そうな表情をしてから身体を変形させた。

「よう!店主!ビルとつて来たぜ!」

「ココさん!このビル何処から持つて来たんですか?」

「ああ。桐生会のビルだ」

あの人達の事務所をワイの居酒屋チエーンにしちゃうのか……………なんというか、罪悪感というかなんとか……………。

「アタシが持つてくつて言つたらアイツら張り切つちやつてき、『是非!鳥居さんが使つて下さい!会長を支えてくれた鳥居さんに渡します!』…だつてよ」

「成る程。中を見ても良いですか?」

「ああ。アタシはちよつと用があるから別んどころ行くな」

「ココさん、お疲れ様でした」

「ああ。やごおーもすっかり休めよ？」

「肝に銘じておきます」

「ん。じゃあな！」

ココさんは何処かに行ってしまった。ビルは四階で、中もとても綺麗だった。キッチンを設置しといてくれたので、椅子を置いたりすればすぐに店が出来そうだ。

「あ、鳥居さん。そこで止まって下さい」

やごおーさんに言われた通り足踏みしていると……………。

シユン！

「!?」

シユン!!

「!?」

「!?」

「!?」

「!?」

「!?」

「!?」

!!!!!!

ビルの中に次々と道具や家電などの物が現れてくる。コレは……………魔法！

「シオンさんですか？」

「ええ。もう道具などは用意してあるのであと少しで店を開ける状態になると思います

「よ」

「流石ホロライブ。引越し業者として完璧ですね」

「アイドルですけどね」

「:.....ハハハ!」

「——何やってんだ鳥居」

背後から聞こえたこの声の主は

「師匠?!?!」

「よう!?!?!元氣してたか?」

!

「はい！師匠も元気そうで！」

「へ〜！この方が鳥居さんのお師匠なんですね」

「どうも。……………オイ鳥居テメエ！お前！ラブ様と知り合いなのかよお！何で俺に言わなかった！」

「し、師匠！胸が！胸が当たってます!!」

「あ？俺の胸が当たったことで誤魔化そうとしてんなア？」

「し、師匠！髪の毛が！ツインテールが荒ぶってます！」

「うるせえ！ラブ様と知り合いなこと隠しやがって……………一度でいいからラブ様と会いたいんだ。一度だけ、一目みるだけでいい！」

「……………師匠。師匠は一度、ラブラスさんに会ってますよ」

「……………マジ？」

「マジです」

「ほら、10年くらい前の師匠の誕生日の時、角が生えた女の子率いる5人組、いたじゃないですか。……………あれ、holloxですよ」

「……………マジ？」

「マジです」

「そして師匠。ラブラスさんなら私の店に居ますよ」

「……………マジ？」

「マジです」

「よっしゃ！今日からまたよろしくな！鳥居！」

「……………もしかして師匠。ウチで働いてくれるんですか？」

「任せろ！弟子の為だ！」

推しに会えるなんて今日は人生最高の日だ！

俺は鳥居に心の中で土下座した。

マイ・エンジェル

「いいかTENNSI。よく聞け。天使っていうのはだな、美味しいタイプの朝ココの、紫色玉葱 *versison* だ！わかったか？わかったと言え！」

「わかった！……じゃねえよ！ボクが天使でしょうが！」

「は？オマエみたいな手裏剣ゴリラが天使な訳ないだろ？」

「上等だ表出ろココオ！」

「さんを付けろよ握力野郎！」

ココさんとかなたさんがバチバチし始めている。

「いやあ今日も平和ですねえ。やごおーさん」

「最近はみんな、自由にやってますからね。いい感じですよ」

『プーン！パリパリパリ！プーン！』

外ではラミイさんが芝刈り機になって草を刈ってくれている。

「……………俺から見たらとても平和じゃないんだが」

「まあまあ師匠。ラプラスさんに会えたんだからいいじゃないですか。……………後で、ラ

「プラスさんに謝って下さいね？」

ワイは角の方を見つめる。そこにはラプラスさんとトワ様がいる。ラプラスさんはトワ様の胸に頭を預けている。

「トワ様ア！吾輩ツ！汚されちやった……………」

「よし、よし。ラプラス。怖かったねえ」

「ばぶうー！ばぶうー！」

あーあ。ラプラスさん、幼児退行しちやった。……………まあトワ様によしよしされたら大抵の奴がオギヤリそうだけどさあ……………ねえ？

ワイは師匠の方を無言で見つめた。

「……………」

「……………ダァー！俺が悪かったよ！でもしよおがねええじやねええかー！推しだぞ！推しッ！わかるか鳥居？推しに会えたんだ！そりやツノに威力^{ほっ}20命中^す100するだろ！」

「そのせいでラプラスさんの顔にツインテール当たりまくってましたよ？」

「……………テヘツ??」

「ワイより年上の師匠がやっても……………!!!し、師匠！痛い！痛いですから太ももの内側つねらないで下さい！」

「次言ったらクロス…」

「……………ビクツ！……………はあ！……………はあ！……………どうしよう。あていし……………あていし……………！」

店内でぼつち飯をしていたあくあさんが過呼吸になっている。師匠の覇気に当てられてパニックになってしまったようだ。それに師匠もすぐ気がついたようで師匠はそつと、あくあさんに駆け寄った。

「ごめんな、嬢ちゃんに向けて言っただつもりじゃ無いんだ。驚かせちゃって本当にごめん」

「……………あていしの方こそ。……………ごめんなさい」

「良かったら名前を教えてもらってもいいかな？」

「みなと……………湊あくあです！」

「あああああ！あくたんツ！あくたんだ！帽子を深く被つてて気が付かなかったけどあくたんだ！」

「えっ？」

「あくた〜ん！」

師匠はあくあさんの太ももにほつぺをすりすりし始めた。師匠が美少女でよかった。そうじゃなければ即逮捕だ。ほつぺを太ももに当てられているあくあさんはどうと

.....

「あていしの太ももでよければいつでも触ってもいいよ……」

「マイエンジェル！天使、本当の天使はここにおったんや！」

満更でも無さそうだ。師匠が美少女でよかった。美少女無罪。

ふと、あくあさんは思い出したような顔をしてこう言った。

「お嬢ちゃん！パンツ何色？」

「パンツ履いてませーん！」

あつ（察し）

「逮捕おー！大空警察だ！」

「早くお縄につくのら」

「パンツ履いてないとかガチイ？」

「ガハハ。面白すぎる（ゲラゲラゲラゲラ）」

「ヤメツ！ヤメロオー！」

何処からともなく現れたすばちよこるなたちに師匠は連行されて行った。

「……………今日も平和ですね……………やっおーさん」

「そ、そうですね……………」

いくらやっおーさんでも師匠の行動は理解できなかったらしい。

あの人やっぱおかしいわ（諦め）

NEG i とネギは惹かれ合う

「ネギが切れました」

「じゃあ敵だね？」

珍しくワイの店から食材が切れた。そらさんもお怒りだ。

「おつかい頼める人居ますか？ネギ切れちゃったんですけど…」

「ハイ！ハイ！ねねが行きます！」

手を挙げてくれたのはねねさん。すいちゃんには無いものが付いてる（以下略）きん

た…（以下略）金曜日の美少女だ。

「ありがとうございますねえさん！お願いしますね」

「ハイ！ねねに任せてくださいっ！………チラッ！」

「ねねちゃんなんであていしのことガン見してくるの!？」

「………チラッ！チラッ！」

「お？なんだねねち。スバルについて来て欲しいのかあ？」

「ひゅー……。ひゅー……。口笛」

頑張つてはいるが、残念ながら吹けてない。

「ビュ〜♪ビュ〜♪」

すいちゃんは口笛上手いなあ……………むn「鳥居さん？」

「えつちよ!?!心の声漏れてました!?!」

「いいえ? ぜんぜん。ぜんぜんですよ。全然ムネが小さいなんて気にして無いですから」

「気にしてるんですねすみません! 謝るんでその表情やめて下さい! メツチャ怖いです!」

「え? (庄)」

「……………あつ、あつそうだ(唐突)。ねぎゆう??の皆さんにおつかいのお小遣い渡さなきや…………(震え声)」

『おーい! ほしまちい! おめえーの番だぞ!』

「わかつた〜。……………じゃ鳥居さん、私、麻雀の方に戻りますね?」

……………ふう。やごおーさんとムキロゼさんとみこちが麻雀やってくれてて命拾いましたア……………。

『うつしやあ! ロン!』

みこさんがイキつてる声が聞こえる。

『大三元』

やごおーさんの声が聞こえた。

『四暗刻単騎』

これはムキロゼさんの声…。

『国士無双』

あつ、すいちちゃんだ。

『なんでツ!?なんでだよ〜!うええ〜ん!みこ、身包み剥がされちゃったにえ……………』

みこさんの泣き声（嗚咽）がよく聞こえる。今日も、いい日だなあ（しみじみ）。



あていしとスバルとねねちゃんはネギを買いに向かった。おつかいなんて久々だなあ……………まあ!?スバルとねねちゃんが居るし!?あていしもメイドだから（?）なんとかなるっしょ!!

「お会計1, 500円です!」

「あつ、……………ふっ。……………袋ください」

（ねねち見とけ、あれが宅配に頼ったぼっちの図だ）

（ゆうてねねもあんな感じだけどなあ?）

後ろでスバルとねねちゃんがヒソヒソ話してる……………あていしのことかな!?

「はい！ありがとうございます！」

店を出てから何を話してたか二人に聞いてみた。

「……………ねねちゃんとはスバルは何話してたの？」

「あくあが立派だなって話をしてたんだよ」

「そうそう！あくあ先輩とつてもかつこよかったです！」

「えへへ／／／／／」

（チヨロい……………そして可愛い！）



「おーい鳥居く玉葱余ってつかく？在庫切れなんだよ」

師匠がカチコンできた。玉葱の在庫が切れたらしい。

「玉葱ですかあ……………無いですね」

ワイが申し訳なさそうにしていると背後から声が聞こえた。

「キミは気づいていないのか？」

「ムキロゼさんツ！気づいていないとは一体…？」

「もうすぐ帰ってくるじゃあないか。44.5kgの紫玉葱が！」

「……………ハッ！！……………それはダメです」

「……………そうか」

「……………食べたかったんですか？」

「うん」

「即答！代わりに何かお酒出しますよ」

「人生はんみようむ……………」

ガラガラガラガラ！

「「ただいま!!」」

「やべえ美少女が3人も！足撫でに行ってくる！」

師匠はダツシユでねぎゆーの方に行ってしまった。

「こんなときはどうするのが正解ですかね？やごおーさん」

「麻雀します？」

「やります」

ワイとやごおーさんとムキロゼさんとすいちゃんて麻雀を心ゆくまで楽しんだ！

「……………すいません。私のねぎまは？」

「あつ（察し）」

「じゃあ敵だね？」

ワイは償いとしてそらさんの頼むものを豪速球で作りながら、このカオスな空間を心ゆくまで楽しんだ！

ドドンガドンドンドン！

「ぺこちゃ〜ん！」

「店主さんいつからそんなキャラになった？」

「ぺこ忘れてますよ」

「ぺこオ！」

……遂に卯年がやって来た！今日はみんな仕事を終えてワイの店に来ている。

「誰エが三十路じゃボケエ！」

「俺とおんなじだな船長！」

「師匠……開き直ってて素敵です！」

何故か師匠にチョップされた。解せぬ。

「……こより。……ロリ薬ってまだある？」

「お？フレア先輩も興味あります？まだ在庫ありますよ。ラブちゃんの目を盗んで作るとききました」

「ロリと聞いて飛んできました、どうもまつりです」

「同じく白上！」

「お前らホント悲しき獣だな」

「「「しまった!!!逃げろ!!!」」」

「まてえ〜!」

またロリ薬作ったのかあのピンクコヨーテ……………まあスバルさんがなんとかしてくれるやろ。知らんけど。

「ああ。私のフレアが私のスバル先輩に!!!」

「団長からは時々、狂気を感じるにえ」

「みんなをお餅にしてあそびたい!」

「こおねもお餅食べた〜い!おがゆは?」

「じゃあ頂こうかな」

「共食いって……………コト!?!」

ミオしゃの目から光が失われている。でも大丈夫!スバルさんが「ケモ耳は人権ない」って言ってたから! (責任転嫁)

カシヤン!手に手錠がはめられた。

「ん?なにしてるんですかスバルさん」

「侮辱罪で逮捕」

「成る程」

嵌められたッ!

仮にワイが変態だとしても変態という名の紳士だよ!

「うっ、ううう……どうして!どうしてうちの子が逮捕されなくちやいけないんですか!」

「お母さん。あの子が罪を償ってくるまで私たちは待とう。それがヴァンパイア族の掟だ」

「いやおまるんはヴァンパイアちゃうやろ」

ポルカさんとメルさんが昼ドラみたいな演技をしていたところ、ラミイさんがツッコミを入れた。ナイスツッコミ!

「逮捕されるとかガチィ!」

「余より目立ってる……羨ましい余!」

「yo! yo! わためえも目立ちたいyo!」

「ふう、今日のメインディッシュはジンギスカンだなあ。よし!仕込むか!」

「…やっぱり目立たなくていいyo……(目を逸らしながら)」

「yo! yo! 一富士二鷹三茄子!レジスタンス代表のお通りだYO!」

「じゃあ敵だね」

「ゆ、ゆ、ゆ……許して欲しいyo……」

「そらー! あくあさんが怯えてるじゃん!」

「ふふっ。ごめんねあくあちゃん。えーもごめんね?」

うーん。今日も平和だ。青い空、白い雲。ドラゴンと天使と角と侍がいる。

『龍の息吹! (炎のブレス)』

『天使の微笑み! (握力)』

『第6位階魔法! 『デス・サーティーン』(黒い稲妻)』

『真風流奥義! ジャキンジャキン! (ジャキンジャキン)』

「……モグモグ。うーん。バトルを見ながら食べるナゲツトは美味しいな!」

うーん。今日も平和だ!

「……………トワちゃん、平和ってなんなのら?」

「……………幸せ……………かな?」

「二人とも、プロテイン飲むかい?」

「いただきます(のら)」

トワさんとルーナさんとムキロゼさんはプロテインを飲み出した!

「いい加減お前は風呂入れ!」

「やだやだやだやだ! ルイ姐に言われてもやだ!」

「お風呂入らないとダメだよクロエちゃん。アイドルなんだから!」

「そうよ！AZKiちゃんの言う通りよ！アイドルなんだから風呂入らなきゃ！」

「今日は赤井さんなんスね……。わかりました！沙花又風呂入ってきます！」

「まあねね的には臭い女の子もいけるけどね」

ねねちはオールラウンダーだなあ（しみじみ）

「ハッ！高性能ロボのロボ子はわかったよ。オチが必要だってね！ロボ子に任せてよ！

あいるびーぱーつく（デデンデンデン）」

「鳥居さん！ロボ子さんが地面に沈んでつてます！引き上げるの手伝ってください！」

「わかりましたやござん！今行きます！」

今年も良いホロライブになりますように！ワイは心からそう願った！

【塩派 v s タレ派】『開戦』ツ!!

ワイワイ! ガヤガヤ!

隣のビルからにぎやかそうな擬音が聴こえてくる。師匠、腕はあるからなあ……腕は。たぶんきつと桐生会のみなさんが通っていることだろう。

「……………わためさんはタレと塩、どっちが好きですか?」

ワイは暇を持て余していたのでカウンタ―に座っているわためさんに質問をぶん投げた。

「んんん? わためえはねえ、塩がすk(なあわためえ! なあオイ! バカタレの絆を忘れたのかい! ええ!)」

「こんにちわフレアさん」

「こんにちわ鳥居さん」

「フーたんも塩が好きって言ってたよn(嬢ちゃん! この破竹の勢いを止めるつてのは、野暮つてもんだぜ?)」

「こんにちわ白上イ!」

「こんにちわ鳥居イイ!」

確かに破竹の勢いのような物をフレアさんと白上イ！から感じるような？感じないような？

「二人とも塩好きでしょ？なんでわためえのセリフ止めるのお？」

「それはわためえが可愛いからだよ」

「アレ？ワイの店はいつからロリコンの店になったんだっけ？」

「最初からやで」

「うん。最初からだね」

「わためえも、最初からだと思うよお」

「そうですか。で、なんで2人はわためえさんのセリフ止めるんですか？」

「塩シャチに負けた気分になるから」

「なるほど」

ガラガラガラガラ

「ばつくばつくばくーん！！！！沙花又だー！」

「どうも、隣の娘の最推しです」

「いらつしやいませ！ご注文は！」

「シオン先輩の素揚げで！」

「だからココ居酒屋やで…？」

「おかしいな。なんか汗でてきた……………コレが非常用食料あくあ わためべこら キアラの気持ちかあ……………（察し）」

「んじやタレでおねがいs（それはダメだよクロエ）……………なんでですか?」

「バカタレ共に負けた気分になるから」

「なるほど。流石シオン先輩です!」

「てことは……………何出します?」

「「「食べ比べじゃああ!!!」」」

「承りました!」

ワイは両方の味の焼き鳥を焼き始めた!

……………そうそう!これこれ!コレだよ!百歩譲つてパンとかまあ牛丼とかは全然〇

Kよ?

……………なんで居酒屋なのにダイオウイカとか、ドラゴンの尻尾とか、闇鍋とか料理し

てるんだよ!!!（魂の叫び）

ふう（賢者）。

「お待たせしました!塩とタレです!」

「待ってました!よッ!日本一!」

白上イイ……………照れちやいますよ。

「やっぱ塩よりタレだわ！塩って言うてる人タレ食べたコトないっしょ！」
あらクソガキクオリテイ。でも美少女だからね。無罪だね。

「フツ、おもしろー女ツ！」

この人意外とボケ担当だな。抜くなら黙ってぬ（以下略）。

「わためえはやっぱり両方好きだ！食べる手が止まんないね〜！」

あら末っ子。でもバブみも感じる…。一粒で二度美味しい…まるでトツ（以下略）。
「ああっ！クソガキムーブするシオン先輩可愛い！」

風呂入れ定期。っと。

ふう。ビール出すか！

バカタレと塩シヤチはく〜？今日も可愛い〜！

不死鳥がネギ背負ってやってきた…!

穏やかな午後の昼下がりに。ワイは行きつけの八百屋に立ち寄っていた。

「いらつしやい！鳥居さん！今日は何買ってくれるんだい？」

「八尾さん！今日はどうしましょうかねえ？偶にはサラダバーとかやってみましようか？あーあと果物を買ってケーキでも作ってみましようか？」

「アンタ居酒屋だろ？」

「そういえばそうでした。……いや八尾さん！これには深い理由があるんですよ！」

「ほう？どうゆうこつたい？」

「最近私はダイオウイカとドラゴンのシツポと闇鍋を作ったんですよ！」

「ごめん何言ってるか全然わからん」

「でしようね。私もなんでこうなったのか見当が付きません」

……うっ！脳裏にイメージカラーがオレンジ色のドラゴンが！な、なんでだ!?(棒)

ついでに金髪も!(棒)

「……お話中すみません。あの！美味しいネギつてありますか？」

話しかけてきたのは幻想的な髪をたなびかせいる美少女だった。その揺めきはまる

で小鳥の様な儂さを感じさせる。……………？この人、何処かで……………？

「あ、はいはい。ネギだね、何本位欲しいですか？」

「ええと……………十本で！」

「まいどあり！鳥居さんはなんか買うかい？」

「今日はいいですかね。また仕入れの時に来ますよ」

「あいよ！」

少し違和感を覚えながら、ワイは八尾さんに別れを告げて自分の店へと帰っていった。



ふう！店に着いた！開店の準備をするぞー！

ガラガラガラガラ！

ん？お客さん…じゃないか。開店前って書いてあるもんなん！てことはホロライブ関係者かな？……………そもそもお客さんの大半がホロライブ関係者だわ。

「久しぶり！鳥居くん！」

入ってきたのはさっきの店でネギを買っていた娘だ。

……………鳥居『くん』？

……………この呼び方は！この顔は！

——思い出した！

「キアラさん！お久しぶりです！」

「久しぶり！10年ぶりくらいかな？懐かしいね！バイト時代！」

「ええ！キアラさんも雰囲気変わりましたね！」

「アイドルになったからね！」

「……………アイドル!? 一体何処の事務所なんですか？」

「ホロライブ」

「成る程」



ココさんとやごおーさんが今日は相席して食べている。

「鳥居さん、今日の焼き鳥美味しいですね！腕上がりました？」

「ありがとうございますやごおーさん！」

「オイ店主！マジでこの焼き鳥うめえぞ！どうしたんだ？」

「実はですねココさん……！今日のお昼、キアラさんに会いましてね！」

「あつ（察し）」

……………?なんで二人は青ざめてるんだろう?まあいいか。

「わざわざ私の為にネギを背負ってやってきてくれたんですよ！」

「え?.....え?鳥居さん?」

「店主.....まさかお前ツ!!」

.....?二人ともどうしたんだろう?あ!そうそう!感謝がまだだった!

「いやあくくキアラさんに感謝しなきゃですね!」

「ええええええええ?!?!」

「や、やった!やりやがった!殺りやがったぞコイツ!」

「ね?そうですよね?キアラさん?」

ワイは厨房の方へ向かって微笑みながらそう言った。

「こ、ココさんどうしましょう!キアラさんが!キアラさんがツ!」

「おおお、落ち着けやごおー!おおお、落ち着けば、な、ななな、なんとかなる!」

.....?二人ともなんでこんなにパニックに?

うーん.....「a」!(サメ)

「もしかして二人ともこの焼き鳥をキアラさんだと思ってます?」

うわ、凄いスピードで首を縦に振ってる!あちゃー!それは中々シヨツキングな

.....?とりあえず、キアラさん呼ぶか...

「キアラさん!」

ワイが呼ぶと厨房からキアラさんがひよっこりと出てきた。

「ハイ！会長久しぶり！」

「キアラ!?……………久しぶりだな!!元気にやってるか?」

「配信見たらわかるでしょ!元氣よ元氣!」

「こんにちわキアラさん!無事でよかったですよ!」

「アハハ……鳥居クンの言い方が悪かったね。心配かけてごめんなさいやごーさん」

「いえいえ。無事なら良いんです。そもそも鳥居さんはそういうこと絶対にしませんからね。私たちもお酒が回ってたんでしょう」

「流石やごーさん!ワイにできないイケおじムーブを平然とやってのける!そこに痺れるウ!憧れるウ!」

「声にでてんぞ店主。……………酒だア!酒持って来い!今日は再会を祝うぞ!」

「任せてくださいココさん!今お酒持ってきますね!」

今日は宴だ!

黒企業

「拙者、給料が5円チョコなんでござるよ」

「秒給ですか？いい仕事ですね！」

「1秒に5人もちよこさんが貰えるなんていい仕事だなあ。(ガチイ？(幻聴))」

「時給でござる」

「……………今なんて？」

「時給でござる」

「oh……………。え？労基行つて下さいよ」

「秘密結社だから無理でござる……………」

「oh……………ストライキは？」

「試したでござる。そしたらラプ殿が——

『いいのかあ？ほらっ、これ、いろはの大好きなナスだ。コレを~~~~！ぱくっ！ん~~~~
~~~~ナスうまいなあ！……………え！ストライキしてるのに食べたいの!?それはダメっす  
よいろはさ~~~~んwwwwwwwwwwww』

……………つて煽ってくるでござる!!!」



「成る程……あ、注文のナスです」

「ありがとうでござる」

いろはさんはナスを食べ始めた。生のまま。

「ストライキもダメとなると後は……脅しますか」

「鳥居殿、物騒でござる」

「こう、なんというか、ツノをこう？ね？『ボキッ』と……」

「いくらなんでもやり過ぎでござる……」

ワイといろはさんが言葉のドツチボールに勤しんでいると、あつという間に時間が経ってしまっていた。

「ご馳走様でござる」

「お会計1000円です」

「……………5円チョコで勘弁して貰えるでござるか？」

「鳥マジシャンズ・パートナーの魔術師は許さない。ダメだね！」

「ツケでお願いしますでござる……………」

「わかりました……………その、……………生活に困ってたら言って下さいね？」

「……………気持ちだけ受け取っとくでござる」

哀愁に満ちたその背中は、ワイの涙腺を刺激するには充分だった。

——一方その頃、店内の端では。

「ういゝ！酒だ酒！酒持つて来い！」

部下に5円チョコしか払わないクソガキ・ダークネスが高い酒を飲みながら騒いでいた。

「…………ラプラスさん。一つ、私から言いたいことがあります」

ワイは近づいてラプラスさんに話しかける。

「んあ？ああ。鳥居さんかあ。吾輩に言いたいこと？なんだ？」

「?!?!?!お酒、暫く控えましょうか」

「?!?!?!は？えつちよつ？…え？おお？」

「部下に給料……………払いましょうよ！」

「待て！ちよつと待て！鳥居さんは勘違いしている！吾輩は悪くない！こよりが毎回毎回マシーン開発に勝手に使うんだ！」

「どのくらいの割合を？」

「99.99%」

「ワアオ。ソリヤアキツイツスワ。(%)アルコールジョキンカナ？」

「ダロ？ワガハイワルクナイ」

ワイはとても納得した。そして禁忌に触れようと思う。

「で？ラプラスさんはお会計、どうしますか？」

「喜んで皿洗いさせて頂きます……………」

たった今から、ラプラス・ダークネス、『1日皿洗い録』が始まるのであった……………。



……少し、勇気を振り絞ってみた。  
かな？



鳥居さんはとても優しい人だ。普通ならアイドルが目の前にいたら距離を取る。人によつては軽蔑したり、嫉妬してきたりもする。それは、アイドルである以上どうしようもないことであり、仕方のない事である。

そう、思っていた。

……鳥居さんは優しい人だ。秘密基地のリーダーとしての吾輩。アイドルとしての吾輩。そして、ただの、『ラプラス・ダークネス』としての吾輩。その全ては同一人物であり、一人の吾輩である。この人はその全てを知っている。ある意味、身内や仲間達を除けば一番吾輩を知っている人間だ。

「……吾輩、アイドル向いてないと思いますか？（向いてると思います。絶対にいいと思います。もし自信を無くしているのなら心配ご無用！私、鳥居が保証します！）」

……やっぱり優しい。

……甘えたくなっちゃうなあ。

「……鳥居さんは落ち込んでいる時、悩んでいる時、わからない時、どうしてますか？」  
「私？そうですねえ。私はとにかく、自分が辛いことから逃げて、逃げて、逃げまくるこ

とです。走って走って走り回って、地球を一周して戻ってくるころには嫌なことなんて感じませんよ。……なんて、どうです？」

「なるほど。中々面白いじゃないか！」

「ラプラスさん」

やっぱり、

「何か辛いことがあったなら」

やっぱり。

「いつでも相談して下さいね？」

優しい人だ。

「鳥居さん」

「なんですか？」

「渡したいものがあるんだ」

「おっ！楽しみです！」

吾輩はポケットの中から紙切れを取り出す。

「『いつでも肩たたき券』だ！」

「……………」

あれ？鳥居さんが突然無言に…？吾輩のプレゼントはまずかったか？いらなかった



# （（カレーライス23℃））

「カレーライスが食べたい!!!」

「うーん。………30分くらいかかりますけどいいですか?」

「もちろん!メル待つよ!」

「わかりました。ちよいつと作ってきますね。あ、お酒飲みます?」

「呑む!」

「じゃあ度数弱めのやつ持ってきますね」

メルさんが来た。カレーをご所望の様だったので早速作っていく。ついでに、暇だろうからお酒を出しておいた。テレビと酒があればまあ、退屈はしないだろうな。

さて!ワイもカレー好きやから頑張つて作るか!

まずは野菜、個人的にはじゃがいもが好きだ。なので野菜はゴロゴロとしたサイズにカットする。

次に鍋に投入していくが、今回は大鍋で調理しているのでしっかりとアクを掬っていく。カレーは大鍋で作った方が美味いんやで(ニッコリ)。

ほら、あの、給食のカレーって美味かったやろ?それや。



さて、あとはルーをランランして、そそののそいつと！

完成！味見をしてみようか！

「うまつ」

完璧だな（確信）

きつとメルさんも喜んでくれるだろう。

「ご注文のカレーライスですー！」

「おお！生きてる！生きてるよ！カレーライスが生きてるよ！メルの口の中に入りたがってるよ！」

「ふふふ、そんなカレーライスが食べたかったんですか？テンション高いですね？」

「カレーライスって生きてるんだよ！鳥居さん！」

メルさんはなんだかハイテンションだ。きつとそれだけカレーライスが食べたかったんだろう。

……………？

「メルさん、顔、赤くないですか？」

「ふえっ？そんなことないよ！メル！元気！」

「そうですか。確かにお酒はあまり減ってませんし、大丈夫そうですね」

どうやらワイの勘違いだった様だ。

「いただきまーす!!………パクっ!美味しい!鳥居さん!このカレー美味しいよ!」

「そうですか、それはよかったです。作った甲斐がありました」

「うん!鳥居さんも、たまごサンドに挟まってもらって」

「ん?………ん?あれ?ワイの耳壊れたか?今なんて言いました?」

「うん?だから鳥居さんもたまごサンドに挟まってもらって——」

「あれ?なんだろう?ん?え?どういう事ですか?」

ガラガラガラガラ!

ワイが困惑していると誰かが入店してきた。

「よお!店主!たまごサンド買ってきたんだけど食うか?」

「あ、どうもココさん。え?たまごサンド……?あ、食べます食べます!頂きます!」

「じゃ、このこと、ここに置いておくからな!んじゃまた!」

そう言ってココさんはワイの両脇にたまごサンドを置いていった。

「ありがとうございます!」

「じゃあな〜」

………アレ?今、ワイ、たまごサンドに挟まれてね?

「かぶかぶ〜〜ははは〜〜」

もしかして今回——!

「鳥居さん！水飲まないと死んじゃうよ？」

メルさんの言ったことが全部！実現するのかわか？  
え？てことはワイ、水飲まないと死ぬ………  
わか？

「——ツツツ!!!ガブツ!ガブツ!」

鳥居は走った。かの邪智暴虐なヴァンパイアの予言から逃げるために、走った。厨房の水道へ走った。

「——つぷはあ!こ、コレでワイが死ぬことはないのか？」

なんとか間に合った様だ。

「カレーも飲まないやダメなんだから!」

「——ツツツ!!!またか!!!ゴキユツツ!ゴキユツツ!」

ワイは急いでカレーを飲み始めた。

「ライスも飲まないやダメなんだから!」

「フア?え?ライスも………?ええい!ままよつ!」

ワイはライスを飲み始めた。一応高速で嘔んで飲んでいるがほぼ丸呑みだ。

「カレーライス23℃」

「常温!作りたてのカレーが2日めのカレーになっちゃまった!!!………まあ、これはコレで美味しいか」

「プリン…………潰す」

『ブチャ!!!』

「え?なんか冷蔵庫から嫌な音が……?……………ああああああああああ  
しみにしてたプリンがアアアアアア!!!ペシャンコにイイ!!!  
!!!ワイの!楽

「カレーライスも生きてる」

『ヤア!ボクウ!カレーライスツス!ヨロシクツツ!ツス!』

カレーライスライスが喋り出した!こええ!チヨこええ!

「豆腐…………潰す」

『グチャ』

「まただ!!!また冷蔵庫の中身が!!!もうやめて下さい!」

また冷蔵庫の中身が悲惨なことに。あとで美味しく頂く………。ああ、今日の晩飯、豆腐とプリンかあ(遠い目)。

「進○の巨人」

「ちよっ!!!」

……………その日、鳥居は思い出した。ホロメンに遊ばれる恐怖を。居酒屋の中に囚われていた屈辱を。

すいませんそこみーぎにいえーがー!



「翌日」

「鳥居さんごめんなさい！」

「そんな、頭を上げて下さいメルさん！」

居酒屋『鳥居』は突如現れた15メートル巨人によつて破壊されてしまった。だが、もうすでに世界的に治っている。

「いいですよ！ほら！この通り！お店は治りましたから！」

「でもメルのせいで……………」

「いいんです。気にしないでください。また、遊びに来てくださいね？」

「……………うん。わかった。メル！また行くね！」

「はい！……………あつそうだ！メルさんに渡したいモノがあるんですよ！」

「え！なんだろう！楽しみだなあ！」

ワイは渡したいモノを取り出す。

『ヤア！メルチャンツ！ゲンキ？ボクウ！ボクウウダヨオ！カレーライスクンダアヨ！コレカラヨロシクツツネツ！』

「……………メルさんが命を吹き込んだカレーライスクんです」

「……………え？」

『コレカラヨロシクツクツネツ！メルチャンツ！』

メルさんの思考回路は5分間の間シヨートしましたとき。

「めでたし、めでたし！」

「ぜんっぜん！めでたしじゃないよ！」

『メデタシツス！』

「メルカレーライスの育て方なんて知らないよ！」

「頑張ってください」

『ガンバツテ！ガンバツテ！』

「ほら？カレーライスくんも応援してますよ？」

「ううう………たしかにメルが作ったからにはメルが育てないと………！これからよろしくね！カレーライスくん！」

『ボクウニジユウサアンドオ！ヨロシクツク！メルチャンツ！』

「感動的だなあ」

ワイはとりあえずこのカオスな空間にありつただけの拍手を送った。まる。

## 元気に無理なく程々に

「……………鳥居さん」

ワイの店のカウンターにはツノを生やした一人の美少女が座っていた。その少女はなんとも言えない恍惚とした表情をしている。トイレを我慢している様に身体がモゾモゾと動いている。なんとというか……………その……………

——えっちだ！（ど直球火の玉ストレート）  
「どうしました？ラプラスさん」

なんて、ふざけた思考は置いておく。

「……………この人、引き剥がしてくれないか？」

すりすりすりすり！

「ああそれですか。無理ですね。諦めてください」

「酷い！鳥居さんはもつと吾輩を心配してくれ！」

すりすりすりすり！

「あゝあゝアアアア！美少女の太もも気持ちイイイイイ！」

ガンギまつてんなあ…（諦め）。

「……………この人、引き剥がせないか?」

「無理ですね。だつてワイが近づくと殴りかかってくるんですもん」

そう言いながらワイが師匠の方をチラ見すると。

「鳥居テメエ! この俺様の輝かしい美少女ウイニンングロードの太ももを邪魔してみろ! テメエのこの店の焼き鳥全部食うからな!」

この始末??はてさてこの先、どうなりますことやら (適當)

「(適當) じゃないですよ! 吾輩の太もも擦り切れちゃうよお!」

「ああラブ様ア! 太もも細くて可愛いイイ!」

「師匠…………… (輕蔑)」

「なっ!? なんだよ鳥居!? 文句あんのかア!? や、やんのかこのヤローオ!」

「マガジンマーク多いっすね」

「ああ! ツツコミ担当のラブ様可愛いツ!!」

抱きつき出したぞあの人。

「ちよっ!」

ダメだありや。止まんねえわあの人。でも腕だけは……………見た目もか、見た目と腕だけは確かなんだよなあ。隣の支店の売り上げも常に伸びてるし。

……………中身が伴わねええ!



「ラブ様ア！元気に無理なく程々にでいいからよお！少しずつ俺に推し活させてくれよお！」

あつ、伴った。

「師匠さん……ありがとうございます！是非そのセリフをそのテーブルに座っているピンクコヨーテにも是非ツ！聞かせてやってください！」

「うふふ……ラブ様にありがとうつて言われちゃった?!アタシつどうにかなつちやうわあ！そしてこよちゃんに言ってくればいいのね？いいわ！任せてくださいな！」

一人称も違うし、テンションも喋り方もおかしいし。………ラブラスさんの可愛さはヒトを狂わすんだなあ。元々狂ってる人はマトモになるのかな？

師匠はラブラスさんの机の下からこよりさんの机の下にジヨブチェンジした。

「h e y！その可愛い白衣の嬢ちゃん！」

「ミィー？」

「そう！ユーのことだよ！お嬢ちゃん………俺、紫のクロワツサンから伝言預かってんだ（誰がクロワツサンじゃ、吾輩のおなまえはラブラス・ディア・ハイエスト・デスサーティン・ダイナ・アートオブ・インパクト・サイン・皇・ロード・オブ・The・ダークネス！だア）………つまりお宅の総帥だな。スウウウウ（深呼吸）。『元気に無理なく程々に』………つてな？」

「グハア！」

あつ、こよりさんが吐血した。よく見たらトマトジュースだなありや。とりあえずおしぼり、おしぼり。

「こ、こよはちゃんと自己管理できてますよ（震え声）」

「おしぼりです」

「あつどうも。ありがとうございます。こよ、自己管理できてるよ………ね？ラプちゃん？」

「ダメだね」

「ばかみたい」

「なあ鳥居、その吹いたトマトジュースを拭いたおしぼり俺にくれよ」

「ダメだね」

「ばかみたい」

## 大人なお姉さん

大人。というのはい体何処からだろうか？肉体が熟したらか？それとも精神が達観し、悟りを開く頃か？

——否。

大人とはズバリ——！

「ん、鳥居様起きた？ふふっ！昨晩は本当に激しかったわね？あら？あらあら？どうしたの鳥居様？そんなにちよこのことジロジロみて？何か聞きたい事があるの？」

「……………じゃあ一つ聞きますね。……………なんでワイ半裸なんですか？」

「ヤダっ！鳥居様つたら！そんな破廉恥なこと、ちよこの口から言わせる気？」

うーん。落ち着け鳥居32歳。うむ？うーん。状況整理からな、やってこうな？

ええと、気がついていたら仮眠室にいて、で？……………そうそう、ちよこさんがいたんだ。で？……………まてまてまてまて！そつから全く思い出せないぞ！？

「……………一体何があったんだ？」

「ナニって……………鳥居様つたら！忘れたとは言わせないわよ！あんなにすごいコトしておいて♪」

ちよこさんはワイの二の腕に胸を当ててきた。

「あー。なるほどなるほど、完全に理解したわ。よつしや！もうやごおーさんやみんなに顔向けできねえ！ちよつくらこの自分の腹搔つ捌きに厨房いつてきまs（まてまてまてまて！）……………なんですか？もう、ワイ、自分という存在に失望してて早く終わらせたいんですけど。人としての道。ああ、地獄つてどんなどこかなあ？鬼にずつと罰を与えられ続けるのかあ。（鳥居様ツ!?ねえ鳥居様ツ!?）出来れば可愛い子がいいなあ。あやめさんくらい可愛い子だったら壊れずにいられるかもなあ」

「鳥居様!!!」

「なんですか？ワイもう呼吸すらしたくないんですけど」

「ちよつ!?勘違いしてますよ鳥居様ア!!!」

「なにがですか？もう早く土に還りたいんですけど」

「鳥居様はちよこに手を出してませんよ!?!?!」

「———否」

「いや否じゃねえんだわ」

「———本当ですか？」

「ガチイよ！ガチイ！鳥居様は潔白！ちよこは純潔！」

「……………じゃあなんでこうなってるんですか？」

「それは仮眠室に入ってきた鳥居様が酔っ払ってて、なんかめっちゃ珍しく甘え出すからヨシヨシしてあげて、で、汗かいてたからタオルで拭いて、服がなかったから肌で温めようと……………」

「やつぱはこの幸せ者の腹搔っ捌いてきます。幸せを独占しすぎた罪として十文字斬りの刑つすわ」

「ちよつ?!鳥居様は悪くない!悪くないわ!」

ちよこさんは必死にワイを止めてくれる。仕方ない。美女にそこまでされて折れんのは男じゃない。

「わかりました。まだ生きようと思います。で、ちよつと一つ質問があるんですけど」

「なあに?お姉さんに言っでご覧?」

ワイは向かいにあるソファを指差す。そこにはワイの服が畳んである。

「なんで着替えの替えがあるのに半裸のままなんですか?」

「……………だって男の人の身体を診ることないし……………ね?鳥居さんマッチョだし……………」

「本気ですか…?まあいいですけど」

「あつ、いいんだ」

「いや寧ろごほうb……………なんでもないです」

「鳥居様の趣味中々過激なのね」

沈黙が場を支配した数瞬後――

ダーン！

「大空警察だ！痴女がいるとの通報を鬼の少女から受けた！（イエーイ、余―だ余―）千代子！観念せえい！」

「えっちよ!?ガチイ!?鳥居様助けて!?!」

「Ban長（A h o y）とBanパイア（かぶかぶ）によりしくお願いします」

「いやアアアア!!」

千代子さんは大空警察さんに現行犯逮捕されていった。

……………2期生ってシニールだなあ。

外装改築は我々が引き受けたッ!

「予算はこれくらいなんですけど……」

「なるほど……!」

我々に一つの仕事が舞い込んだ! そう! 我々が「しらけん」に大仕事が舞い込んだできたのだ!

「やあチャツピー。今日もいい天気だね」

「チャツピーって呼ぶな!」

副社長とチャツピーがコントを始め出した。

「はいはい、タンマタンマ。ストツプストツプ。ここは団長の大胸筋に免じて許してあげてくれなみこち」

「にやんでだよつ!」

「チャツピー! そのお醤油とつて」

「ほしまちいつ! てんめえ! 誰がチャツピーじゃ! 誰が!」

「早くお醤油取らないと………殺すよ? (圧)」

「顔怖つ! (PON並感)」

「はいはい！みんな注目！」

「にえ？」

「お？」

「ほ？」

「筋肉！やはり筋肉は全てを解決する……！」

「なんか一人聞いてないけど……。まあいいや！はいっ！この度、「しらけん」に大きな依頼が舞い込んできました！」

「「「おおっ！」」」

うんうん。みんな手に汗握って一生懸命聞いているね。感心感心。

「なんと！今回は外装工事です！」

「「「わあ！」」」

「しかも我々常連の…………！」

「「「じ、常連の…………！（ゴクリ！）」」」

「鳥居さんのお店！居酒屋「鳥居」です！」

「「「イエーイ！！」」」

「れつぞー！！」

「「「（ぎ）ー！！」」」



「よろしくお願いしますね。みなさん」



ギコギコ。ガコガコ。トンカンテントンカンテン。ギザギザ。パリパリパリプーン  
!パリパリパリプーン!

ワイは今日一日店を休み外装工事を行なっている。工事は「しらけん」に頼んだ。外装工事と言つてもどちらかと言えばただの飾り付けだ。だから「工事」って言葉ほど大掛かりな物じゃない。

が、しかし、それでもしらけんのみなさんは真剣にやってくれている。時々ラミイさん芝刈り機機の音が聞こえてくるのはきつと気のせいだ。そうに違いない(洗脳済み)。

「シャチョー!こここんな感じでいい〜?」

「いいぞチャツピー。その調子だ」

「だからチャツピーじゃねえって!」

「社長。今回の案件は慎重に、時にバイオレンスに挑戦していきたいと考えています」

「無駄口叩く前に、まず手を動かさなかい副社長」

「へーい」

「だあってぼおくは平(社員)だあから〜。ヒラシャ〜ヒラシャ〜」

「だって僕はインターンだから。インター。インター(朗読)」

歌唱力と胸は反比例する。その実例がコレだ。

ダン！

すいせいさんがいつのまにかワイの背後にいた。そして肩を握りながら…。

「なんか失礼なこと考えてない？」

「小さいのも素晴らしいと思います！」

「ふへつwあつwえつwほ、ほしまちいw 鳥居さんが素直で良かったなwww……………」

や、やめてにえ！みこにそんな熱そうなおでん近づかないで！ヤメロ——……………あつ

ちゅー！あつちゅー！

「ふふっ！みこち可愛い！」

あー。ワイのせいでみこさんが…。まあ、ギャグ世界やし3秒後には戻ってるやろ。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼ (完成しました)。ぼぼぼぼぼ？ (どうですか?)」

ポルカさんに言われて初めて完成したことに気づいたワイは外装に目を通す。可愛

いデコレーションが映えてて女子受けが良さそうだ。元々女性客ばっかだけど。

……………端つこにある将棋のコマみたいなデコレーションが数少ない男性客を増やして

くれることを祈ろう。

「ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ (とてもよいとおもいます) ぼぼぼぼぼぼぼ (ワイのみです)

ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ (ありがとうございました)」

「なんだこのカオスな状況……。まあいいや！お代金「4621」円です！」  
「安すぎませんか？」

「いつも楽しい時間を送らせてくれるお礼ですよ！ね！みんな！」

「「「うん！」」」

「みなさん……。ありがとうございます！じゃあせつかくなので、食べてきます？」

「「「うん！」」」

——「しらけん」は、いつも〜〜楽しい!!!!!!

姫  
プ

「姫」。それは儂さの具現化。或いは体現者。そんな儂き「姫」は今——！

「はあ？んなたんのことナメてるのら？」

ブチギレていた!!?!!?!!?!!?

……………時は数刻前……………



今日はルーナさんと、トワさんと、ミオさんと、かなたさんが来ていた。どうやらルーナさんがお母さん役。トワさんがお父さん役。ミオさんが幼女役。かなたさんが短パン小僧役だ。今はミオさんとトワさんが話している。

「パパは医者を辞める」

「パパは医者をやめない」

「パパは医者を辞める」

ワイはコントを見ている。

「んなああああああ!!!」

「うわわあ、ママッ！ど、どうしちやの？きゅ、きゅうにおこつちえええ！」

「黙れシヤクレ小僧!」

「シヤクレ小僧!?!おま!それはライン越えだろ!」

「ママ!こわい!」

「ごめんなさいね。ミオちゃん…………全部パパが悪いのよ…」

ワイはコントを見ている。(2回目)

「ママツ!私の何がいけないんだ!」

「お医者様を辞めてYouTuberになるなんて…………そんな甘い業界じゃないんですよ!」

「な、なんで君がそんなことわかるんだ!!」

「そうだよ!ママなんで!なんにえ知っちゃうの!」

「お黙りシヤクレ(お黙りシヤクレ!?!)。…………そうね。そろそろ良いタイミングかしら

…………。じ、実はねみんな…………ママ、実はVtuberなの…………」

「「ええええええ!!」」

ワイはコントを見て(以下略)

「ママ!?!ど、どのくらいチャンネル登録されてるの!!」

「そうねかなたちちゃん。気になるわよね。そうね、だいたい90万人くらいかしら(現時点)」

「「ええええええええ!!!」」

「え、えつと！ママはV t u b e rで！えつと！人気者？」

「そ、そうねえ。ミオちゃん。嬉しいことにたつくさんの人から見て頂いてるわ」

「ま、待ってくれ！わ、私だつて化粧品紹介Y o u T u b e rに成れば一気ににんきm  
(あなたはそんな簡単じゃないのよ?) ……:はい」

「お医者さん、続けられるかしら？」

「でも、パパは医者を辞める」

「はあ？んなたんのことナメてるのら？」

ルーナー：キレた！そして冒頭へ――。

「……………やごおーさん。アナタの所のタレントさん。面白いつすね」

「私もそう思います。この面白さは皆さんの努力の賜物ですよ」

「確かに。配信で鍛えられてますもんね」

「ママ！キレた！」

ロリミオさんが状況を声に出して再確認している。

「こ、こんないうえ、す、スイッチも買ってもらえない！で、出てつてやる！」

「パパも出てく」

「じゃあウチも」

おっとこの流れは…？ルーナさんが置いてかれるな。

「ちよ!?ちよつと待ってよみんな!」

必死にママ役のルーナさんが引き留める。

「うるせえ!出てくんだよ!」

ミオさんが唐突にキレ出した。しかもかなりの饒舌。

「わ、私たち……やり直せないのかしら…」

「ママ」

「みんな…」

「パパは医者を辞める」

「ウチは出てく」

「ぼ、ぼくはあ(お黙りシヤクレ)お黙りシヤクレ!?まだ言い切つてないのに酷くない!」

「…………ママはつらいわ…」

(かなたさんの顎いつも丸いのに今だけめっちゃシャープですね)

(そうですね。あれだけ鋭ければゲームで武器として出てきても不思議じゃありません

ね)

(いやそれは不自然だと思います)

(そうですねか……………良いアイデアだと思ったんだけどなあ…)

(もしかして本気で出そうとしてました?)

(44, 5%くらいは考えてました)

(あくあさん<sup>か</sup>じゃないっすか)

(おじさんがに!.....!流行りませんか?)

(貴方の場合本当に流行っちゃうんでやめて下さい!)

(ハハハ!)

さすがBest girlやごおー。笑い方はホロライブのタレントに引けを取らない。

そして沈黙を貫いていたルーナさんが口を開いた。

「.....そう。みんなの考えはよくわかったわ……。みんながそういうならママにも考えがあります!」

ママー!今日から姫になるのら!」

「じゃあパパは悪魔になる」

「じゃあボクは天使になる」

「じゃあウチはノーパンになる」

ミオさんが爆弾発言をかましたと同時に、ある人がカウンターから絡んで来た。

「今俺の話してた?ノーパンって聞こえたんだけど!」



「師匠。森に帰ってください」

「ばっか。お前、土に返すぞ?」

「いい師匠さんですネ鳥居さん」

「は、は、は。と、とつても良い師匠ですよ…(棒)…………師匠!ギブ!ギブアップするんでそれ以上スカートたくしあげないでください!セクハラですよ!」

「俺の勝ちつと。ヨシ鳥居。生一つ!お前の奢りでな♪」

「はい…」

「なんや。あんなん最強やん。無敵やん。勝てる訳ないやん。無理やろ絶対。絶対にできるわけがないッ!できるわけがないッ!できるわけがないッ!できるわけがないッ!（ジヨジヨ好きなので4回言った）あとノーパン発言の後に生はアウトだと思いません。」

「まあ流石に今は履いてるんだけどな」

「勝てたわ。ブラフ読めないワイが悪いわ。でも仮に読めてたとしても、確かめようとしたらそれはもう変質者な訳で…………つまり、負け確って…コト!」

「ドンマイです鳥居さん!あ、私にも生一つ!」

「かしこまりました」

「ワイが生を取りに行こうとしたときにルーナさんが。」

「こんなんだのホロライブじゃねえかよー！」

ルーナさんが叫んだ。心が叫びすぎている。確かにトワさんが悪魔でかなたさんが天使でルーナさんが姫でミオさんがノーパンだったらそれはもう紛うことなきホロライブだ。

「へー。あーやつてお姫様が叫ぶのが、昔、ネトゲでよく聞いた『姫ブ』つてやつかあ。姫も大変だな」

「師匠…多分それ間違ってます」

「ハハハ！やつぱり鳥居さん達はうちのタレントさんに並ぶくらい面白いですね!!？」

姫は叫び、悪魔は医者を辞め、天使はしゃくれ、ノーパンはノーパンと惹かれあつた。そんな中ワイはせっせとみんなにお酒を運ぶ。

……そんな光景を見た *Best girl* はめつちや大笑いしていた。

## マチン船長と七味

あー。…a(サメ)……………Ah——  
よし。

「Ahoy! 宝鐘海賊団船長の~~~~宝鐘マリンです〜! キミたち~~~~せ〜の!」  
「「「「ヨースロー!!!」」」」

私は宝鐘マリン! 年齢は永遠の30さい(ピー!!?) (規制する音) ……ピッチピッチ  
のイケイケヤングだ。

さて、そんな私は宝鐘海賊団という船の船長を努めている。

目標は七つの海を股にかけ、伝説をこの目で確かめることだ。

だが、目標は目標。所詮は理想の集まり。

——私はまだ自分の船を持っていない。

……………なのに『船長』と呼ばれる。だからこの、敬称詐欺とも言える状況は好ましく  
ない。現実と理想が乖離しつつある。

そう感じた私はある一つの作戦を立てた。

そう。お金を集めようと…!

……だつて船買えないのお金が無いからだし、このままじゃただのコスプレ女だし……。

「船長！」

「あ、はい！なんですか？」

それを見た瞬間、私は、身の毛のよだつような恐怖の疼きを味わった。

「ん？どうしたんですか？船長？」

「キ、キミイ……身体が虹色に光ってますよ？大丈夫ですか？」

レインボー色の一味、通称ゲーミング一味は自分の身体を指差しながら、あっけからんと。

「あ、『コレ』ですか？コレは七つの海を股にかけたらこうなりました」

「いやそうはならんやろ」

「なつとるやろがい」

「な、な、なんて口の聞き方……！キミはもつと船長へ敬意を表しなさい！」

「そんなことより船長（そんなことより！）。鳥居さんからお手紙届きましたよ。ボトルメールで」

「ボトルメールで……？え？遂に鳥居さんも頭ホロライブに……？ていうかキミ、どうやって見つけたんですか？この広い大海原でそんなピンポイントに……？」

「ハハハ！いやだなあ！船長！僕は七つの海を股にかけた男。【七味】ですよ？」  
「し！七味!?なんだか辛そうな名前ですね…。まあいいです。ボドルメールを読みましようか」

【拜啓 マチン船長へ。

なんか蒸し暑いこの季節、かき氷が食べたくなりませんか？

ということがかき氷パーティーするんで都合が合えばきて下さい。

よろしく願います。 鳥居より」

うわお！名前！名前間違えてるよ鳥居さん！え？鳥居さんは普通、こんなミスしないよね？

え？船長がおかしいのかな？船長つて実は『マチン』だったのかな？

「よし！マチン船長！早速鳥居さんの店まで行きましょうか！失礼しますね！」

そう言うくと七味は私の腰に手を回してかつ私を担いじやいました。

「全速前進です！」

「ヨ、ヨーソロー…?」

……………。

……………。

……………！

「はっ！夢か！」

よ、よかつた〜！あんなことが現実じゃなくて〜。なんですか七つの海を股にかけた男【七味】 って!?!?ていうかなんで船長抜きで海制覇してるんですか!?!?フライングですよ!?!?

はあ。どつと疲れました。あんな夢見る程船長は疲れてたんですね。気づかなかつたワ…。

「ん？なんか左側がまぶ……………あつ」

「あつ！船長！目を覚ましましたか！」

目を開けるとそこには夢に出てきた七味と瓜二つのゲーミングレインボー一味が……………。

「は、は、は、……………夢だけど、夢じゃなかった（絶望）」

そこでまた私は気を失いました…。

■■■■■■■■■■

「え!?!船長!?!大丈夫ですか!?!船長!?!?!」

「いや身体が虹色に光ってる貴方の方が大丈夫ですか?」

「あつ！鳥居さん！どうも！」

「どうもジャックさん。お久しぶりです」

「お久しぶりです！ いやあ私、いい職場見つけましたよ！」

「なんで「七つの海を股にかけた伝説の男」が一味に紛れてたんですか？」

「そりやもうマリン船長が可愛いからですよ！」

「そうですか。それは納得です。さて、ジャックさん。いつまで発光するんですか？ 目、痛いんですけど」

「そうですね。そろそろ辞めましょう。体力を無駄にするだけですし」

「あとそういえばなんで勝手に手紙取ったんですか。あれ、エイプリルフールに渡そうと思ってたのに！」

「船長が可愛いからですよ」

「なるほど。納得です。じゃ、前みたいに生とかき氷のセットでいいですか？」

「お願いします！ あ、船長の分もお願いします！」

「わかりました。待ってて下さいね」

ジャックさんは七つの海を全て制覇した伝説の海賊だ。ある意味未来のマリンさんだろう。たしかエルドラドを見つけたとか言ってたな。あとダンスが得意だとか。

「ある日海岸を歩いていたら突然ワカメと一緒に流れてきたときは驚きましたよ」

「アレは死ぬかと思いましたが。あ、そろそろ船長が起きそうですが、僕を見たら多分また気絶するんで今回はおいとましますわ。では！」

「ええ！また！」

暫くするとマリリンさんが目を覚ました。

「う、うーん……」

「あ、マリリンさん。おはようございます！」

「あ……え？鳥居さん……？どうして……？あれ？船長、なんでここに居るんだっけ……？」

「マリリンさんはかき氷を食べにきたんですよ！」

「あ！そうそう！そうでした！そんなんでした！……あ、そういえば!!鳥居さんポドルメールで名前のところ、『マチン』って間違えてましたよ！」

「ああ。あれはエイプリルフルに渡そうと思つてたので……ハハハ！」

ワイはマリリンさんにかき氷と生を出す。

「かき氷と生、大ジョッキです」

「まてまてまてまて」

「なんですか？」

『『なんですか』じゃないんだワ！え、おかしくない？水分の割合おかしくない？え、鳥居さんもしかして船長のこと深海魚か何かだと勘違いしてる？』

「ハハハ。それはジャックさん……いえ、七味の方が頼んで行つたんですよ。マリリンさんへ、奢りだそうですね」



「奢りは嬉しいですけど……鳥居さん」

「なんですか？」

「今まだ春ですよ？冷たすぎませんか？」

「じゃあレンチンしてきますね」

「まてまてまてまて。そうはならんやろがい」

「なつとるやろがい」

「ええ（困惑）遂に鳥居さんまで頭ホロライブに……？」

「まあもう一年くらい経ちますしね。感化されちゃいました☆」

「………いつそのこと配信でもします？」

「私は視聴者で充分幸せですよ」

「………そうですか………あー。船長、ダンスレッスンが入ってるのもう帰りますね」

「そうでしたか。車出しましょうか？」

「えっ！鳥居さんって車持つてるんですか？見た事ないんですけど……」

「免許は若い頃に取ってたんですけど、ガッツリ乗り回し始めたのはここ3年くらいです。仕入れとかに便利なので。普段は裏の駐車場に停めてますね」

「………じゃあ送ってもらっても良いですか？」

「勿論！行きましょうか！」



屋『鳥居』なんですよ……あ、着きましたね」

「……………なんかもう、疲れちゃいました。……………車、ありがとうございました。……………  
じゃあ、船長はこれで……………」

「はい！また来てくださいね！」

マリンさんは疲れた顔でレッスンへと向かった。

『うわああアアア!!』

『船長！さつきぶりですね！船長！』

あー。そういえばジャックさん（七味）ダンスが趣味って言ってたなあ……………！  
最近お腹弛んできたし、ワイもジム行こ。

まっする！

やはりbelly danceをしよう。そうしよう

いつも通っているジムへと向かったワイは、ある衝撃的なモノを目の当たりにする。

——だって、そこにいたのは……………!

「あらあら?こんなちわ鳥居君。元氣だったかしら?」

「ア……………アキロゼさん!?な、なんで…」

「……………なんでって何かしら?……………あ!私が今日このジムに来たのはね、ベリーダンスの為の、腰の筋肉トレーニングなの!」

ワイが絶句していると、ワイと同じ顔をしている人を見つけた。

「鳥居っち……………アキロゼっち、朝からこうなんよ」

「ノ、ノエルさん……………」

「言いたいことはわかるよ鳥居っち。アキロゼ先輩、今日なんか違うんよ」

「……………二人が何を言ってもいるのかわからないけれど……………まあいいわ!一緒にトレーニングしましょう!」

「……………ええ。しましょうか」

「うん。今は筋肉がなんとかしてくれるよ！」

というところでワイ達はとりあえずトレーニングを開始した。……が、正直、なんで今日ムキロゼじゃないのが気になって、トレーニングに全然集中できない。横でベンチプレスをしているノエルさんもいつもよりキレがない。

筋肉のパフォーマンスを出しきれない様子だ。

逆に、アキロゼさんというと、

「よいっ……しよーよい……しよっ……ふう」

いつも以上にキレていた（動きが）。

……え？なんだろう。ワイの目がバグったんかな？

「いいや、鳥居つちの目は間違っちやらんよ」

「え……でも。……今、アキロゼさんが持ち上げているダンベルの重さは——！！」

「……………よいしよっ……ふう。やつぱ、50キロは重いなあー！」

そう、なんとアキロゼさん。ムキロゼの時より強くなっていた。確かムキロゼさんの時は片腕40キロが限界だったハズ……何故だ！？

と言うか普通、展開的には「うう、5キロも持てないよ」みたいになると思ってたのに！

ワイが困惑していると、ノエルさんが声を上げた。

「あ！あれ見て鳥居っち！」

「なんですか!？」

「アキロゼ先輩の体！光っちよるよ!!」

「まつ、まさか!？」

そう、アレは見たことがある……………!

この既視感の正体は——!

「そのまさかだよ鳥居っち……………アレは黄金筋肉比！アキロゼ先輩は遂に辿り着いたんだよ……………頂きに！」

「フツ、フツ、フツ。……………やっと気づいたかい？」

不敵に笑うアキロゼさん。笑いながら尚、ダンベルを動かす手を止めないことを見るからに!

「……………本当に頑張ったんですね」

「ああ、でもここまでこれたのは……………」

ボンツ！と如何にもアメリカンな効果音と共に、アキロゼさんは、ムキロゼさんになつていた。

……………某平和の象徴みたいだなあ……………

「君達二人が居たからさ！本当、……………本当に君達は良いライバルだよ」

「ムキロゼさん……！」

「ムキロゼっち……！」

「……今回は私の奢りだ（ボンツ！）……着いてきてくれますか？」

ワイとノエルさんは顔を見合わせる。

——そんなの、勿論！

「「行きます!!」」

ワイ達の返事が予想通りで嬉しかったのか、アキロゼさんは満面の笑みを浮かべている。

「……ま、行くのは鳥居さんのお店なんですけどね」

「頑張ってるね！鳥居っち！」

ノエルさんはサムズアツプをこちらに送ってきた。

「うーむ。人生はんみようむ、……ってヤツですね」

「それ私の寝言オ！」

アキロゼさんは恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「ハハハ！アキロゼっち面白いね！」

「……おさんぽ（ボソッ）」

「……（圧）」

ワイは無言の圧力を掛けてくるノエルさんを華麗にスルーして、ワイの店へ行く支度を済ませるのだった！

「……………ハハハ。お散歩かあ……………。うん、お散歩、ただの、お散歩かあ……………」  
ハイライトオフのノエルさん。

ま、焼き鳥と牛丼を出せばハイライトオンになるから大丈夫やろ！

そして、出発間際、アキロゼさんが。

「そうだ！鳥居さんのお店でベリーダンスを披露してもいいかしら？」

「勿論です！是非ともお願いしたいです！」

「団長もダンスできるよ！ほらっ！」

ノエルさんはその場でボックスステップっぽいなかを披露してくれた。

ワイはそれを隠れながらスマホで撮影して、フレアさんに送っておいた。

……………後日、そのボックスステップっぽいなかをフレアさんに完コピされ、赤面するノエルさんが居たとか、居なかったとか……………！



## 実は、…最近

「焼き鳥と枝豆とポンジュースで」

「とりあえずエビフライで」

「大乱闘」

「しゅばしゅばしゅばしゅばしゅば…」

「カカカ…お肌がいいモノを一つ…」

「ナイトとして相応しい物を」

「野菜以外で」

「可愛い白髪美少女の写真の一つ…」

「はい！承りました！」

多分みんな誰が喋っているか、セリフだけではわからないだろう。なので上から順に言っていく。

35P (45P)

(みこち)

えびふらいおん（変態其の1）

（まちゆり）

ハトタウロス（強者）

（ミオしや）

スバルドダック（大人気）

（しゅば）

ドクロくん（変態其の2）

（船長）

ルーナイト（超人）

（姫森さん）

ねっ子（連携が凄い）

（ねねち）

カラス（首輪監視マン）

（ラブ様）

だ。

……そう、マスコットとファンの皆様だ。

彼らは今までは隣のビル。つまり師匠が居る2号店の方に行っていた。

が、最近ホロメンが忙しいのか少し頻度が減った。まあ人気うなぎのほりが常に鰻登りだから仕方がないだろう。ワイも無理して来てもらうより、暇な時にゆるりと来てもらった方がしつかりと話せるから嬉しい。

で、ホロメンが減るということは、必然的にワイの店に入れる数が増えるということ。なのでみなさんが来たというわけだ。

みんな自分の推しに似たのか自分の推しが頼みそうな物を頼んでいる。………最後に至つては推しのママが憑依している気もなくもないが……まあいいだろう。ここはギャグ漫画の世界線だ。

ワイは以前ココさんに教えてもらった『気にしたら負け』をモットーに日々、働いている。

「やはり大乱闘をするのが我が使命……」

「ナイトとして……戦おう」

多分この人(?) たちはホロメンに似てヤベエ奴らなんだと思う。

「うちのみこちがさー」

「カカカ……こつちも船長が……」

「ねねちに健康のために野菜食べさせたいんだけど……」

「エビフライに混ぜ込むのがええで……」



ブ関係者に。深く、心の底から感謝した。

「はい、勝ちまん——」

「はい、勝ちまん——」

「いや、言わせませんよ？ダメじゃないですか。もうホロライブは歴れっきとしたアイドル事務所なんですよ？」

「えー。いーじゃんくアイドルだからって発言を縛る必要、くない？」

「まつりさんはやごおーさんが言ってた言葉覚えてますか？」

「覚えてるよ！確か……」

『——TKBさんの様なアイドルグループを……』

………だっけ？まあやごおーが勝手に言ってるだけだよ？まちゆり自由に生きていいーいや、イキた……（だからアイドルなんですって！）………えー。鳥居さんつまんない。………そういえばTKBってちく……（アイドルだっって言ってるでしょうが！）………えー！そんなに言われるとまちゆり！つまんない！」

「そうは言われなくても……」

「鳥居さん、つーまーんーない！なんとかしてよ！」

まるでイヤイヤ期みたいに駄々を捏ね出したのはまつりさん。ホロライブの清楚（自



……なんでバレてるんだ!? 大空警察か? 大空警察がやったのか!? それともなんだ?  
千代子か? 千代子本人がバラしたんか!?

「鳥居さん、監視カメラのセキュリティ、見直した方がいいよ?」

「なん……だと……」

ま、マジか!? ウツソだろ!? オイ!!

わ、ワイの店はまつりさんの言う通り監視カメラが置いてある。それも、結構な数……。

……が、しかし、しかしだツ!

ワイの店のセキュリティは師匠にやってもらってる。師匠はパソコン関連にはめっちゃくちや強い(のクセにガラケーを使う)。

……故に生半可なハックでは突破できない様になっている筈。実際ある程度勉強してたワイでもサツパリなレベルだ。大企業とまではいなくても、中堅企業レベルのガードはあるはず……一体どうやって!?

「ふふふ、不思議そうな顔をしているね鳥居さん!」

「ええ、そりやなりますよ! どうやったんですか?」

「フフフ……」



まつりさんは薄ら笑いをしながら指パッチンした。

「いでよ！ 麵屋！」

「らしいおーん！……鳥居さん。別に撃つたりしませんからヘルメット被らないで下さいよ」

天井からぼたんさんが現れた！

「ハハハ。いやだなあぼたんさん。……此処は戦場ですよ？」

そう、麵屋は恐ろしいくらい強い。なんかファンタジー的な能力持つてるホロメンは沢山いるけど、現代兵器持たせたら多分ぼたんさんが最強だと思う……ただし、ココさんとラプラスさんは除く。

「つて、そんな茶番はさておき、まつりさん。なんでこんなことしたんですか？」

「ふえ!? まちゆりは実行犯じゃないし！ ていうか仮にもアイドルであるちよこてんてーとイチヤイチャしてた鳥居さんには責められたくないよ！」

「ぐつ、言い返せない!?!……予定変更です。」

ぼたんさん！ なんてこんなことをしたんですか！

ぼたんさんはバツの悪そうな、申し訳なきような顔で。

「鳥居さんのお店のセキュリティを確かめる為ですよ。最近みんなが通い詰めてて………一歩間違えたらマスコミにタレ込まれて——ボンツ。」

……ですからねー」

「本当にすみませんでした」

DoGeZaを献上する。

「そんな!? 頭を上げてくださいよ鳥居さん! 私が悪いんですよ。普通に考えたらハツキングしただけでアウトですし!?!」

ワイに寄り添う様にしゃがんでくれるぼたんさん。長身のお姉さんが自分に寄り添うようにしてくれている様子を見ると、なんだか子供に戻った様な気がしてくる。

そんなぼたんさんに対してワイは土下座の体勢を保ちつつ、ぼたんさんを見上げる。

うん。

「本当にすみませんでした!!!」

「ああつ! またつ!」

頭を再度床に擦り付けた。

床は毎日ちゃんと掃除していてピカピカだから、まあそんなに汚くはない。土下座しやすい床を保っていた今までのワイに拍手を送りたい。安心して再度土下座が出来る。

再度……?!

「ハイッ! サイドテーブル!」

「くっ! まつりさんに先を越された……!」

まつりさんはサイドテーブルに肘を掛けてドヤ顔している。居酒屋でイキらずB A Rでイキつてもらいたいところだ。(ホロぐら)

「いやアンタら何してんねん? ……まあとりあえず起き上がりましよ? 鳥居さん」

「では、僭越ながら——よいしょ。

んじゃそろそろ真面目にいけますか」

「ですな」

と言いながら二人の手にはジョッキが……!

まあココ居酒屋やしな。順当と言えば大変順当でござる。ニンニン! (侍)

「で、どう強化しましょう?」

「はいっ! まつりにいいアイデアがあります!」

「どうぞ」

「もういつそ諦めてみんなでスキップをする!」

「でもまつり先輩スキップできないじゃないですか」

「できるし!」

まつりさんがぎこちないスキップ(?) を始めた。

「ぼたんさんは何かいい案ありますか?」

「私はそうですね……魔法の結界を張るとかどうでしょう? 科学に対して科学で戦わ

ず、相手のことを虚をつくというのはどうですか？」

「なるほど……！魔法が使えるホロメンに頼むんですね！」

なんとというパーフェクトプラン！流石麴屋といったところだろう。

「あ、そういえばさ、鳥居さん」

「え？なんですかまつりさん？」

「メルメルがこの前一緒に、この監視カメラの映像を見た時さ、『ふふふ。鳥居さん、カレールイスにしちやおうかな？』って言ってたけどなんのこと？」

「スウ——（メイド式呼吸法）。……ぼたんさん。魔法の結界って侵入者を撃退したりできますか？」

「設定に多分5日くらいかかりますね。ちなみに機械だと3日です」

ワイの顔面が真つ青なこのタイミングで、最も聞きたくない声が聞こえて来た。

『ヤアボクウ！カレールイスくんッ！』

「これなんの声？ぼたんちゃんわかる？」

「いや、聞いたことないですね。こんなピンポイントな鳴き声の生き物なんていないですよ」

「………カレールイス」

「「え？」」



——後日。

そしてワイは、かつてみこちが受けたエリトラ a n d トーテムマグマダイブの刑をマ  
イクラで受けるのだった。

うう、最近結構進めてたのに…。

……………まああとエリトラ10枚あるんですけどね！（やり込み過ぎ）

「鳥居さんは一ヶ所のチエストにエリトラを集め過ぎだにえ！みこちが全部持ってって、  
色んな場所に置いといてあげるにえ！リスク管理って奴だにえ！鳥居さんはみこちに感  
謝するべきだ n ……あっちゅ！あっちゅ！あっちゅ！あっちゅ！あ”あ”あ”あ”あ  
”あ”あ”!!!」

……………まああとエリトラ0枚あるんですけどね！（白目）









ワイはみこさんに2Pのコントローラを渡す。

「どうせなら35Pのコントローラがよかったですか？」

「みこはイナちゃんみたいに触手みたいの持っていないから無理だにえ……」

「その人はどんな人なんですか？ホロライブの人ですか？」

「イングリッschussだにえ。たまにみこもイングリッschuss扱いされるのが釈然としないにえ……」

「へえ！みこさん日本語上手ですね！」

「みこはJPだにえ!!!（大声）」

「とりあえずワイのエリトラ集めましょうか」

「にえ」

……結局、ワイはみこさんとエンドシップを探す旅を3時間ほど続けて、なんとか3枚手に入れたのだった。

「集めたエリトラの内一枚はみこさんにあげますよー」

「にえ!?!いいの?」

「ええ。私も楽しかったですしね」

「ふっ……みこは居酒屋鳥居のマイクラで頂点に立ったってことだにえ！」

「よかったですね。ゲームーズが作ってくれた天空トラップで火薬を取れば花火を作れ

ますよ」

「いつてくるにえ!……あ」

「あ」

移動中、ジャンプ連打していたみこさんは溪谷へダイブした。  
「あつちゅ!あつちゅ!あつちゅ!あつちゅ!あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!」  
そしていつものお家芸、マグマダイブを披露したのであった。

「……………鳥居さん」

「な、なんですか…?」

「……………る」

「え、すみません、ちよつと聞こえなかったんですけど…」

「……………る」

「あの、もう一回お願いします…」

「ビールだにえ!!呑まなきややってられないにえ!」

「了解です!じゃんじゃん呑みましよう!」

今回ばかりはワイもヤケ酒した。

そして二人とも二日酔いしたとき。

「ちゃんちゃんこだにえ!」

「なんかちよつと違う気がします……う、うぷ……」  
みんなも飲み過ぎには注意しような??

# めちゃくちゃ最高♪わため!

「お誕生日おめでとうございます!ライブ、最高でした!」

「いや、てれますなあ」

今日は6月6日、わためさんの誕生日だ。

ワイは配信で誕生日ライブを見たのだから、涙腺が緩んだ。本当に感動した。なんて、そんなありきたりな言葉しか出ないほど感動したんだ。

「7歳になったんですね!」

「そうだねえ。ふふつ、あくまで羊基準だからね。人間だとまあ……いくつくらいなのかな?」

「とりあえず飲み物とつて来ますよ!やごおーさんの奢りですつて!」

「わーい!ありがてえございます!やごおーさん!」

「いえいえ」

なんだこの微笑ましい空間。おじさん二人と美少女一人……うん。微笑ましい。

ワイが微笑ましいと思えば微笑ましいんだ。きっとそうだ、そうに違いない(確信)

ワイはとりあえず疲れた体に染みるであろうフルーツ系のジューズと、オシヤレなカクテルを……。

「何かしたいこととかつてありますか？」

「ん、わためえはねえ、歌いたいかない！」

「まだ歌えるんですか!？」

「いけるいける!ん、みんな大好きだけど、今日は4期生のみんながいなく♪」

「わかりました、今エドテンします」

トワ様、ココさん、あなたさん、ルーナさん、召喚ツ！地面からみんなが生えてくる。

………これほんとにエドテンかな？棺桶みたいなやつでないの？

「パパ医者を辞める。そして歌手になる」

「そして売れずに裏社会へ……ガハハハハハ！」

「ココってよく見たらシヤクれてるよね」

「それかなたが言うのら？」

「エドテン完了です！」

「ご苦労様、みんな急に呼び出してごめんねえ？」

「ううん。トワ全然気にしてないよ！」

「むしろ呼べwwwwww」

「そうそう、同期じゃん!」

「そうなのらよ! 仲の良さなんて介入する余地さえ生まれない同期なのら!」

「みんなは優しいねえ。ね、鳥居さん♪」

「いい仲間ですね。ちよつと嫉妬しちやいそうなくらいです」

「えへへ〜! 自慢の仲間だよお!」

わためさんが楽しそうなのは勿論として、呼ばれた4期の皆さんもとっても楽しそう  
だ。

やはり、『期』としての絆は仲の良さとはまた違った良さがある。

0期も、1期も、2期も、ゲーマーズも、3期も、4期も、5期も、h o l o Xも、み  
んな自分の仲間を大切に思っているに違いない。

「~~~~~♪」

わためさんは力強いハッキリと、それでいて優しさに溢れている歌声が魅力だ。

自分の好きなものがハッキリとしていて、やっぱりちよつと羨ましい。だからこそ応  
援したくなるのかもしれないな。

「~~~~~♪」

「~~~~!!」

「~~~~!!」

「~~~~~??」

ワイは、彼女たちホロメンが、自らを信じられるよう、陰ながら応援していきたいと、改めて思った。



# ハッピーバースデーハッハー

「ルイ姐！お誕生日、おめでとでごさる〜！」

「うえーい。おめつとー！」

「ルイちゃんおめでとー！」

「ルイ姐お誕生日おめでとー！」

今日はルイさんの誕生日。わーおびつくり。この前は羊だったのにもう鷹ですか。十二支だったら2年離れてるのにあら早い。……………というかホロライブで十二支作れるのでは？

そうなった場合、きつと鳥だけギチギチになるだろう。間違いない。花京院の魂を賭けよう。

「ルイさん。お誕生日おめでとごさいます」

「ハッハー！」

「……………それは「ありがとう」って言ってるんですか？」

「ハッハー！」

「ルイ姐がバグったでござる！（ハッハー〜）」

「あれ……………沙花又。これ、どっかで見たことあるような気がする。……………っは！  
……………もしかしてシオン先輩の魔法…？（ハッハー！）」

さすがが推しと遊園地デートを実現させたシャチ。気づくのが早い。

「そういえばそんなこともありましたね。もう一年くらい前ですけど。たしかあの時は二期生が魔法にかけられてたんですよね（ハッハー！）」

「魔法ってことはもしかして!? ラプちゃんやんがやつてるの!?（ハッハー！）」

「お前、そんなんだからすぐ借金つくるんだよ（ハッハー！）」

「だって別にラプちゃんやんが絶対払ってくれるし！こよはラプちゃんを信頼して作ってるんだよ？（ハッハー！）」

「余計タチ悪いわ！（ハッハー！）」

「にしてもこれ、どうすれば戻るんでござる？（ハッハー！）」

「……………（ルイ姐がこのままハッハーマシーンになつてれば、沙花又はルイ姐の立場である女幹部の座に着くことができるかも？）……………もういつそのことそのままでもいいんじゃないね？（ハッハー！）」

なんかクロエさんが悪そうな顔をしている。

「ダメに決まってるんだろ！絶対にダメだ！吾輩がハンバーグ食えなくなるだろうが!!（ハッハー！）」

理由がそこかい。まあでも胃袋を掴まれているのに抗える生物などこの世に存在しないからひょうがないな。

「きやあくー！ラブちゃんこつどもー！（ハッハー！）」

「ラブ殿っ！その通りでござる！（ハッハー！）」

いろはさんはルイさんを元に戻す方に賛成のようだ。ハンバーグが食べたいのかな？

……可愛い一面があるじゃないか（全部可愛い）

「まーでも、こよもルイ姐には働いてもらいたいし、治そつか！（ハッハー！）」

結果としてクロエさん以外は元に戻す方向性だ。

みんなが少数派であるクロエさんを見つめる。

「………あー、わかったー！わかったよー！沙花叉もルイ姐と話せないのは嫌だし、手伝うよ（ハッハー！）」

「だそうです。もう戻ってもいいんじゃないですか？」

「そう？！ですね。みんな優しくして嬉しいです」

「「「?!?!?!」」」

某CMみたいになっている。

そう、実は演技である。

まあ魔法という読みはかなりいい線いってたとおもう。しかしそれを超えるのが女幹部クオリティだ。

ルイさんの見事な嘘に踊らされたみんなは――

「ハッピーバースデー!!!!」

「ありがとう!!!」

満更でもなさそうな顔で、満面の笑みを浮かべていた……………。

## 関係リセットボタンぽちーw

騎士……というものを、みなさんは知っているだろうか？

騎士……とは主と民を守る者のことだ。騎士の本望は守ることであり、そこに特別な感情を抱いてはいけないのだ。

さて、なんとなくおわかりだと思うが、今日、ワイの店にはノエルさんとスバルさんが来ている。さらに立会人としてクロエさんが来てくれた。

そして今回ワイは一言も喋れない。なぜなら――

「こんまつする！ホロライブ三期生！白銀ノエルです！」

「ちわつす！ホロライブ二期生、大空スバウ！」

「ぼつくばつくばくくん！秘密結社h o l o o Xの掃除屋でインターン、シャチの沙花叉クロエです！」

なんでワイの居酒屋で配信してるねん。

「進行役の沙花叉です！今回はあるお店をお借りして！本格的な関係性のリセットをしています！始める前にインタビューを！スバル先輩！意気込みをどうぞ！」

「ちわーす！えーと、今回はノエルと仲を深められたらなって思います！」

「ありがとうございます！続いてノエル先輩！意気込みを教えてください！」

「わっ……わっ……」

なんかちいさいやつみたいになってる。

大胸筋は誰よりもおおk…

ドスンっ！

………え？

ふと、音がした場所を探す。その場所はワイの顔面の30センチ横だった。なんとそこにはメイスの形をした穴がポツカリと空いている。

——ツツツツツツ！！！！（戦慄）

「今回は是非ともスバル先輩と仲良くなれたなって思います（迫真）」

「あつ……ありがとうございます（小声）」

クロエさんも萎縮してしまっている。

だつてノエルさん。目がマジなんだもん。しょうがないよなビビったつて…。

「え、ええつとおー。まず最初にやるのは、

【お互い好きな食べ物を食べさせ合おう！】

です！店主さん！お願いします！」

それでもなんとか進行役としての役割を話そうとするクロエさんに、おじさん、涙出そうだよ…。

なんてな。とりあえず今回のワイの仕事はお食事を作ることだ。なんだ、いつもと変わらん。

さて、厨房に入ったワイはそれぞれが好きなものを作る。

ノエルさんはまあ、いつもは牛丼だけど、配信内で食べるんだったら、小チャーシュー丼かな。

スバルさんは魚類はイけるって言ってたから、「あくあまりん」からもらったお魚で刺身の盛り合わせを。

ある程度、自分たちで選べるように、お酒はいろんな種類をテーブルに持っていく。

ワイは黒子の様なものをつけて、テーブルに一皿づつ置いていく。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございますっス！」

ワイはカメラの範囲内から急いで出る。

ふう。緊張した。ワイは、ワイのことをみんながどう思ってるか気になったので、自分のスマホで配信のコメント欄を覗く。

どれどれ？

：初めて見るタイプのスタッフなんだけど

：黒子ってオイ笑 人形劇じゃないんだから笑

：草オブ草

：料理めっちゃ美味そうやん！

：店を知りたいけど絶対教えてもらえないよねー

：そりゃ俺たちみたいなのが通い詰めるからな

：あたりまえ定期

：黒装束だけあの人の人めっちゃムキムキじゃね？

：……………なるほど。概ね好印象らしい。見た目がよかったのかな？あとムキムキと言

われてちよつと嬉しい……！

「スバル先輩、あーん！」

「あ、あーん？……モグモグ（ヤミー）……ゴクン！うん！美味しい！」

「よかった！じゃ！スバル先輩も！あーんしてください！」

「お、おう。あ、あーん？」

「あーん？……んー!!!」

「びあああうまいいいい!!!」

別にそれ、ただのチャーシュー丼で、だし巻き卵じゃないんだけどな……………。全自動



たまご割り機じゃないんだけどな。

：完璧（笑）

：究極（笑）

：アイドル（笑）

コメ欄もお祭り騒ぎだ。そんな中でも進行役を果たそうとするクロエさんは司会の才能が光っている。

「さて！お二人とも！関係リセットボタンをぼちれましたか？」

「まあ、出来たとは思うっス！」

「完璧。その二文字です」

「そうですか！じゃあ今回の企画は成功です！ではみなさん！ごちそうさまでした！」

「おつまつする〜！」

「じゃあねーバイバイ！」

配信は終了しました——。

「ふう。鳥居さん！ありがとうございました！お陰でスバル先輩と仲を深められました！」

「そうですね。確かに深まりましたね！」

「スバルはちよつと怖かったス……」

「まあそもそも開幕早々メイス投げてますしね。沙花又、マジで頑張った……！」  
「皆さんお疲れ様です！ なにか作りますか？」

「「寿司！」」

「わかりました。じゃ握ります」

「「握れるの!?!」」

「………? なんならフグとかもできますよ？」

「「!?!」」

「じゃ! 作って来ますね〜♪」

ワイは厨房に入った。

（え! 鳥居さんつてもしかして結構凄い人?）

（まてノエル早まるな。確かに料理面は凄いが、いつもの行動は……アレ? 意外と本人自体はいいぞ?）

（周りが騒がしいだけなんじゃないかと沙花又は思うんですけど……）

（今思い返せばベンチプレス150キロくらいやってたし、意外と超人?）

（えっマジか……本当かノエル?）

(本当だとしたらやばいっすね…)

「お待たせしました！お寿司です！」

ワイは自信作を出す。

「おー！めっちゃ美味しそうやん！」

「だんちよ！これならいくらでもいけちゃう！」

「沙花叉もー！」

どうやらみんな喜んでくれた様だ。

……………というかヒソヒソ話すならもうちょっと声のボリューム下げなきゃ……………全部聞こえてたで……………まあ、褒める様な内容だったから嬉しいけど。

三人はワイを凄い人だと思ってくれてるけど、ここまで来れたのは、自分だけじゃなくて、みんなのおかげなんだよなあ。

ま、そこがホロライブのいいところなんだけどね！褒めてくれるし！

さて、追加のお寿司！作りますか！

## 外国製のまな板（タコ）

「おー！ いらっしやい！ 鳥居さん！」

「どうも。いつも通り、野菜の仕入れに来ました」

「そうかい。じゃ、なんか欲しいものあったら言ってくれよ。ワシは少し座ってるから」「はい！ じゃあ見させてもらいますね！」

ワイは八尾さんの店に野菜を仕入れに来ていた。ここの野菜は東京の中でもトップクラスに新鮮で、尚且つ安いんだ（ワイ調べ）。

思えばもう10年間もこの店にお世話になってるなあ。師匠の野菜もここの物だったし、バイト時代から通っているワイの思い出の店だ。

バイトといえば、そういえばこの前。ここでキアラさんと再会したつけ。……………そういえばキアラさん、ホロライブに入ったって言ってたなあ。

確か……………E Nだったつけ？ 同期にはサメと、死神と、探偵と、触手……………触手!? ア、アイ…………ドル？ アイドルなのかそれって…？

……………まあワイが知らないだけで、案外世の中には触手を持ったアイドルが沢山いるのだろう。ワイが世間知らずなだけだなきつと。たぶん。……………というか、キアラさん

の同期、なんか聞き覚えある組み合わせな気がする。

「……………まあいいか（イカ）。……………触手と言えば、最近たこ焼き食べてないなあ…。自分で作ろうかな？ とワイがネギを見つめながら考えていると、ワイの目の前に小さな手が現れた。女の人の、それも子供くらしい手だ。

おっと、邪魔になっちゃういけない。とワイは思ったので一歩、ネギ売り場から離れ、手の主を目視する。

「……………あつ」

そこに居たのはサングラスをかけ、頭に小さなベレー帽を被り、可愛らしいコートから触手が何本かはみ出ている……………イナさんだった。

「あつ！ お久しぶりです！ イナさん！」

「……………あつ……………うん。久しぶりだね。まさかココで会うなんて……………」

「ええ、こないだはキアラさんとも会いましたし、偶然って重なる物なんですわね!!」

「そうかもね。私のことはキアラから聞いた？」

「……………え？ 何かあつたんですか？」

「……………その様子だとどうやら何も聞いていないようだね。……………うぬぬ……………キアラめ……………」

ワイは偶然、かつてのバイト仲間との再会を果たした。最近はよく旧友と会うなあ

…と思ひながらワイは見た目があまり変わっていないイナさんを見る。  
やっぱり知り合いと再会するというのはいいい物だ。なんというかその、心がほっこりとする。

……うーん。我ながら口下手……というか語彙力が低いというべきか？ まあ言いたいことが相手に伝わればそれは立派なコミュニケーションだ。ホロメンもパッションで頑張っているし、ワイもパッションで乗り切ろう。と思う。まる。

### 閑話休題。

ワイが脳内でハッピーになって盛り上がっているとイナさんが口を開いた。

「……実は私、今日鳥居君に会いに行こうと思ってたの」

「なるほど。だから此処に……ってことですね！」

「うん。ま、予定は少しずれちゃったけどさ！ また久しぶりにご飯、食べさせてよ！」

「はい！ 喜んで！」



ワイはイナさんに様々な料理を振る舞うと同時に、自分が食べたかったのたこ焼きを作っていた。

「そーうえば……！ イナさんはどんな仕事をしているんですか？ ワイ、気になります

！」

「んー、そうだねー。『アイドル』かな」

「……………」

「なんで急に黙ったの？」

「いえ、別に。……………イナさんは子供みたいな体型をしているから、一体どんなファンの人がいるのかなあつて気になっただけで……………つちよ!! 触手で胸ぐら掴まないでくださいよ!」

「i, m n o t a l o l i」  
私 は ロ リ じゃ な い

「わかりました! わかりましたから!! 体宙に浮かんじやってます!!! 勘弁してくだ

さい!!!」

「……………以後気をつけてね」

「はい」

ワイ結構筋肉あつて重いのに（100キロ越え）なんでこんなにあつさりを持ち上げられるんだ? ………………思い出した。

そういやバイト時代にやった腕相撲ではワイが常にビリ2だったな。最下位はアメさんだったけど。

「で、一応どこの事務所かお聞きしても？」

「ホロライブ」

「ですよ。知ってます。いや知らなかったけど。なんとなく予想はついてました」

「私はE N一期生。私とキアラとカリとグラとアメの5人だよ」

「わーお。見事にバイト仲間じゃないですか。ワイの周りみんなアイドルになり過ぎては？」

「んー、でも、ホロライブがなかったらやつてなかったかもね」

「やつぱりやごおーさんはBest girlなんやな。って、たった今再認識していません」

「うん。海外だとメツチャ人気だしねやごおー」

海外でのホロライブイベントでは常に一等身やごおーが引つ張りだこなんだとか。

それは置いておいて。

「イナさんはしばらく日本に？」

「うん。みんなも一緒。ここには時々来るね。………イイ？」

「勿論！ 歓迎しますよ！ あっそうだ！ イナさんはもう師匠に会いましたか？」

「ただだけど………その言い方だと近くにいるの？」

「隣のビルにいます」



「メツチャ近いね。まあ久しぶりに店長に会いたいし、みんなが揃って此処に来れる日に会おうかな」

「はい！ 待ってます！」

ワイは近いうちに起こるであろう新たな混沌カオスに、心の中で期待を膨らませていくのであった。

「……………たこ焼き17個頂戴」

「メツチャ食べますね。共食いですか？」

「タコは共食いする生き物なのだ…!!」

とイナさんは平たい胸を、えっへんと突き出した。

成る程。外国製のまな板は水平だな……………つて！ 触手で持ち上げるのやめて下さ

い!?! ワイが悪かったです!!

ワイは3分ほど空中で弄もてあそばれたのだった。

## じやあ日本製のまな板は？

「アイツはマジでヤベエぞ。マジで。一言でも言ってみて下さい？ 船長の首が飛びますよ、物理的に」

「まな板」

「だからやめて下さいって！ ちよつ!? 会うのが60年くらい縮んじやいますって!?!」

「すみません、つい……」

「ついで済んだら警察は要らないべこよ……」

「まな板」

「ちよつ!? 鳥居つち!? まずいよ!!」

「大丈夫ですよノエルさん。フレアさんがサムスアップしてますし」

「ばっちぐー」

「フレア!? お前最近どうしたんだ!? 1000万か? 1000万行って舞いあがっちゃってんのか?」

「そうぺこよ！ テンション高すぎぺこ！」

「ふ〃あ〃ふ〃あ〃ふあ〃!!!」

「似てねえぺこだよ！」

例の如くカオスな彼女たちは3期生。ファンタジーな人たちだ。そしてファンアート（意味深）も一番多い（船長強過ぎ）（ゆうてぺこらもノエフレも……まあうん）。

どうやらJPにもまな板だった人が居たらしい。なんでも3期生だったとか。どれ、過去の切り抜きでも漁ってみるか……！

『う〃る〃う〃あ〃あ〃あ〃あ〃あ〃あ〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃!!!!!!』

「懐かしいなあ」

「え？ みなさんなんて言ってるんですか？」

なんかみんなの声がよく聞こえない。

「まずい！ 鳥居さんの鼓膜が破れたぺこ！」

「どっ、どうしよう!!? こんな時どうすればいいの？ フレア！」

「愛を込めたキスをすればいいと思うよ——」

「お前ここ来るといつつボケ要因だな。船長もびっくりだワ」

「——私に」

「ごめん船長が間違ってた。フレア、お前はボケ要因なんかじゃない。大ボケモンだわ」

「ポケモン！ ゲットだぜ！」

「ノエル！ ふざけてる場合じゃないぺこ！」

ノエルさんがフレアさんの頭を鷲掴みにしてなにか叫んでいる。そしてそれに対して、マリリンさんとペこらさんがツツコミを入れている。と思う。

「こいつらいつつもいつつもイチャイチャしやがって！ 自慢がオルアラ!? ペこマリはな！ 冷めちやつてんだよ！ チキンくらいな！」

「マリリンそれライン越えぺこ」

「ごめんて……まあそれはおいておいて、鳥居さんをなんとかしよう。な？」

なんかみんな一生懸命話してるけど聞こえない。ああ（察し）鼓膜破れたなコレ。流石に最大音量はちよつとやり過ぎか。

「多分ワイ鼓膜破れてるんで、伝えたいことがあれば筆談でお願いします」

「「……………」」

「ねえ私いいこと思いついたんだけどさ……」

「奇遇やね。団長も思いついたよ」

「本当に偶然ぺこね。ペこーらも思いついたぺこ」

「たぶん船長もおんなじ……………よっしや！ やるか！」

「「「ASMR！」」」



うーん……………無罪！

ワイの鼓膜が破れてから大体1時間くらい経っただろうか？ 鼓膜が破れた影響か、

三半規管に響く音がなんだかゴワゴワしてて少し気持ち悪いので、ワイは椅子を4つほど連結させて少し横になっていた。そして3期生に謝りながらワイは微睡に落ちたのだが…………？

なんか、目が覚めたらホロメンが集まっていた。

「……………なんでみなさん勢揃いなんですか？」

「「「起きた!!」」」

なんかみんなビックリした顔してるけどなんで言ってるんだろう？ まだ鼓膜が治ってない。

「マリリン、思ってたより早かったべこね。まだ撮りきれないけど、どうするべこ？」

「ん〜ん〜……………そうだね、やむおえない……………ロボ子先輩」

「ふっ！ 僕の出番だね！ 鳥居さんごめん！ セイツ！」

「ギャフ！」

ワイはまた微睡に強制的に落ちた。墜落したの方が正しいか？

……………あ……………こ……………れ

……………や……………ば

どれだけ時間が経っただろうか。

「……………ま〜」

……………ん？ なんか聞こえるな…？

「……………はあちやまっちやま〜!!」

「うわあびつくりしたあ!! ……………つてあれ？ 聞こえるぞ？ もう治ったか…」

どうやら鼓膜が再生したようだ。やっぱり早いな。本当は2週間くらいかかるのがこんなにも早く……………。やっぱりあの少年は凄いな。

ワイの店に通っている数少ない常連さんの内の一人が、ワイに鼓膜を治すコツを教えてください。

その少年曰く、

『バカみたいに筋肉鍛えて、不死身の怪物になったつもりでいれば、身体の再生能力が何倍にもなる。なんでそうなるのか？ だって？ そりやあまあ……………リヴァイアサン「水神の加護」つ

てやつよ。鳥居さんレベルなら腕がもげても多分治るぜ。……………まあそんな場面ないと思うけどな！ ハハハ……………そういえばさ、ここ一年くらい、この店に結構美少女

たちがくるようになったよな？　鳥居さん何か知ってる………おい！　ちよつ！？　厨

房に逃げんな——』

だそうだ。

何を言ってるのかさっぱりわからないが、まあとにかく筋トレして、不死身だと思うことが大切らしい。

結果として通常よりも早く再生したので、言っていたことは本当だったのだろう。と思う。仕組みが全くわからないままだが。

まあ彼なんて時々自分の腕をもいで『これ食う？』ってやってくるし、もう慣れたものだ。

そういえば最後、なんか美少女がどうたら言っていたが、何を言ってるのかさっぱりわからない（明後日の方角を向きながら）。

とまあ河童の少年のことはおいておいて。

「はあちやまっちやまっ！」

「おはようございませす」

「今は夜よ？」

「はあちやまさん。気にしたら負けです」

「会長みたいなこと言うのね。あつ、そうそう。鳥居さん、耳は大丈夫かしら？」



「はあちやまモードからはあとさんモードに切り替わったようだ。」

「あっはい! 大丈夫ですよ!……………あれ? そういえばみなさんはどうしたんですか?」

あたりを見渡すも、はあとさんしか居ない。

「鳥居さんが寝てた間にね、こんなもの撮ってたの」

「そう言っちはあとさんはある一つの動画をワイに見せてきた。その動画の内容とは――。」

『鳥居さんいつもありがとうございます!』

『鳥居さんはボクたちホロメンの支えだよ!』

寝てるワイの耳元で感謝を囁く動画だった。

「……………// // // //」

「鳥居さん、珍しく照れてるわね。まあ無理もないわ。私だつてこんなことされたら照れちゃうもの。ちなみに主催は船長よ」

「会ったら感謝の言葉を伝えます」

「良いと思うわ。あつ、そろそろ3期生の番よ」

ワイは、はあとさんとの会話から、動画の方に意識を移す。

『鳥居っち! いつも筋トレ一緒にしてくれてありがとう!』

『鳥居さん！ いつもしらけんのみんなと仲良くしてくれてありがとう！』

『鳥居さん！ いつも美味しいお料理を作ってくれてありがとうぺこー！』

ううつ……………目から汗が（涙）

『鳥居さん。勝手に気絶させてごめんなさい。面と向かって言うのはなんだか恥ずかしくて……………ううん。ダメですね。こんな風にお礼を伝えるなんて、ズルですよね。……………でも言わせてもらいますね。……………鳥居さん。いつもありがとう。…船長は、この店に来るようになってから、今まで以上にみんなのことがよくわかるようになりました。ホロメンのみんな。一味のみんな。身近な人の大切さが、前よりもわかるようになっただけです。本当に、ありがとうございます。船長は、この店に来てとっても幸せです！』

「うう……………（涙）ま、マリンさん…（涙）」

『あ、そうそう。一つだけ、謝らなきゃいけないことがありました！』

「ん？ 流れ変わったな？」

「いやそれワイのセリフですよはあとさん」

「てへ??」

『実は船長は……………年齢のサバよんでました』

「ブフオwwww」

!!!!!!!

「ちよつｗｗｗｗはあとさんアイドルの笑い方じゃないですよｗｗｗｗ」

「で、でもｗｗｗｗこんな真面目な顔で、こんな真面目な雰囲気でこんなこといわれて吹くなんてｗｗｗｗｗｗ」

「きつ、気持ちはすごくわかりますけどｗｗｗｗま、まずは最後まで聞きましようよｗｗｗｗ」

『実は船長は今日誕生日なんです!』

「はっ!!」

ワイとはあとさんはハツとした。とにかくハツとした。

『……………なので今年で31になります……………。サバよんでてすみませんでした!!! でも

船長は美少女なので、無罪……………ですよね?』

「中々面白いですね。普通に『誕生日なんです』じゃなくて、『サバよんでました』で始まる誕生日カミングアウトは初めて見ました」

「きつと船長はこの為になるーちゃんの叫び声を聞かせて鳥居さんをダウンさせたんだと思うわ」

「素直じゃないと言いますか……………不器用と言いますか……………ふふつ。祝つてあげましようー! はあとさん! 今みんなは何処に?」

「隣の師匠さんのところのビルで食べ始めているわ。私はジャンケンに負けて鳥居さん

に説明する係になったの。だからあちやまお腹ぺこぺこく!!!」

「わっ!? 急に切り替わりますね〜! それはそれはお待ちせしました! マリンさんの誕生日パーティーにレッツゴーです!」

「おー!」

ワイはマリンさんの誕生日を祝いながら騒ぎ尽くした。

そして、宴が朝まで続いたことを語る必要はないだろう。

# おハーフ

「半分……な！」

「待って下さいアイリスさん！ アイリスさんの方がピザ少ないですよ!!」

「落ち着けよ。鳥居。俺が全部食ってやるからさ」

「師匠は少し遠慮というものを覚えて下さい！」

「うるせえ！ 俺のピザだ！」

師匠ワイより2個年上なのに大人気ない…。30代後半いきそうなのに…。

「なんかムカつく……フンツ」

「いふっ！」

師匠に肘で突かれた。痛い。でも何故だろう、悦びの感情が……。やめとこう。ここにはアイリスさんも居るんだし。反省、反省。こういうのは2人の時にやらなきやな（読者&東風「!?」）

さて、今日はワイの店にアイリスさんがピザを差し入れに来てくれた。焼き鳥屋にピザを差し入れると言う、中々ないシユチュエーションもシユールだが、一番シユールな

のは、途中から来た師匠がワイのピザを全部食べようとしているところだ。

「それにしてもアイリスさんが、まさかホロライブに入っていたとは……!」

「いやでもバイト辞める時アイリス言ってただろ? 『私! 歌います!』 ……つてな」  
「そんな宴会での隠し芸みたいに私言つてませんよ?」

「いやでも、懐かしいですねえ……アイリスさんの方が私より全然手際良かったですし」  
「まあ仮にも先輩だしな? な! アイリス!」

「私なんて全然ですよ。店長なんて、やろうと思えば1人でお店回せたじゃないですか? ……そういえば、今更ですけど、なんで私を初めに雇ってくれたんですか?」

「ん? そりゃ……まあ……可愛いから??」  
「なるほど??」

アイリスさんも納得したようだ。

「いや師匠も充分かわ……いやなんでもないです」

おっと。発言には気をつけると自省したばかりなのにな。なんか今日は口が滑るな。なんかの記念日か? なにか、大きな節目を迎えた気が……するような、しないような。

うん、とりあえずタコスでも作るか。

「タコスになって来ます」

「?!?」

「あ、ごめんなさい。タコス作ってきます」

「……………(\*、▽、\*)」

なんか見たことない顔で笑ってる。安心したのかな？

ま、いいか。タコス作る。

材料は、知り合いのタコス屋から仕入れたトルティーヤと、これまた知り合いのタコス屋から仕入れたサルサソースに、なんかノリと勢いで野菜とお肉を入れていく。

そういうあの店、最近行ってないなあ……。兄妹で仲良くやっているお店なんだけど、すつごく安くて、美味しくて、お店も豪華なんだよな。絶対採算取れてないだろ。取れてないな。間違いなく取れてないのら。だつてタコス一つ100円だぞ。全種類100円だぞ？

まあ師匠やワイも採算ギリギリを攻めるスタイルだし、人のことをとやかく言う資格なんてない。まあ趣味の仕事ってやつかな？でも趣味にしては年季がこもっていると云いますか、味が熟練のソレなんだよな。ワイでもまだまだ到達できない『頂き』にいるわ。

……………あの店ならホロメン連れてつても良いかもな!!前向きに検討しよう。

……………うん！完成！つと！

タバスコを片手に持ってワイはテーブルに戻る。

「お待たせしました〜」

「わ〜美味しそう!」

「めっちゃ美味そうだな。じゃあアイリス、半分こな!」

「おハーフですわ〜!!」

なんか違う気もするけど、まあ、アイリスさんが可愛いからいつか!

「ゴ馳走様でした!」

「早っ……………ってアレ? ワイの分は…?」

「……………てへぺろ?」

「……………まあ可愛いからいいか」



## 実家帰るぞ

「オイ和葉<sup>かずは</sup>。実家帰るぞ」

「和葉……？誰のことだ？」

ラブラスさんが困惑している。

「そういえばそろそろお盆ですな師匠」

「その師匠つてのは今から辞めろ。実家でそれだと違和感ありまくりだ！」

「わかったよ。柚葉<sup>ゆずは</sup>ねえちゃん」

「あー。なるほど。……そういえばマリリンさんが言ってたわ。師匠さんと鳥居さんは姉弟だったって。まあ吾輩は10年前の二人を見ているからなんとなくわかるけど、他のみんなは確かにびっくりするかもなあ……」

どうも、鳥居和葉です。33歳です。ホロメンと会つてもう一年も経ちましたね。

そして我が師匠こと鳥居柚葉です。34歳です。ワイの方が誕生日が早いので今は1歳差ですが、もうじき師匠の誕生日なのですぐ2歳差になります。ラブ様推しになつてもう約2年です。

我が鳥居姉弟きょうだいはお盆に毎年帰省しているのです。

ワイはいつもは年中無休で働いているけど、このシーズンだけは休みます。

……ちなみに働きたすぎて休日を最低限申請し、その日も働いています。(休め)

「オイ和葉。今は午後9時だな？ 出発は11時だ。もち、お前運転でな」

「わかったよ。それまではここに居るかい？」

「いんや？ せっかくの帰省だ。手土産でも買ってくるよ」

「ん。じゃあ俺も適当に買っとくわ」

「そうしとけそうしとけ。んじゃ、2時間後な！」

「うい！」

「……なんか新鮮だな。鳥居さんの口調」

「そうですか？ 普通だと思いますけど？」

「まあ口調自体は普通だけど、呼び方と一人称がな……普段は私だけど、俺が素なんだな」

「俺は家族に対しての一人称ですよ。どちらかといえば素は『ワイ』ですかね」

「なんか一気にヲタクっぽくなったな」

「トワ様ヲタクに言われたくないです」

「ヲタクじゃないし！ 眷属だし！」

「ガチですねー」

「当たり前だ！あんなかつこかわいい人を好きにならないやつの方がどうかしてる！」

「意外とラプラスさんも当てはまるのでは？」

「……………まあ、確かに当てはまるかもしれないけど……………まあいいや。吾輩は酒を所望するー」

「子供なのにそんな飲んじやいけませんよ？」

「まず子供にお酒提供するなよ（正論）」

「ぐっ…!?このロリ……………強いっ！」

「ふっ……………ニンゲンとは儂き生き物だな……………」

「合法ロリって素晴らしいですよね」

「えっ（ドン引き）」

ラプラスさんは手を、まるで貞操守るように胸のの前で組んだ。

ワイはラプラスさんを安心させる一言を放った。

「ワイは鑑賞派ですから」

「えっ（ドン引き）」

おっと。お気に召さなかったようだ。

「人間は儂い生き物ですから、少しばかりの『業』<sup>くわう</sup>はしょうがないですよ」

「いやいやいや！吾輩、騙されねえから！そうやって油断させてからいたたくつもりでしよー！この変態！」

「はうっ！（尊死）」

合法ロリに罵倒してもらえるなんて……一体いくら払えばいいんだ!?

「……………ほんとに姉弟なんですね」

「血は繋がってませんけどね。あとさつきのは8割くらい冗談です」

「残り2割は本当じゃないか!?やばい！生物としてのスペック差が果てしないほどあるのに、恐怖の感情がとめどなく溢れてくるー！こんな恐怖、吾輩、生まれて初めてだ！」

「はははー！」

ラプラスさんは恐る恐るといった様子で。

「……………ちなみに残りの2割……って」

「ああ。罵倒してもらうってところですね。合法ロリ云々は関係ないです」

「えっ（ドン引き）」

「引かれるのもまたよし……！」

「成る程、この世界で一番強いのは吾輩じゃなかったのかあ。いやーエデンも広いなあ（遠い目）」

「ま、そんなことは置いておいて、どうです？ラプラスさんも来ます？」

「あ？？」

白髪長髪首輪ロリは宇宙猫みたいな顔をしている。そして山田は考えるのを、やめた。

「ぼえぼえぼえ〜」

そして自分の部下の口癖（？）しか言わなくなってしまった。

「ああ、若いうちからお酒を飲むとパーになるって、本当だったんですね……！また一つ賢くなりました!!」

「いや吾輩地球とタメだからな??？」

「おつ？じゃあ本当に合法なんですか？やっぱりさつきのお8割は訂正して、ごめんさない、1割だけ嘘に……（わー！このおしゃけおいしくない〜！てんちよーさん。おれんじじゅーちゅくだちやい〜）……なんだ、ただの白髪長髪首輪ロリか」

「……………ふう。吾輩の貞操は守られた！」

この楽しい茶番をいつまでも続けていたい気分ではあるが、そうだな。せつかくだら。

「まあとりあえずラプラスさん。行きますか？行きませんか？」

ラプラスさんは、うぬぬぬ。と唸りながら頷いた。

「吾輩はもう実家に帰ってあるからな。予定もないし、いくぞ。……………というか今って

お盆終わってないか？」

「ラプラスさん。『気にしたら負け』です」

「鳥居さん、だいぶホロライブに染っちゃいましたね」

「いいことですよね？」

「まあ応援される側としてはな。嬉しいな／＼／」

「……………そりゃ師匠も落とされるわ（小声）」

「ん？何か言ったか？」

「いいえ？あ！そうだ！実家に帰る時のお土産！一緒に買いに行きましょうよ！」

「……………おう。でも吾輩、あんまし詳しくないぞ？」

「ラプラスさんと回ればなんでも楽しいですよ！行きましょう!!」

「……………そりゃ師匠さんも落とされるわ（小声）」

「ん？何か言いました？」

「いいや？お土産選びに行こうぜー！」

「ひゃっほう!!」

ワイとラプラスさんは夜の街を駆け出した!!

# 『あの場所』へ行こう!

「コッチの方がいいんじゃないか?」

「いや、でもコッチの【ザ・TOKYO】って感じのお土産も……」

ワイたちは出発の前にお土産をお土産屋さんに行つて探していた。

「a!」

「Fuok you!!!」

「……………ラプラスさん。私、なんかかつてのバイト仲間の声が聞こえるんですけど……」

「鳥居さん、吾輩も、なんか同じ事務所の海外の先輩の声が聞こえるけど……」

ワイとラプラスさんは見つめ合う。

「まあいつか!!」

ワイたちは見ないフリをすることにした。

「そういえば和葉見ないよね」

「たしかに、今度店になんかヤベエの持っでこうぜ」





「まあ筋トレは続けるとして、そういえばラプラスさん。h o o Xのみなさんは暇ひまですかね？」

ワイは腕立て伏せをしながらラプラスさんに質問する。

「うーん。最近は配信だったりでみんな忙しいからなあ。吾輩も完璧には把握はあくできてないですね。鳥居さんが気になるようでしたら、吾輩から連絡しますけど」

「わかりました。じゃあ私からやごおーさんに直接頼んでみます」

「!？」

プルルルルルル。ガチャっ。

『あ、どうも。こんばんわ鳥居さん』

「夜分遅くにすみませんやごおーさん。あの、実は私、実家に帰省するんですけど、h o o Xのみなさんのスケジュールって空いてたりしますか?」

『……………もしかして、前話はなした『あの場所』に行くんですか?』

「はい、今回の帰省はその目的が大きいですね。どうでしょう? やっぱりダメでしょうか?」

『……………いえ。わかりました。ちょうど今は夏です。夏休みは若者の特権ですから!』

「……………という(こ)とは?！」



おいしい

吾輩<sup>わがはい</sup>は今、鳥居さんの車に乗っている。

「やっぱ沙花叉的には、静岡といえ、富士山！つて感じなんだよね〜」

「あはは〜クロちゃんおつとな〜！」

「……………ん？なんで富士山だと大人なんでござるか？」

「そりゃあいろはちゃん！あのクロちゃんが食べ物以外のことを口にしたんだよ！すごい進歩だよ!!」

「なるほどでござる!!」

「オイ、なんで本人差し置いて納得してんだ侍」

「む！新人のくせに生意気でござる!!」

「10年経ってるんだから新人も何もないっていつつも沙花叉言ってるじゃん!!なんでいつまでも新人なんだよ!?!沙花叉はペンギンじゃなくてシャチだぞ!!」

吾輩は騒<sup>いちべつ</sup>がしい部下たちを一瞥<sup>いちべつ</sup>して、静かに窓の外を眺めていた。

「……………大丈夫？ラブ？」

そんな吾輩を心配してくれたのか、幹部が話しかけてきた。

「ああ、平気だ。懐かしいなって想ってな」

「そうだね。私も、ラブと同じ気持ち」

「……………うん」

なんだかとても懐かしい気分だ。ははっ、このままじゃ吾輩、『あの場所』に着いたら泣いちゃうかもな。

「みなさん！お昼何がいいですかあー！」

運転している鳥居さんがみんなに昼食のアンケートをとっている。

「ハンバーグしかねえだ口オ？愚問だぜエ！和菓アア!!!」

「沙花叉もハンバーグがいいです！」

「こよもこよも！」

「拙者せつしやもハンバーグがいいでござる〜」

「拙……………者……………まあいいか。私もハンバーグがいいです！」

「ハンバアアアアアグ!!!」

うん。それしかありえない。そうに決まってるからな。

「わかりました〜。それじゃ行きましょう！ご馳走を食べに！」

「「「「「「「お——」「」」」」」」」」

吾輩たちが入店したのは炭火焼きのハンバーグが有名な、静岡にしかないローカルチェーン店だ。

当時の吾輩にもう少し資産力があれば、コイツらを沢山連れてってやれたんだが、まあ、とりあえず博士の尻尾を握りしめておいた。

「ひやつ!?!ら、ラブちゃんいきなりどうしたの!?!」

「なんでもない」

とりあえずお仕置きしておいた。1129億円分。きっちりお仕置きしていかないとな。

「何名様ですか?」

「7名です」

鳥居さんが答えた。

「こちらのテーブル席にどうぞ」

吾輩たちは4人席に二手に分かれて座った。吾輩のテーブルには柚葉ゆずはさんと、幹部が。もう一つのテーブルには、吾輩の大人しい部下（笑）と鳥居さんが座っている。

「ああ!ラブ様つ!2周年ライブ絶対見ます!!」

「ど、どうも…」

柚葉さんが限界ヲタク化している。さつきまでなんとも無かったのに、なぜ唐突にヲタクに？

……ああ、そういえばさつきまで柚葉さんは助手席で、吾輩は一番後ろの3人席だったからか？

面と向かつてなかったから……なのか？

まあいいか。

「吾輩はこの、一番おっきいハンバーグにしますけど、2人はどうします？」

「私もその一番大きなハンバーグで」

「ああ、アタシもそれでお願います!!」

「わかりました。すいませーん！（はい、お伺いします！）この、げんまんハンバーグ3つと、ライス大3つで！あ！あとかんぺえドリンク、コーラで3つ！」

「かしこまりました。すぐドリンクをお持ちしますね！」

店員さんに注文した後、吾輩たちは、することもないので、雑談することにした。

「そういえば、柚葉さんはなんでラプラスにハマったんですか？」

ナイス質問だ幹部。それは吾輩も聞こうと思っていた。

「あ、えつとですね、その……アタシ、結構前からホロライブは見てたんですけど、その、ラブ様はなんていうか、『お姉さん』っぽくて……」

「お姉さん!？」

オイ幹部、しばくぞ？

「ええ、なんだかよくわからない感情なんですけど、アタシよりも『お姉さん』って感じがして。で、アタシは気づいたんです。アタシに必要なのは妹属性じゃない！姉属性だったんだ!……つてね」

「ぐふっ!」

妹属性である幹部が吐血している。

でも確かにそうだな、ホロメンって結構妹属性多いよな。3期生とかみんな妹さんだつて聞いたし。

逆に、姉であるみこさんとか、まつりさんとかも、ぱつと見妹属性っぽいし。

こうしてみると、たしかに、お姉さん属性は少ないかもしれない。

「……………いや、自分で言うのは癪しやくだけど、吾輩の見た目そこまでお姉さんか？どっちかって言ったらちよこさんとかミオさんとかだろ？」

「幼女っぽい見た目とのギャップがいいんです（迫真）」

なるほど。この姉あつての鳥居さんか。

吾輩はすこぶる納得した。

「かんぺえドリンクですーすーあ、あとハンバーグ用の紙ですーハンバーグが来た時には、

この紙の端をつまんでくださいね！」

店員さんがテーブルにドリリンクと、ハンバーグが来た時用の紙を置いていった。このお店ではお客さんの前でハンバーグを二つにカットする。その時に飛び跳ねた肉汁が、こちらに付かないようにこの紙でガードするんだ。結構大きな紙でな。ハンバーグのプレートを上半分に乗つけて、下の端っこをつまめるくらい大きな紙だ。

まあそれはそれとして。

「「かんぺえーい!!!」」

ぺえも、ばいも、おんなじ意味だし。

かんぱいでも、かんぺえでも、どっちでもいいよな。柔らかければ。柔らかければ（大事なことなので2回——）

「かたくても愛するのが真の愛だな」

「急にどうしたの？ラブラス？」

「いんや？別にいい？」

「ラブ様のドヤ顔可愛い!!!アタシ!!!幸せ!!!」

ふっ、チョロいな（確信）

「可愛すぎて満額スパチャが止まらん……………つてアレ？スパチャできないぞ？なんでだ？」



「現実だからですよ」

「バーチャルも一種の現実だけどな幹部？ 吾輩たちはあくまで配信の為にインターネット使ってるだけだし」

「というか目の前で満額まんがくスパチャとかいう言葉が飛ぶと、なんだかヒヤヒヤする。生活費を削ったりしてなければいいんだが？

吾輩は心配になって質問する。

「……………柚葉さんってクレカ何枚持ってます？」

「10枚!!」

あうち……………これはアウトすわ……………。

「というかなんで10枚も持つてるんだ？ 法律的なアレでなんか制限されないのか？

「今回のスパチャ分は次回の枠でまとめて投げます!!」

「ちよつ!! 無理しないでくださいよ!! いくらなんでも生活費を削ったりしな——（ああ、いえ。株やって、金は腐るほどあるので。ご心配なく）……………え？」

「アレ？ 私の耳が壊れたのかな？ ラプラス、なんで言ってた？」

「なんか、金は腐るほどあるって…？」

「ええ。和葉に店を譲ってからは家でずつと株やってました。大手サブスクに先行投資しといた分が、どかつと来て、今じゃ数千億円です」



し、鉄板の上でパチパチ跳ねている。中は少し赤みがかつていて、とつても柔らかさうだ。

「押していきますねー！」

半分に切られて二つになったハンバーグを、今度はナイフとフォークで上から押して行く。切断面をさらにジューシーに焼くためだ。

押せば押すほど、肉汁と、炭火焼きの良い匂いが薫かおってくる。

「オニオンソースをかけますねー！」

仕上げにオニオンソースをかけてもらった。オニオンソースをかけた途端とたん、鉄板が今までで一番パチパチ跳ね出す。お肉とオニオンソースの匂いが混ざって、もうよだれが垂れてきそうだ。早く食べたい！早くパチパチおさまってくれ！

「あつ、アタシは自分でかけます」

柚葉さんだけは自分でかけるようだ。店員さんにかけてもらうより量も調節しやすいし、勿論もちろんアリだ。

パチパチがおさまってきた！食べ頃だ！

吾輩は一目散にハンバーグを一口サイズにカットして口に放り込んだ！

もぐもぐもぐ…。

「おいしいー！」

食レポなんてできないほど美味しい。

噛んだ瞬間頭の中で、電流が流れたんじやないかと錯覚するくらい美味しい。

美味しいとしか言えないくらい美味しい。

「ライス大です〜!」

ちようどいいタイミングでライスが運ばれてきた。吾輩は口にまだハンバーグが残っていたので、急いでライスを口に放り込む。

……。

……。

……。

——つは!一瞬気を失っていた!?

なんてことだ!?!この吾輩が食べ物に負けるなんて!?(わりといつもやってる)

でもしようがない。美味しいんだもん。

まあお母さんと幹部のハンバーグの次に美味しいな!うん!それは間違いない!!

つて!吾輩のバカツ!このタイミングでコーラを飲めば最高じやないか!!

ゴクツ!ゴクツ!ゴクツ!

「ぶはあ!めつつつつつつちや、美味しい!!」

「本当に美味しいね!また来ようよラブ!」

「ああ！約束だ！」

「アタシもついていっていいか？」

「勿論!!」

さて、そういえばあつちのテーブルの様子は…。

「やっぱり美味しいですね！」

「マジでやばすぎだろコレ（低音）」

「本当に美味しいでござる〜！」

「こよは賢いから思ったんだ。ここ住もうよ！」

アホなピンクココヨーテだ。

さて、吾輩も自分のご飯に集中しよう。

二口目は。うーん、胡椒こしょうでいくか！

■■■■■■■■■■

—— さ、最後の一口!!

ばくっ!!

~~~~~ (声にならない叫び)

「「「ちそうさまでした!!!」」

「「「ちそうさまでした!!!」」

吾輩、大満足だ。お会計の後のハツカ飴が甘くて美味しい。
おいしい。すごくおいしかった。

「それじゃあ！お腹も満たされましたし！とりあえず私たちの実家に行きましようか
！」

「「「「「おー！」「」」」」」

吾輩は今、心の底から来て良かったと思っていた。この旅がまだ続くと考えただけで、吾輩は、とても楽しかった!!!

ただいま秘密基地

おいしいものを食べてご満悦な吾輩たちは、遂に『あの場所』に向かう。

「それじゃあココからは場所を知っているこよりさん！お願ひします！」

「はーい！ペーパードライバーのこよにおまかせを〜！」

「……………オイ幹部。ちよつとこつち来い」

「何？ラプラス？」

「アイツに運転任せて大丈夫か？」

「……………いやあ、やつぱり、この風景は懐かしいね。東京に行ったりしてると田舎の良さが再認識できるよ」

「オイ、吾輩と話しているんだから、吾輩の目を見て喋れ幹部」

「ひゅ〜ひゅ〜ひゅ〜♪」

誤魔化すように口笛を吹き出した幹部を、吾輩はとりあえず放置することにした。

「すびー、すびー」

柚葉さんと、沙花叉とごさる達はお腹がいっぱいになって寝てしまった。

……場所を知らない鳥居さん。

……見た目のせいで免許を持ってない吾輩。

……運転が苦手な幹部。

……ペーパーとはいえ、一応ゴールドな博士。

この4人の中で運転できるのはわずか2人。そして幹部か博士だったら多分、博士の方が安全運転してくれると思う。

……何故かって？ 幹部の初配信思い出せよ。コイツやる時はやつちやう子だぞ。

中学生のときも行き当たりばったりで家出して、お兄ちゃんに甘えまくる(可愛い)この幹部よりは、博士の方が運転できそう……？

というのが吾輩の見解だ。

「じゃあ頼んだぞこより、くれぐれも安全運転でな？」

「うん！ アクセル全開！」

嗚呼。どうやら吾輩は人選ミスをしたようだ。

こよりがハンドルを握ってから3秒後、やつぱり鳥居さんにマップで行き先を伝えてからいけば良かったと吾輩は後悔したのだった。



まあなんやかんやあつたけれど、遂に着いたぞ——！

「「「ただいま秘密基地!!!」」」

吾輩たちが出会った場所。

吾輩たちが別れた場所。

吾輩たちが再集結した場所。

吾輩たちを語るのに、この場所はあまりにも思い出深すぎる。

「ここが秘密基地ですか!」

「おっ! ブランコあるじゃん! 和葉! 押してくれよ!」

「いくよー? そーれっ!」

「ひゃっほう!」

鳥居さんと柚葉さんとはとっても楽しそうだ。

「……………しかし、いざこうしてみると、何したらいいかわからないな」

「ラプラスがしたいようにすれば?」

「ラプラス殿に賛成するでござるよ?」

「こよもー!」

「沙花叉もー!」

「……………じゃあ、せっかくここに来たんだ。今まで話してなかった吾輩の、『秘密結社』の秘密を語ろうかな。……………鳥居さんと柚葉さんも、聞いてもらえますか?」

「勿論です！」

「推しの秘話……！」

「………ありがとうございます。………じゃあ、ツリーハウスの下で話しましょうか」

この秘密基地は山の中。よって吾輩たちはかつてココにツリーハウスを作ったんだ。懐かしい。あの頃は今よりずっと貧しくて、あの頃の吾輩の中では、今まで生きてきた中で一番楽しい時間だった。

そのくらい、吾輩の中でコイツらが大きくて、かけがえのない仲間だったんだ。

「………今から話すのは、h o o xが何故作られたのかという、いわば誕生秘話だ。鳥居さんたちにはまだ話したことが無かったので、丁度いい機会をただけて、嬉しいです………でも、今回みんなにはそもそもなんで吾輩がそこに至ったのかという、オリジン原点を語ろうと思う」

「原点……」
オリジン

「ラブちゃんの秘密結社へのこだわりの理由ってコト!？」

「つまちなかったら斬るでござる〜」

「怖っ?!?!」

「今日も平和ですねー。ねー?姉さん?」

「シャンパンコールでもするか?アタシはいいぞ?」

……コイツらは本当に自由奔放だな。鳥居さんたち含めて。

「……………コホン。それじゃあ……………話すぞ？」

みんなの視線が吾輩に集中する。

「まず、吾輩が秘密結社を創った理由。それは『世界を一つにして、平和であり続ける』
為だ」

「ヤバい……………涙腺が…」

「い” い” は” な” じ” だ” な” あ”

あ” !!!」

「ちよつと早い!?ちよつと早すぎるよ!?!」

鳥居姉弟がもう号泣し始めた!

「……………とりあえず続けるぞ?……………吾輩な。仲間が欲しかったんだ。でも、ホラ、吾輩地球とタメだろ?寿命が長すぎてさ。みんなとられるのがたつた100年。永くても1000年は超えないだろ?……………だから、だからさ。吾輩は仲間を作るつもりなんて無かったんだよ。ただ、自分1人で生きて、たまに家族に顔出して、1人で食べて、1人で働いて、1人で寝て。……………何年も、何万年も、何億年もそうやって生きてきたんだ」

吾輩は今まで溜め込んできた『独』を吐くように。

「でも、あの日、この場所でお前らと会って。……………で……………グスツ……………吾輩、初めて『こいつらと一秒でもいいから一緒に居たい』って思ったんだ。そう、思ったんだ……………だから」

みんなの方をみると。

「み、みんなあ……………泣くなよ。吾輩より泣いてどうするんだよお……………」

みんなは泣いていた。

「吾輩の人生は、今が一番楽しいんだ。だから、何かみんなにも楽しんでもらいたくて。だから……………だから吾輩は、『h o o X』を創ったんだ!!!!」

やつと言えた。つかかかっていた吾輩の心の声が今、やつと。

「……………吾輩についてきてくれて。本当に。本当に——!」

『ありがとう!!!』

風が吹いていた。頬を撫でる、夏の匂いが残った風。

みんなのぐしゃぐしゃになった顔を見て、嗚咽の混じった声をきいて、吾輩は。

「ただいまつ!!!!秘密基地!!!!」

ずっと言いたかったこのセリフを、みんなに伝えた。

「お前ら！言っておくが、ココはまだゴールじゃない！通過点だ！我らエデンの星を統べる者として、この地球を幸せで包むんだ！」

「「はいっ！」」

「よし！吾輩の話は終わりだ！あとは秘密基地でゆっくり過ごそう！」

吾輩はそう言つて、ブランコに乗る。

……懐かしいなあ。再会した時、みんなと会うまで吾輩はとつても不安だったわけ。

「……………ラブ」

「……………どうした？ルイ」

「私ね、今日のラブの話聞いてさ……………」

「な、なんだよ……」

「いや、『おんなじ気持ち』だなあつて……」

「——！」

「私も、ラブとずっと居たいって。でもそれが無理ならせめて『1秒でも永く一緒に居たい』って思つてさ……」

「……………そっか」

「だからさらプラス。コレからも……よろしく！総帥！」

「………おう!!!あつたりまえだ!!!」

「そおれ！」

幹部が急に吾輩の背中を押してきやがった。

「速い！」

「ハッハー！まだまだ行くよー！」

「うおおおおおおお！」

いつか来る別れに怯えるのではなく。

今訪れている有り余るほどの幸せを。

みんなと一緒に育んでいきたい。

吾輩は、エデンでいちばんの、『幸せ者』た！

声高らかに言おう！

ただいま！秘密基地！

「只今秘密基地。……………なんてね。ハッハー！」

「感動が台無しだよ馬鹿野郎」

「それがholoXらしいでござる〜」

「ルイちゃん面白い！」

「……………そういえばココのドラム缶風呂だけは、沙花又好きなんだよなあ……………」

……この調子じゃ、エデンを統べるのにあと何年かかるかなあ？

ま、いつか！

「「「「今が楽しいし！！！！」」」」

「微笑ましいですね、姉さん。……………姉さん？」

「……………？チーン／＼」

「ね、姉さんが立ったまま気絶している…!?てえてえの過剰摂取か……………くそっ！おかしい人をなくした！」

……………いやいくらなんでも気絶はないだろ。

……………というか早くこの姉弟くつつけよな。

うん。結婚しろ。そして爆発しろ。

「ラブ殿。心の声が出てるでござる」

「えっ、マジ？」

「ラブ。めっちゃ喋ってたよ」

「ラブちゃんもやっぱりそう思うよねー？」

「確かに沙花叉から見てもこれはもどかしいけどさ。……………まあいくらなんでも口には出さないよっ！」

「……………テヘツ☆」

吾輩はウインクして舌をペロっと出した。

「はうっ!?(尊死)」

鳥居さんも立ったまま気絶した。

やっぱり、この人たちは本当に面白いな!

吾輩のことをよくわかってくれている、吾輩にとつての大切な人だ!

鳥居さん達と会えて、本当によかった!

……よし!秘密結社の総帥としても!アイドルとしても!

吾輩!頑張るぞ!

「…………じゃあ、お前ら。いつもの名乗りをして、また旅立とうか!」

「「了解!」」

泣いて逃げたくなるほど辛いことがあった。

「そこに跪け!」

けれど、その度に仲間のことを思い出した。

「掃いて棄てるような現実を!」

こんな、吐いて捨てるような世の中を。

「一刀両断ぶった切る!」

変えられたらなああって。

「終わりになき輪廻に迷いし子らよ！」

ううん。違うな。変えるんだ。導くんだ。

「漆黒の翼で誘おう！」

誰が？

「我ら、エデンの星を統べる者！」

………勿論決まってる。

「「「我ら！秘密結社h o l o X
!!!!!!
「「「

「でござる〜！」

我々だ！

だから。

またな？秘密基地！

茶と山と血

やっぱり可愛いのは正義やで。ビバ！美少女！

………ちなみに静岡では美少女無罪は多分適応されます（適当）。
すくなくともワイの両親はそう言っていました。

「ずずず………ぷはあ」

「お茶、美味しいね。ラブ」

「ああ。茶畑を見ながらのティータイム。風情があるな」

「そろそろ何かメカ作りたいなあ……」

「全自動お茶汲み機なんてどうでござるか？」

「おお……沙花叉、いろはがまともなこと言ってるの初めて見た」

「ぶった斬るでござる〜」

「うおっ!?危なっ!」

h o o x は今日も平和だ。ラブラスさんがまったりし、ルイさんも同じように癒され、こよりさんはハイテンションに、いろはさんは物騒に、クロエさんは不遇に。

「ラブちゃんってばこういうときは本当に総帥らしいよね！」

「2人とも！早く沙花叉の手を！」

「はいっ！姉さん！行きましよう！」

「おう！わかっ——」

ワイが姉さんの手を引こうとした、その瞬間。

おそらく根が腐っていたんだろう。

巨大な大木が姉さんに向かって倒れてきた。

「姉さん危な——！」

そう言った瞬間、姉さんは俺を突き飛ばして。

ドゴオオオオオン!

木は姉さんを下敷きにして倒れた。

「嘘………だろ? 姉さん、俺を守るために…?」

「鳥居さん! 吾輩の魔法で——」

「ラプラスさん。私はいいです。早く結界を張って下さい」

「で、でもっ!?!」

「いいですから」

ラプラスさんは、とても迷ったような、ずぶ濡れの子犬のような表情を見せたあと、数瞬後には魔法を唱えていた。

「第10位階魔法！『オーバースールド』！」

「そう、それでいいんです。ありがとうございますラプラスさん。………さて」
俺は木をなんとか持ち上げようとする。

「ガツ………ゲホツゲホツ。か、和葉………無事か？」

俺は木にありつただけのパワーを注ぐ。

「お、お前が無事なら………いいんだ。本当に………よかった」
姉さんは気を失ったようだ。

「——うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお——」

俺はありつただけの、全身全霊の力で大木を持ち上げた。

「はあ。はあ。はあ………っ！ねっ、姉さん！」

大地の躍動が終わりを告げ。

木を持ち上げたあと、そこにいたのは——。

血まみれになった、
姉さんだった。

嗚呼、最愛の人よ。

「姉さん！ 柚葉姉さん！ 頼むから返事をしてくれっ!!」

「……………」

姉さんから返事が返ってこない。

それだけで不安がどんどん募っていく。

「ラプラスさん……………ラプラスさんは回復魔法とかって…」

ラプラスさんは、とても苦しそうな顔で、首を横に振った。

嗚呼。

柚葉姉さんの身体はもうボロボロだ。

医学を少し齧ったことがあるからわかる。

……………もう、『助からない』。

皮は捲れ、骨は砕け、内臓にも骨が刺さっている。

「!!」

「……………!!」

「~~~~!!」

「……………!!」

「~~~~!!」

holoXのみんなが必死に手当や、救援を呼んだりしてくれているが、もう、どうやっても助からないだろう。

嗚呼。

嗚呼、またか。

“ また ” 俺は、この人を護れないのか。

「……………和葉」

「——！ 和葉姉さん！ 意識が!!」

「……………ごめんなあ……………みんな……………アタシのせいで楽しい時間が……………本当にごめんなあ……………」

「謝らなくていい!!! 姉さんは悪くないんだ!!!」
どうしてあなたが謝るんだ。

悪いのは全部俺なのに。

「……………和葉。……………俺、お前のこと、好きだったぜ……………?」

「……………俺も、姉さんのこと、好きだったよ……………」

別れの時は無情にも、刻一刻と近づいてくる。

「鳥居さん……吾輩たちにも、お別れの時間を頂けますか？」

「——ええ！ありがとうございます……本当に、ありがとうございます……！」

嗚呼。神様どうして。どうして。

なんでこんなにも酷いことをするんだろうか？

姉さんが悪いことでもしたのか？

せつかくこんなにもいい人たちに囲まれて、幸せな人をなぜ不幸にする。

何故、何故。

嗚呼。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

俺は無力だ。

「……タシ……しあわ……った……」

最愛の人を護れないただの哀れな屑だ。

——ただ、でも。それでも、コレだけは伝えたい。

俺は震える姉さんの手を掴んで。

「姉さん。俺、あなたのことを、世界で一番。『愛して』ました」

「俺も、お前のこと、世界で一番『愛して』るよ……」

大好きな人に、好きだった気持ちも伝えたいのに。

俺の最愛の人がもう逝ってしまう。

だから、最後に一つだけ。

「――」

「……」

俺は姉さんに口付けをした。

姉さんはびっくりしてたけど、凄く幸せそうだった。

「和葉……さようなら。『愛してる』」

「柚葉。俺も、『愛してる』」

姉さんはもうあと数分もかからず天に召すだろう。

ひとりぼっちは寂しいけれど、でもワイにはホロライブのみんながいる。

だから、しばらく待っていてね？

『柚h……………（おいおいおいおい！なんじゃあこりや！）』

この声は。

「ルーベルトさん」

俺の背後から、居酒屋『鳥居』の常連さんの一人。河童の少年、ルーベルトさんが現れた。

「おい鳥居さん！一体何があつたんだ!?鳥居さんが抱いているその人つて柚葉さんだろ!?」

「ええ、もう、助かりません」

「諦めんなよ!!!おーい！キヤロ！」

「何っキヤルーベルト……………つてええええええ!?」

「おいキヤロ！ここで柚葉さんを助けられなかつたらキヤロムとの約束が果たせねえ！ナイフ持つてつか？」

「ルーベルト！食べさせるのはワシに任せろっキヤ！だからばっさり切り落とせっキヤ！」

「了解！」

ルーベルトさんはキヤロさんから受け取ったナイフで自分の指を切り落とした。

「いつてえー！」

「「「「……………ゾツ」」」」

holoXのみんなも引いている。ちなみにワイは慣れているから平気だ。

しかし、何故今そんなことを？

「よくやったっキャー！あとはワシに任せろっキャー！」

キャロさんは切り落とされたルーベルトさんの指を、肉団子状にコネ始めた。

そして、完成した緑肉団子を姉さんの口に近づける。

「あ……………う……………コレは……………？」

「怪我が治る肉団子っキャー！早く食べろっキャー！もしも死んだりしたら許さないっキャ

ー！死んだら絶対後悔するっキャー！」

「だ……………め……………だ……………もう……………噛む力も……………残ってねえ……………」

「——キャロ！口移しだ！」

「なるほど！いい意見っキャー……………鳥居さん」

「はっ、はい！」

「この肉団子を噛んで柔らかくしてお姉さんに食べさせてあげるっキャ

「えっ、で、でも…」

「……………『後悔』するっキャよ？」

「……わかりました!」

ワイは口の中で肉団子を咀嚼して、軽くペースト状にする。そして、姉さんの口の中に流し込む。

「……………和葉」

「……姉さん! 傷が!」

どんどん傷が癒えてゆく。内臓に刺さっていた骨は元に戻り、骨もどこも折れてないし、皮すらどこも捲れていない。

……………やがて、姉さんの身体は全て元通りとなった。

「和葉っ!」

元気になった姉さんが抱きしめてきた。

「姉さん……………本当に治ったの!」

「ああ!! 見ての通りだ!!」

奇跡。その二文字で片付けられるほどのことではない。まるでこんなの、『神様』だ。

「ルーベルトさん! キャロさん!」

愛する人の命の恩人だ。丁重に扱わなければ。

「ルーベルトさん、キャロさん。本当に、ありがとうございました!!!」

ワイは2人に向かって限界までお辞儀する。

感謝しても仕切れないからだ。

「……………なあ、鳥居さん」

「はい」

『『姉さん』を大切にな♪』

「——はいっ！」

「じゃあなあ〜♪」

ルーベルトさんは手を振って返って行った。

キャロさんのほうは姉さんに向かって話し始めた。

「置いて行かれた人というのは、とても悲しい気持ちになるっキャ」

「はい」

「だから頑張るっキャ！『後悔』するかしないかは！お前次第っキャ！」

「はい！」

キャロさんは姉さんに優しく語りかけた。

「……………あ！ルーベルトお〜!!待って欲しいっキャー——!!」

俺たちの命の恩人は、嵐のように過ぎ去って行った。

「姉さん……………無事でよかったよ」

「……………呼び方」

「……………え？」

「『柚葉』って……………呼んでくれないの？」

「……………『愛してる』よ。柚葉」

「アタシも、『愛してる』よ！」

こうしてワイたちは再び口付けを交わした。

「……………えっ、この場面めちゃくちやエモくね？」

「やばいね。うん。やばい」

「感動的でござる〜！」

「めっちゃ感動したんだけど（低音）」

「エモいねー！こよもいつかこうしてみたいー！」

嗚呼、最愛の人よ。

「……………とりあえず東京に戻ったら結婚しようぜ」

「……………賛成」

生きててくれて、ありがとう！

娘（息子）　さんを僕（私）に下さい！

「娘（息子）さんを僕（私）に下さい！」

「ええよ」

「やったー！」

「ええ（困惑）。吾輩達は何を見せられてるんだ…？」

「ラプ。考えたら負けだよ」

「お茶おいしいでござる」

「メロン美味しい」

「えつ、てゆうかなんで部屋の間にあんな立派な剣が置いてあるの？えつ？沙花又以外みんなノーリアクションだけど、えつ？アレって沙花又にしか見えてないの？えつ？えつ？（困惑）」

クロエさんがウチの宝剣に興味津々のようだ。

「おつ、お嬢ちゃん良いところ目をつけたね」

「あらあらあなた。今時の若い子は剣になんか興味ありませんよ？」

「えっ!? そうなのか!？」

「いや興味津々だったよ母さん」

「どっからどう見ても興味津々だったぜママ!」

「…………ママ? えっ、ママって言った? 柚葉さんってもう結構いい歳してるよな…?」

「ラブ、人のこと言えないよ」

「ラブ殿も同族でござる〜」

「柚葉さんかわい〜。こよのラボで飼い殺したい〜」

「ラブ様に褒められたぜ…! なあ和葉! 羨ましいかあ? オイ!」

「いやこよりさんのセリフはスルーするんだ」

「…………えっ、沙花叉、あの剣見ると何故か冷や汗が…………アレっ? 手が震えて…?」

「…………もしかして沙花叉の身体がああ剣を拒絶してる…?」

「ほら、あなた。やっぱ若い子には剣なんて眼中にないんですよ」

「そうみたいだな」

ああ、クロエさんが宇宙猫みたいな顔してる!?

うちの両親がすみません…。

「父さん、母さん」

「どうした和葉?」

「あらあらどうしたの？」

「……………あの剣について、俺も知りたいたいんだけど」

「母さん、最近の若い子は興味ないんじゃないのか？」

「おかしいですねえ…？最近の流行はV t u b e rだと思ってたんですけど…？」

「……………ピク……………」

この単語にワイ達は身体を少し揺らしたが、何事もなかったかの様に、ただ平然と話を聞いた。

いやまあ、別に隠してるわけじゃないんだが、こうもドンピシャで言い当てられると戦慄すると言うか、恐々と言いますか…。

……………母さん、昔から直感が鋭いんだよな。流行も確実に抑えてるし。……………まあ天然だけだ。

「……………じゃあ話すか。この剣について」

父さんは置いてあった剣を掴んで、鞘から抜き出した。

抜かれた身は案外手入れが行き届いていて、まるで新品のように光り輝いていた。

「この剣の名は聖剣『マーズ』。かつての人間の国の王様の剣だ」

「初めて聞いたんだけど」

「パパどうゆうこと？」

「えっ、吾輩今なんかとんでもないことに聞いてない？」

「なんかすごいね」

「アレはまさか風真の妖刀108の中の一つ…!？」

「多分違うと思うよ」

「……………やっぱり沙花叉の勘は当たってた。……………恐ろしいほどの、『憎しみ』を感じる……………」

「この剣の持ち主はキャロム。和葉。テメエのご先祖様だ」

「……………えっ。ワイの？」

「そう、お前の」

……………えっ、初耳学。

「そして、この剣と合わせて、この家に受け継がれて来たある話がある。それは、まあ、長げえんだが。」

『もしも神に祈られねばならぬほど、打ちのめされた時があったとしよう。その時、必ず、河童の少年と、精霊の少女が現れることであろう。それは我らの盟友であり、家族だ。必ずや我が子孫の助けとなるう。』

著 マーズ・キャロム』

……………つて感じだ。わかったか？」

父さんの話を聞いて。

「「「「「……あつ」「」」」」」

「どうしたのみんな？ 顔色が悪いわよ？」

「そうだな。確かになんかヤベエことに気がついちゃったような顔をしてるな」

……。

「……姉さん、もしかしなくても……」

「ああ、間違いねえ。アレだろうな」

……やっぱりか。

「一体どういふことなんだ？」

「話が壮大すぎてよくわからないね」

「わけわかんないでござる〜？」

「あの人……人？……あの河童さんの指、サンプルに分けて貰えばよかったなあ……？」

「……いや、こよちゃん。沙花叉の勘が言ってるよ。また必ず会えるって」

みんなが思い思いに感想を言い合う中で、ワイの心は再びルーベルトさんについて埋め尽くされていた。

……色々と疑問点が多すぎる。

なんでワイのご先祖様と知り合いなのか。とか。

なんであんなに自分の体を傷つけることを躊躇わないのか。とか。

……まあそこは些細なことだ。

一番の疑問点はルーベルトさんと一緒に居たキャロさん。

普段はルーベルトさんに対して煽りまくっているメスガキ（匿名希望の河童の少年の評価）なのに。

なんであんなに姉さんに対しては真剣な面持ちで、そして何故『後悔する』と断言出来たのか。

それは、まるで――。

「自分がそうだったから……？」

俺たちの言葉が重なって一つになった。

「……姉さん」

「和葉。俺、次会った時はちゃんと聞いてみるよ。アタシの口から、あの人へ！」

「……ああ！」

とりあえず、今は、まだ。

「こたつあついでござる〜」

「それな」

「ラブ。みかん剥いたよ？」

「えー。ルイ姉。こよのは？」

「沙花叉のもー！」

「ガハハハハハ！あついな！」

「まだギリギリ8月ですからね〜」

……この景色を。守り続けよう。

「姉さん。俺、コンビニ行くけど、行く？」

「おう！着いてくぜ！」

とりあえず酒買ってこよう。そうしよう。

せつかくの実家だ！はっちゃけるぞ！